
アザーサイド

たいしょ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アザーサイド

【Nコード】

N95830

【作者名】

たいしょー

【あらすじ】

アザーサイド…好評連載中。

- 1 - (前書き)

アザーサイド。” o t h e r s i d e ”

レッチリの名曲から。

アナザースカイとかアナザーヘブンとか迷ったけれど、しっくりきたタイトルで。

一番簡単な和訳は『別面』違った一面とか。…裏側とか。

レッチリでは『別世界』あの世』的に使っていますが。

決してパラレルではない。でも確かに存在する、アザーサイド。

年末からずっと書きたくて仕方がなくて。

やっと形にできそうです。

「ちくしょうっ、どいつもこいつもバカにしゃがって」

俺はひどく荒れていた。目の前の空き缶を蹴り飛ばす。

どれだけ飲んでも、悲しみはなくなりやしない。ただ気持ち悪さだけが…残る。

およそ2時間前、結婚を約束していた彼女にフラれた。

『他に好きな人ができた』無機質に機械のように告げられて、広くなった部屋と自由を手に入れた代わりに、希望すら失った。

アイツのためを思い、働いて働いて…。その答えが”もっとかまって欲しかった”だよ。

バカ野郎。それは俺か？お前か？

自棄になっていた。

目につく全てが敵に思えた。

くそっ。俺が何をしたっていうんだ…違う。何もしないのが悪かったのだ。

フラフラとおぼつかない足取りで、壁を頼りに前に進む。こんな時

でも進むんだな。どこか冷静にそんなことを思っ

て。『酔ってますねえ。大丈夫ですか？』

聞き慣れない声が頭の上から鳴る。

「あん？なんだお前は？関係ないだろ？ほっといてくれ」

煩わしかった。人の声、行き交う車、街の喧騒。…いや、音そのものが。

『いやゝ見たところ、癒しを求めちゃいませんか？僕にはそう見えましてね』

…即座に間に合ってるとは言い難く。目の前に立つ、ヒョロいお兄ちゃんの飄々とした話し方に、つい耳を傾けた。

「どうせぼつたくりだろ？」

『いえいえ…そういうものではございませんよ。あくまで自由恋愛。僕はその扉の前までご招待差し上げるだけのものです』

行き着く先は…天国か地獄…か。

どうでも良かったが、とにかくどこかで少し休みたかったのも事実で。

地べたから伝わる冷たさに、俺は骨まで凍えていたから。

「それはどこにあるんだい？」

『おっ？やっぱりお客様は僕が見込んだだけのことはありますね。それでは僕に着いてきてください』

スツと差し出されたその手を利用して、何とか重い腰を地面から引き剥がす。

肩を借りて歩いていくと、ドアがズラリと並ぶ建物が見えた。漫画喫茶のように立ち並ぶドア。それぞれが個室になっているのだろう。

『驚きましたか？それとこちらを…』

手渡されたものは、カギと一枚の名刺？

『そちらが”カギ”となっています。ではごゆっくり…』

「おい、ちよつと金は」

それに返事はなく、また闇の中へ消えていった。

まるで”ウオッチマン”アリスのウサギみたいだ。

俺はもう一度手の中を見て、現実だと確認した。

ホテルのルームキーのように”6”とだけ彫り込まれたカギと…名刺。

あまりの不可思議さに目が少しだけ醒める。

…人間とは現金なもので、長年付き合った彼女との別れの痛みより、目の前の興味を優先してしまう。

大きく”6”と書かれた扉の前に立ち、カギをゆっくりと回す。

カチリと音が鳴り、扉が開いた。

恐る恐る中に入ると、静かに光るものがある。…あれはPCのモニターか。

縦に長いスペースに、座卓とモニターが鎮座する。暖房がついているみたいで、ほのかに温かい。

キョロキョロと辺りを見回しても、他に何も見当たらない。少し煮詰まったコーヒーがあるぐらいか。

「これじゃあ漫画のない漫画喫茶じゃないか」僕は思わず声を上げた。

仕事でもないのにPCになど向かいたくもない。

実を言うと少しだけ、セクシーなサービスを期待していたこともあ

り、興ざめしてしまった。

上着を放り投げ、ゆったりとしたイスに座り込み、コーヒーをひとすすり。

…温まる。ひどく重い頭を一つ振って、深いため息を一つ。

…何やってるんだろ…。

あんなお兄ちゃんに騙されて、出て行く時にはいくら請求されるかわかりやしない。

…帰るか。温まり、少しは頭もマシになった。飲みかけのカップをテーブルにコトンと置いた。おっと。そんなに手荒く置いた覚えはないのだが、少し雫が跳ねてしまった。

備え付けのティッシュで拭こうとすると、先ほどの名刺が目に入っ

た。
「えっと…なにになに…」アザーサイド」？」

そこには彼の名前などではなく、ただ”アザーサイド”とロゴが書かれ、その下にはURLが印刷されている。

安いトナーで印刷されただけの、安っぽい名刺。

『こちらが”カギ”となります』

ふと彼の言葉を思い出した。

このURLもカギと…いつのか？

僕は目の前のPCにそのURLを打ち込んだ。

【アザーサイドへようこそ】

軽快な音楽と共にロゴが浮かび上がる。

俺は慌ててボリュームを下げた。入った瞬間やクリック毎に鳴る音楽は、ストレスに感じるから。

マリ…アカネ…サキ…。

女の子の名前がズラリと並び、クリック出来るようになっていた。

とりあえず上からクリックすると…【入室できません】の文字。

…わけがわからない。

上から順にクリックして…やっと入れた部屋が【リコ】

入れた喜びより、わけのわからない不思議さだけが身を包んだ。

【リコ】の部屋に入ると、チャット画面が開かれ、無機質に「6番様が入室しました」と打ち込まれる。

…なんだこりゃ。酒の効果でまだにぶる頭を一つ掻きむしり、濃いめのコーヒーをもう一口飲んだ。

【<<こんばんは】

無機質に画面にテキストが流れる。

…たぶんリコなのだろう。おそらくは偽名であるが。

【<<会話しようよ?】

…めんどくせえ。俺はタバコに火をつけ、黙って見ていた。

【<<癒されたいんじゃないの?】

挑発的なセリフにも俺は動じない。…いや、下手に動きたくないだけかもしれないが。

仕方ない。どうせ家に帰っても一人だ。暇つぶし程度にかまってやるか。

【<<目的はなんだ?】

【<<目的?あなたを癒すこと】

【<<テキストで？無理な相談だ。言葉だけで人を癒せるのなら、誰も医者には通わない】

カタカタとキーを叩く音だけがこだまする。

【<<深く傷ついたのね。テキストだけじゃないわ。あなたがそう望むなら。ねえ、名前教えてよ。ハンネでもいいからさ】

…名前。個人情報が出さないのが常識。今、この部屋すら監視されているかもしれない。

だから俺はいつも使っていない思い付きで答えた。

【<<じゃあ…ゾラで】

【<<サッカー選手の？】

いくつなのだろうか？それなりに知識はあるということか。俺はいつの間にか楽しくなっていた。

【<<そう。よく知ってるね】

【<<セリエA好きだからね】

少しの間、ゾラの不運とバッジオへの敬意。トッティの王子っぷりで盛り上がる。

【<<そういえば、さっきの望めば会えるっていうのは…2次元で

？それとも…】

およそ愚かに見えるだろう。針が仕掛けてあるとわかっていて、食らいつく魚のように。

習性。目の前の餌を我慢できるほどは冷静ではないのだろう。笑うなら笑えばいい。自分でさえそう思うのだから。

【くくそれともの方だよ。でも少しお金はかかってしまうんだ。それと本番とかはなし。そういうサービスではないからね】

…やはり、じゃないとおかしすぎるよな。逆にお金の話が出てほったところもある。

ただ…チャットで会話してわかったことは、人間は誰も孤独を好まないということ。例え、傷ついた瞬間でさえ、誰かと会話することで少しは忘れられるということ。

【くくわかった。ただし、条件がある。君がいくつかは知らないが、犯罪に巻き込まれるのはごめんだ。まずは年齢を証明すること】

【<<あたしは20歳だよ。会った時に免許証を見せるわ】

…少しひっかかる。免許証と言えば、住所や生年月日が記載されている”身分証明書”だ。それを見たこともない俺に…いや、チャットの相手に見せるというのか？

…ならば。

【<<もう一つ。俺は制服が好きだから、女子高生の制服で来ると。もちろんこの季節だから、上着は来てもいいけど】

…さあ…どうでる。それでも来るようであれば、斡旋の可能性が極めて高い。

来なければウオッチマン（案内人）の言う通り”自由恋愛”なのだろう。可能性はゼロに等しいが。

【<<わかったわ。何時にどこで待ち合わせる？】

左手の時計を見ると、21時をまわったところだ。

変なことが起きないよう、人が多い場所がいい。

”駅”がいい。

【じゃあ中央駅に、1時間後で。】

【いいけど…補導されない？その格好だと】

【長めのコートで隠せばいい。じゃ…どうやってコンタクトを取る？】

【じゃあ携帯鳴らして。番号は090-*****だから。もちろん非通知でかまわないよ。ゾラは心配性だね】

…当たり前自己防衛を若い子は”心配性”と表現するのだな。覚えておこう。

そっぴや”元”彼女にもいつも文句言われたな…。”石橋も割れちゃうわよ”なんてね。

嫌なことを思い出した。まだ見ぬ”リコ”に思いを馳せながら、俺は外に出た。

冷たい風が頬を撫でる。”お前は何をやっているんだ”と言わんばかりに。

一つだけ言い訳をするのなら、俺はずいぶんと疲れていたんだ。冷静な判断なんて忘れちゃうくらいにね。

ただ、目先のことしか見えていなかったんだ。

帰りにウオッチマンに挨拶しようと探したが、見つからなかった。またどこかで客を見つけているのだろう。

ここから自宅までは15分。

酔いも覚めてきて、幾分足取りもしっかりしてきた。

誰も待たない部屋に帰り、衣服を脱ぎ捨てる。もう誰も拾ってはくれないのに。

コックを捻り、熱目のシャワーを浴びながら、むせ返る思い出に襲われる。

二つ並んだシャンプーも、一つだけになっていた。

愛がなくなれば、もう”ホーム”ですらないのかもしれない。

少なくとも”戻るべき場所”とは思えなかった。

ベッドの下の引き出しを開けると、数えきれないCDの列。俺はそこから2枚取り出し、チェンジャーのスロットに滑り込ませた。

音と共に流れ出るのは…思い出。始まりの音。

こんな気分の方は、やはりUSよりUKを聴きたくなる。

バスタオルで頭を拭きながら、汚れた衣類を洗濯かごに放り込む。

R a d i o H e a d が耳に優しい。

まだ痛みの残る部屋の空気を変えてゆく。

お気に入りのジャケットに袖を通そうとして、ふと我に返る。…もし本当に制服で来たら、ヤバイのは俺の方じゃないのか？

俺は少し慌てて若づくりした。いや、そこまでの年齢でもないが。ちょうど25歳。幸い童顔ではあるが、やはりジャケットを身に纏うと、年上に見られるのは仕方ない。

黒のスキニージーンズに、赤いチェックのシャツ。

ダウンジャケットに、ニット帽。これでもし会社の人間に会おうと気づかれないだろう。

まるでスパイ。自分の変装に少しおかしくなった。もちろんおかしいのは、思考回路でもあるが。

酔いが覚めるに連れて、冷静な自分が顔を出す。

”喪にふくせ”と。

今日ぐらい悲しんでもいいだろうと。自慢のコレクションの中から、これでもかというぐらい、憂うつな気分になれる曲を聴きながら…泣いてもいいだろうと。

だけど俺は生きているわけで。悲しみに囚われて、さめざめと別れを惜しみ、恨み言をつぶやくより、まだ見ぬ”リコ”と会った方がよほど有意義なのではないかと、冷静な自分に言い返した。

もちろん騙されているのは承知の上だが、とにかくこの部屋に一人ではいたくなかったのだ。

幸いというか、結婚資金だった貯金もあるし、ボーナスだって出たばかり。

多少の贅沢はしてもバチは当たらない…はずだ。

腕時計を見ると、約束の30分前。出るのにはちょうどいい時間だ。

リモコンでオーディオのスイッチを切る。

【good bye】と文字が流れる。

その羅列にさえ、感傷的になる。【サヨナラ】は…痛いよ。

思わず吐きそうになる衝動を抑えて、家を飛び出した。

ポケットを探り、イヤホンを探す。ミュージックはどんな時も平等だ。

気分によって多少表情を変えることがあるけれど。

UKな気分の俺はオアシスを鳴らす。

別れに傷ついた俺が求める音が”オアシス”なんて、笑えるよな？

寒さに少し首をすくめながら、駅までの道のりを楽しんだ。

帰路につく人の群れを見ながら、羨ましく思った。

帰る場所があるのだから。

俺にはもう…見当たらないから。

オアシスは。

少し感傷的になりながら、その波を見つめる。

この時間からじゃ圧倒的に帰る方が多いのは、ごく自然なことだ。

その中で、異質な存在を見つける。

本当に浮き出ているような感じで…オーラがある。

行き交う人も、思わず振り返ってしまうような。

モデルなのか？圧倒的な美貌は、ひどくこの街には似合わない。

人の流れに逆らって、スツと構内のベンチに腰かけて、携帯を開いている。

白のロングファークートに、カーキ色のロングブーツ。すらりと伸びる脚がなまめかしい。

…まさか…な。

俺はゴクリと唾を飲み込み、彼女の番号が出ている画面を握りしめた。

一つかぶりを振って、息を大きく吸い込んで、震える手と心を落ち着かせようと試みた。

…違う。あんな綺麗な子であるはずがない。そう確信しているのに、汚い心は正直で。（あんなに綺麗な子だったらいいのに）と、余分に緊張感を高めていた。

約束の5分前。184と打ち込んでから鳴らす。

目はあの子に釘付けのまま。

コールが鳴るかならないかの内に彼女が出る。

『ゾラさん？着いたの？』

俺は震えて動かない口をもぐもぐと動かそうとした。

「…ああ。…リコは着いたの？」

あの子も電話に耳をつけている。いや…偶然かもしれない。

『とつくに。白のファークートを着てるわ。南口のベンチ』

…間違いない。あの子だ。俺は震える手で電源を…切った。

…そして、背中合わせてベンチに座った。

少しの沈黙のあと、急に彼女が口を開いた。

『もしかして…ゾラさん？』

「ああ」

『…どうして隣じゃないの?』と笑う彼女はまるで可憐な少女のよう。

「自信がなくてね…。こういうの初めてだしさ」

『よかった』

何に對してのよかったなのかはわからないが、それは俺の気持ちを落着かせる薬のようで、ひどく即効性があった。

「それでどうすればいいんだい?」

『…じゃあご飯でも食べる?』

「そうしようか」

背中合わせから正面を向き合う。綺麗だ。どうしてこんな子が…いや、深くは考えないようにしよう。

どうせ同情してしまうだけだから。それならば、この瞬間を楽しもう。

まるで当然のように腕を絡ませる彼女。

並んで歩くと、少し鼻が高かったが、どうしてアイツなのと言われているようで、変な気持ちがあった。

とりあえず少し奥まったカフェバーに入り、俺はビールをリコはワインを注文した。

「乾杯」

グラスをカチンと鳴らして、ビールを喉に流し込む。

『なんだか…オシャレだね』と小さな声で話すりこ。

「別に普通に話してもいいんだよ？」と思わず、少し笑ってしまう。

彼女は思い出したようにカバンを探り、スツとこちらに差し出した。

免許証だ。

あまりジロジロ見つめるのも失礼だと思い、名前と年齢だけを確認してスツと返した。

『信用してもらえた？珍しいよね…』

不安と何かを押し殺したような言葉。

「何が珍しいの？」

『…大抵はね、ジロジロと穴が開くまで見つめたり、写メール撮ったりする人もいるぐらいなんだよ』

「…それに何の意味もないよ」俺はあくまで穏やかに言った。どうせ…偽物だろうとは言わずに。

『ふうん』わかったのか、わかっていないのかはわからないが、彼女はワインを口に運んだ。

絵になる。唇に運ばれるルビーのような赤。

相当飲んできた俺は何も頼まなかったが、やがて彼女が注文したベークンサンドがやってくる。

それをワインで流し込むようにたいらげ、俺はそれを肴にただ黙って飲んでいた。

気を使える子なのだろう。ころころと表情を変え、会話も弾む。

酒の影響もあるのかもしれないが。

軽い食事を終え、これからどうするかを話している。どこかで落ち着きたいのもある。…が、家に帰るには不用心過ぎるし…何より帰りたくなかった。

…それは、彼女も同じようだったが。

『…帰りたくないな…』

「それは俺もだよ」

『…じゃあ泊まっちゃおっか？ゾラさんが変なことしないと約束できるなら』

「しないよ」

心の内を見透かされたように、先回りで釘をさされた。そりゃあわよくば…と考えてしまうのは男の性でもあるが。

そんなことよりもただ話していたかった。刹那の慰めより、何か明日へと残るもの。

『知ってるよ』と笑う彼女の方が一枚上手ではあるが。

タクシーに乗り込みホテルの名前を告げる。ドライバーの羨ましそうな眼差しは無視して。

『広いねー。あたしシャワー浴びてくるね』

恥ずかしげもなく次々と纏っている衣服を脱ぎ去る。本当に中は制服であったが。

シャワールームに消えた彼女を確認して、衣服を畳み、バスローブとタオルを置いた。

そしてベッドルームの端に移動した。ここからなら見えないはず。

シャワーの音をかき消すように、テレビの音量を上げ、つまらない画面を見ていた。

つまらない画面を見るくらいなら、いつそ砂嵐の方が落ち着くのではないか？

目の前をチラチラと動く画面を追いながら、そんなふうに思っていた。

キュツキュツとコックを捻る音がして、シャワーが止まる。

なぜか少し身を固くする。緊張しているのだろう。

そんな自分が少し馬鹿らしく思えた。

ガチャリとシャワールームの扉が開く。

俺はいつそう画面に集中した。ただ動きを追うだけであるが。

見たい衝動を必死に押さえ込む。まるで鶴の恩返しどころか、鶴による生殺しである。

ガサゴソと着替える音がする。

こちらに近づいてくる足音。俺は知らないそぶりを続ける。

次の瞬間、思いもよらない行動に声をあげそうになる。

急に後ろから抱きしめられたのだ。びっくりして振り向くと…彼女

は泣いていたのだ。

どうして？わけがわからない。…が、とりあえずまだ水気の残る身体を抱きしめた。

桜色に赤みがさした身体。まるでこどもをあやすみたいに、俺は髪を撫でた。

『…いきなりごめん』

「いいけど…どうしたの？」

『あなたが優しいから…』

…どこがだろう？これも作戦の内か？涙を目の前にしても、そう考えてしまう俺は、やはりどこか傷ついているのだろう。

『普通ならね、もうとつくに押し倒されてもおかしくないじゃない。無理やり一緒に入ってきたりさ、下着を隠されたり…。でもあなたは、違った…』

…たったそれだけのことで、泣くなんて…どれだけひどい生活なのだろうか。

【騙されるな】理性が必死に警報を鳴らす。さつき裏切られたばかりじゃないか。いや、この子ではない。女なんてみんな一緒だ。違う。絶対に。いや、違わないね。

心の中の葛藤は続く。

「それはただ俺が臆病なだけじゃない？こんな状況でも何一つできないのだから」

彼女は少し黙り込み、そつと俺を慰めるように唇を重ねてきた。

『優しさのお礼。あなたは臆病なんかじゃないわ。目の前の感情に流される方が、よっぽど臆病だよ』

今まで何人とも唇を重ねてきたけれど、リコは誰よりも優しい感じがした。

「ありがとう」

中学生の時みたいになぜか照れくさくて。二人で顔を見合わせて笑ってしまった。

『ねえ…明日は仕事？』

「そうだね。明日まで」

『…明日も会える？』

…俺はその問いに何も答えられなかった。

別に会う気になれば会えるのだろうが、決定打がない。動くにも理由が必要だから。

『…そうよね。初めからわかった。世界が違っただけ』

涙をたたえたまま、哀愁を帯びた表情もまた、すごく綺麗だと思った。

…否定はできない。確かに俺は…普通のサラリーマン。彼女は…日のささない世界の住人。

それに…こんな綺麗な子が、商売抜きで一緒にいるはずもない。分不相応なのはわかってるつもりだ。

『ねえ…何か言ってよ』

音楽ならいくらでも選べるのに、言葉はひどく選ぶのが難しい。

「ごめん。いろいろと考えていたんだ。間違わずに聞いてほしい」

慎重に言葉一つ違えないように。

「確かに働いている世界は違うとは思っただけで、ここに俺がいて、リコがいて。俺たちが生きる世界に違いなんてない。ないんだよ」

なぜだか俺は熱くなっていた。

「確かに俺はこういうのは初めてだし、よくわからないけど、楽し

かったんだ。それは信じてもいいだろ？」

リコは黙って頷いていた。

「俺、今日婚約者にフラれてさ。けっこう自棄になっていたんだ。なんだかどうでもよくなって。それで偶然あんなことになって。最初は疑ってた。今も少しだけ」

「…そうだったんだ」

「でもリコって笑えた。楽しかった。それは嘘じゃないんだ。…だから、そんな悲しいこと言っなよ」

自分でも自分がわからなかった。なぜこんなにもドライでいられなかったのか。

…所詮ある種の”契約”でしかないのに。

ふうふうと切れる息。俺は備え付けのエビアンを飲み干した。

『ありがとう』

一呼吸おいて、静かになった部屋に響く。

彼女は部屋の照明をすうつと落とした。…たぶん泣いているのだろう。時おり鼻をすすする音が聞こえる。

俺はソファ―に腰かけたまま、それを見るでもなく、見ないでもなく、ただ黙っていた。

こうしていると、およそビジネスなんてことを忘れてしまいそうだ。どこにでもいるただの”女の子”じゃないか。

涙の雨も和らいだ頃、微かに衣ずれの音がする。

『…ねえ、どうして離れたままなの？』

誘うように、リコがささやく。

「泣き顔を見つめるほど悪趣味じゃないんでね。泣き止んだかい？お姫様」

俺は少し笑いながらそう答えて、ベッドサイドに歩み寄った。

少しは暗闇に目も慣れてきた。俺たちは、まるで恋人同士のように、指を絡ませる。それを制するように、少しだけ強く握りしめた。

そして、ゆっくりとリコは語り始めた。自分のことを。信頼の証として。

今の仕事を始めたのはもう半年ほど前。

理由は…生きるため。ただそれだけ。

黙ってニコニコしていれば、お金が入ってくる。あたしはあたしに値段をつけたんじゃない、時間を切り売りしているだけ。退屈を埋めるためでもあるけれど。

…詩的な表現だと俺は思った。

でもね、お金が絡むと男って本性が出て。下心なんてかわいいものじゃないわね。ただの性欲の塊。セックスがしたいだけの獣とはよく言っただものよ。

少し男として肩身は狭いが…これだけの美貌なら、欲に流されても仕方ないのかもしれない。

ただ、信じてほしいのは、あたしは一度だって、あたしを売ってはいないってこと。商売女にもプライドはあるの。

そりゃそうだ。蔑んだ目で見る奴も多いだろうが、人間だもんな。同じ心を持った。

『でも、あなたは違った。ちゃんと女の子として扱ってくれた』

「慣れてないだけだよ」

もし慣れていたら、俺もそういう扱いしていたのかな…？いや、どうだろうな。

『それが嬉しかったの。明日も会いたいなんてワガママ言って…ごめんね』

押して引く。常套手段じゃないか。騙されるな。と、さっきから頭のサイレンは鳴りっぱなし。レベル4。国家規模の重大な事件。

でも、どうしてリコはこんなにも、小さく見えるのだろう…。

『ワガママついでもう一つ…お願いがあるの』

「俺にできることなら」

『あたしが眠るまで…そばにいてほしいんだ』

確かに、他人の温もりは癒す効果がある。

そんなことはお安い御用と、俺は黙って右手を差し出して、隣に寝転んだ。

最初からそこにあるかのように、すっぱりと収まるリコの身体。

『…ありがとう』

そう呟いて軽く唇を重ねた。

耐えるんだ、理性。お前は獣じゃない。風呂上がりの髪の毛の香りが鼻腔をくすぐる。それが余計に胸のどこかを刺激して。

でも身体を重ねなくても、温もりは感じられるんだな、と今さらながら気づいた。彼女とは、いつしか義務のようになっていたもんな…。

ふと思い出すと、フラッシュバックの様に、胸を様々な思いが駆け巡り、縦横無尽に爪痕を残す。

思わず、涙がこぼれそうになったが…横ですうすうと寝息を立てるリコを見ていると、なぜだか心が落ち着いていく。

…俺も少し眠るか…。と、その時。

激しいバイブ音と共に、テーブルが音を立てた。

俺は彼女を起こさないように、そっと腕を引き抜いて、それを止めた。

もちろんこんな深夜に俺の携帯は鳴るはずもない。

じゃらじゃらと色んな物がついた…リコの携帯。

その中でもとりわけ存在感のある、おそらくは手縫いであろう小さな熊のぬいぐるみ。

ブランド物に彩られた彼女の…最後の砦なのだろうか？使い込まれた色あせが、それを強く思わせる。

彼女は幾度の夜をこいつを握りしめ耐えたのだろう…。

大事な品には違いない。シルクハットを携えた、茶色のタオル地のナイト。

確かに、古ぼけてみすばらしくも見えるが、俺にはそれすら誇らしげに見えた。

俺はそつとそいつを持ち上げ、カバンのベッドに横たえた。オヤスミ。また明日。そう呟いて、俺はもう一度リコの隣に潜り込んだ。

いつの間にか眠ってしまっていた。けたたましい電子音に不快感を覚え、酒の残る頭にはことさら大きく鳴り響いた。

伸ばした右手にはもう…重みを感じない。

それに少しの寂しさを覚え、俺はむくりと身体を起こした。

…シャワーでも浴びるか。幸い今日は午後からの出社だ。年内最後の案件を確認して、整理整頓すれば…正月休み。

ふわあ…と一つあくびをして、シャワールームへ向かう。

もうもうと立ち込める湯気に、少しずつ目が覚める。しばらくの間、頭からシャワーを浴び続けた。

…それにしても。昨日、少しはつながったと思ったのに、やっぱり演技だったのかな…。挨拶くらいしてもいいだろうよ。

いつの間にか煙のように消えてしまった彼女。

まるで夢のようだ。いや…夢ならもう少し…サービスしてくれても…と考えてしまうのは、やはり俺も男と言うことが。

現代版『鶴による生殺し』では、泣き顔を見られたので、消えてしまいました。もちろん高そうな反物など残さず、切なさをのこしていきましたとさ。

…めでたくねえな。

シャワールームで身体を拭き、歯を磨き、髭を剃る。

呑気に歌なんて口ずさんで、ドアを開けると満面の笑みで『おはよう』と声が飛び込んで、心臓が3秒ほど止まりかけた。…いや、止まった。

その場でヘナヘナとへたり込む俺に、無邪気な顔で『ん？どうしたの？のぼせた？』なんて聞く目の前にいるリコ。

心底からため息をやつとの思いで吐き出して、呼吸の仕方を出した。

「…びつくりしたあああ」

当の本人はわけがわからないようであるが。確実に寿命は縮んだはずだ。

これは貸しにしておこう。

俺は高鳴る鼓動を抑えながら、だっていなかったじゃないか、と何とか言った。

『だって…よく眠ってたから、悪くて』

俺は大きく息を吐き出し、酸素をたくさん取り入れた。

「…もう帰ったかと思ったのに」

『そんなに薄情に見えるせつかく軽いもの買ってきたのに…』

片手にぶら下げたコンビニ袋が、所在なく佇んでいる。

「だって…本当にわからないから。俺だって…寂しかったよ。何だかつながった気持ちになってるのは、俺だけだったのかつて。やっぱり…契約だったのかつて…」

息継ぎ無しで、べらべらと気持ちをまくし立て、その後で少しだけ後悔した。

傷つけるには充分だったらしい。目の前でみるみる涙が溜まっていた。

消えてしまいたかった。いつそ夢なら…。

バスタオルを腰に巻いたままの間抜けな格好で、俺は平手打ちくらの覚悟を決めた。

…が、意に反して返って来た言葉は『ありがとう』だった。

もしかしたら…彼女もそう考えていてくれたのだろうか？

いや…相手は幼く見えても女性だ。魔性…簡単に信じては…いけないはずなのに…。

美貌だけじゃない。節操がないと言われればそうなのだろうが…この目の前いる感情を豊かに表現するリコに…惹かれ始めていた。

『…あーもう。ずるいよ。昨日から泣いてばかり。あたしじゃないみたいだ。…普段は本当に違うんだからね？』

涙まじりに下から覗く、その表情。”普段”の方が今なのではないか？そんな疑問さえ抱くくらい…無邪気で無防備だった。

…イノセンス。

そんな”職業”なのに。

俺はなぜだか穏やかに微笑んでいた。

それが氣にくわなかったのか、頬を膨らまして怒っていたが…それがまたとても…可愛かった。

少し遅めの朝食を取り、チェックアウトの時間が近づく。

ふと家のオーディオラックを思い出してしまふ。

【G o o d b y e】

いくら未練がましく見えていても…彼女は俺のものではないんだ。

どちらからともなく、そつと手を伸ばす。二人で寄り添いまるで恋人のように。

イミテーションだとはわかってる。だけど…もう少し…もう少しだけ。

中央駅にたどり着き、その時間が近づいてくる。

携帯を開き、時間を確認する。もう…電車がやってくる。

言い様のない喪失感が襲ってくるが、必死に抗う。遊ばせてる携帯を持って余しながら。

その時、一瞬手が離れ、不意に携帯を奪われた。

あっけに取られた俺を横目に、カコカコと高速で携帯を扱い出す。

そしてポンと手の平に”それ”が戻ってくる。

『あたしの番号とアドレス登録したから…もちろん000番にね』

そういたずらっぽく笑うリコに、つられて笑ってしまった。

「わかっててやっただろ？」

『思い出をデリートだけじゃなくて、上書き保存しただけよ』

そう。もちろん”000番”は…元婚約者の番号であった。

一番最初の番号。どうしてなのか、女ってそういうところにこだわるよな…。

”一番”でいたい。あなたの。そう脅迫めいたプレッシャーをかけてくる。

…よそう。深く考えすぎるのは。期待は裏切りに変わるから。

ジリジリジリと別れのジングルが鳴る。

これが…最初の出会いだった。

【2】

別れの余韻を惜しむ間もなく、俺には日常が待っていた。

目まぐるしい一日だった…なんて振り返る余裕すらなく、企業戦士の戦闘服を身にまとう。

まっさらなシャツに袖を通し、ネクタイをして。

細身のシルエットのコートに、リーガルを合わせて歩き出す。

会社につくと隣のデスクの森野が話しかけてきた。

『おはようさん。今年も終わりだなあ』

「おはよう。そうだな。…例の案件は？」

『もうバッチリ。クライアントも喜んでいたよ』

「そりゃよかった。部長のボヤキなんて、年末に聞きたくないもんな」

『そりゃそうだ』

二人でニヤリと笑い合う。

PCの電源を立ち上げる間、コーヒーを入れる。マグカップをふうと吹きながら、少ししか開かない目をこする。

仕事の確認は終わったため、俺のすることは一つ。暇を潰すだけだ。

お気に入りのニュースサイトに飛び、一通り目を通す。社会情勢、芸能、スポーツetc…。

それが終われば、音楽の情報を。好きなアーティストはもちろん、新しい音にも興味を持って。

帰りにタワレコでも行こうかな…。あそこは俺にとっての夢の国。何時間だっていられる宝の山。

そんなことを思いながら、眠気を抑えるのに必死だった。

舟を漕ぎだしそうになる胸が、静かに震える。

そつと二つ折りの携帯を開くと、リコからのメールだった。

『昨日はありがとう。仕事大丈夫？メール待ってたのに』と怒った顔が続いている。

…どうすればいいのだろう？

すぐに返せば足元を見られるかもしれないし、返さなければ…つながりは消えてしまう。

少し迷っていた。

携帯の画面を見つめたまま、固まっていた俺の肩を森野が叩く。

思わずビクツとしてしまった。後ろめたいのかもしれない。

『どうしたんだ？』

正直に話すわけにもいかず、何とかごまかしたが、いぶかしげに俺を見つめていた。

疑いのまなざしを避けるかのように、トイレへと逃げ込んだ。まるで隠れてタバコを吸う中学生のように。

狭い個室に座り、ふうとため息をついた。

とりあえず当たり障りなく返すことにしてみた。

【仕事は順調に終わりそう。いろいろとやることがあって、メールは夜にしようと思ってた。ごめん】

…こんなのでいいのだろうか？電話みたいな刹那のやり取りと違い、メールは記録に残る。もう少し気持ちに余裕があれば、気の利いたセリフも出てくるのかもしれないが…今の俺にはそれが精一杯だった。

出ようとするとすぐにメールが来た。

【よかった。嘘でも嬉しいよ。信じてみて…本当によかった】

心配していたのだろうか？おおよそビジネスとは思えない返事に少しずつ心は揺れ動いていた。

周りに怪しまれないようにあえて返事はせず、デスクに戻ると森野が声をかけてくる。

『何を隠してるんだよ？今日は様子がおかしいぞ？』目ざとく探りを入れてくる。

「そうか？昨日は飲みすぎたからな…」

『いや、絶対におかしい。…まあ、お前が大丈夫というなら、何も言わないけどさ』

「あまり大きな声じゃ言えないんだけどさ…あいつと別れたんだ」

『本当にどうして』

…大きな声を出すなよ…。俺は人差し指を口にあて、森野を諷めた。

『…悪い』声のボリュームを落とし、もう一度、でもどうして？と言われる。

俺は、5分後に資料室で、と先に席を立ち上がった。

約束の5分よりも2分早く、資料室の扉が開いた。

後ろ手にカギをかけ、小さな密室の出来上がり。中には社外秘の資

料もあるため、カギは持ち出せないようになっていた。

だから誰の邪魔も入ることがないため、暗黙の了解でよく内緒話に使われていた。

「早いよまあいいけど」

『悪い。最終日だから大丈夫だろ』

「まあね。大したことはないよ。彼女の浮気…というか、俺が捨てられただけ」

『最低だな。あの女』

ストレートな物言いに少しだけ苦笑いしてしまう。婚約者も別れてしまえば、そう言われる。逆もあるということを考えてしまっさ。

「幸い、明日から休みだしゆっくりするよ」

『…それがいいな』

いつもは終業のチャイムなんて気にならないが、今日だけはみんな待ち構えている。

いつも気を揉んでいる係長でさえ、カバンを抱えたままじっと時計を見つめている。

まるで新年のカウントダウンを待つように、時計の秒針が重なるまで、じっと息を殺していた。

カチ…カチ…カチツ。

終業のチャイムも聞こえないくらい、いつせいに立ち上がり口々に『お疲れさまー、また来年』と言葉が飛び交う。

俺も森野と挨拶を交わし、右手をクイツと傾けるサラリーマンのジエスチャーを、右手をパタパタと振って断った。

『…なんだよ、付き合い悪いなあ。せつかく慰めてやろうと思ったのに』

「気持ちだけでもらつとくよ。慰めてもらうのに割り勘じゃ寂しいしな。じゃ、また来年」

軽く苦笑いする森野を横目に、次々と流れていく列に俺も並んだ。

ごった返す駅のホーム。喧騒をかき分け、家路に着く。

少しかだけ感傷的になった。もう二人で待ち合わせして、帰ることもないんだな…。忘れるにはやっぱり、日常に食い込みすぎているよ。

家までの道すがら、次々に襲ってくる思い出に耐えきれず…俺は携帯を開いた。

【ごめん。ワガママかもしれないけど、会いたい。寂しさが消えないんだ】

弱音。それを吐くときは、本当に信用している人が、全くなにも知らない人がいい。

余計な勘繰りもなく、ただ話を聞いてもらえるから。

ちょうど玄関で靴を脱いだ瞬間に、ポケットが震えた。

【本当に？嬉しいよ。あたしも…会いたい】

相思相愛。

そつだったらしいのに。ビジネスと気持ちの間に揺れ動く。

川にそつと浮かぶ笹舟みたいにくるくると。

【…でも昨日の金額じゃキツいな…。半額でどう？】

駆け引き。伸るか反るか。難しいなら2で割り切れればいい。

俺は服を脱ぎもせず、テーブルの上の携帯をただ見つめていた。

一度暗くなった画面に、明かりが灯る。

着信を告げる振動が来る前に、画面を確認した。

【半額は無理だよ…。2割引でどう？】

すぐさま返信をする。

【…いや、半額で。そうでなければ…会わない】

俺自身も無理なことを言っているとわかってる。けれども…俺はそれが見たい。

無理を超える瞬間を。それは奇跡みたいな可能性だろうけど。

もし…それが通ったら、全面的に彼女を信用しよう。

そうでなければ…いつそ忘れてしまおう。

俺はドキドキしながら、次の返事を待っていた。

テレビの泉は知ってる？後ろ向きにコインを投げて、水の中に沈んだら…幸せになれるみたいだよ。

…でも、振り返るのは怖いんだ。

俺は、きつと入ってるだろう、と振り返りもしないかもしれない。

今、閉じたままの携帯が震えている。

まず、これを開く勇気が必要だ。CDラックからイーグルスをかける。

【Take it easy】のイントロが陽気に流れ出す。

前向きに考えよう。俺は昨日、婚約者にフラれた。だけど、すごく美人と知り合いになった。

もし、そのつながりが断たれようとも…昨日より悪くなるはずはない。

よしと決めたわりに、そろそろと薄目を開けた。

【もう、今回だけだからね！！それでどこで待ち合わせるの？】

…俺は目をパチクリと開いて何度も読み返した。嘘じゃないだろう
か？相変わらず後ろでは、イーグルスが流れているのだから、現実
に違いない。

俺はすぐにメールを返した。少し現金だが。

【１時間後に、中央駅前で。服装は普通でかまわないから】と、打
ち込んで、急いで風呂へと向かった。

チノパンにジャケットを合わせ、フォーマルに決めた。香水を一吹
きして、家を出る。

…俺は人を待たせるのが好きじゃないから、かなり早めに出たはず
なのに、リコはすでに駅で待っていた。

笑顔で手を振り駆け寄ってくる。

『早いね？まだ３０分もあるじゃない』

「いや、自分だって早いじゃない」

『だって…早く会いたかったんだもの』と笑顔で言われたら、どん
な男もイチコロだろう。

だけど…俺には響かない。信用するとは誓ったものの、美辞麗句に
は疑心暗鬼になってしまう。

「…そっか。嬉しいよ。ご飯は食べたの？」と、あえて気のないそ

ぶりをして。

『会いたってメールくれたから、急いできたのに、その返事はひどくない?』と、素直に怒る彼女を、少しだけ信用する気になった。ただの”客”なら怒らないで合わせるだろ?

だから「ゴメン、本当に嬉しいよ」と、笑顔で返した。

『ならいいけど』と、腕を絡めてくる彼女。

やはりすごくキレイだ。思わず笑顔に引き込まれてしまう。

「なにかリクエストはある?」

『うーん…洋食屋さんかな?』

「わかりました、お姫様」とおどけながら、思考回路をフル回転させる。

(…あそこは昨日行ったし…、あそこは休みだよな…、あ、あそこでしょう)

路地を右に曲がり、奥まった細い道に入った。

奥まった路地に入ると、中央通りからは別世界。

ネオンの消えた電飾。ひび割れた看板。点々と虫食いのように灯りがとる。

怪しい黒服が暇そうに腕を組み、こちらをちらりと見るのを横目に通り過ぎる。

ほどなくすると赤茶けたレンガ造りの店が見えてくる。地下への階段を降り、黒く重厚な扉を開く。

間接照明でほのかに彩られた店内。木を基調にして、アットホームでシックにまとめられている。

『いらつしゃい。久しぶりだね、こんなかわいい子連れてさ』…やるじゃないの、と、奥さんが言う。

『ゆつくりしていつてね』とメニューを置いて、カウンターでここにことしている。

『ここにはよく来るの?』

「最近はおぶさただけで、顔を知られて、世間話をするくらいは来てるね。誰かを連れてきたのは、初めてだけど」メニューに目を向けながら答える。見なくても決まっているけれど。

視線を感じて、ふと顔を上げる。

「ん？どうした？」

リコはにこりと笑って、そういうの嬉しい、と少し顔をほころばせた。

…初めてにもこだわるんだよね…女って。俺は気のない返事を返し、水を一口がぶりと飲んだ。

昨日とは、また違う表情。メイクなのか、服装なのかはわからないけれど、大人びて見えた。

軽く手を上げて奥さんと呼ぶ。俺はパニーニとオムレツを、彼女はBLTサンドを頼んだ。

パンをかじりながら、一ツ気になることを聞いてみる。

「リコの仕事…というか”アザーサイド”のシステムってどうなってるの？」

『…秘密』とうまくかわされる。

「それじゃわからないよ。君の目的はなんなの？」

空気がざわりと変わる。氷のような冷たさで、知らなくていいこと

もあるのよ、と。

寒気がした。触れてはいけない部分。ますます彼女が遠くなっている。

奥さんに年末の挨拶をして、店を出る。

「今日は帰るよ。なんだかうまくいかないんだ」

『えっ…もう？帰っちゃうの？』

「そう…思ってる。家で音楽でも聞くと顔を見ないで、なんとかそれだけ吐き出した。」

『…やっぱり、あたしじゃダメなのかな？どうやってたらあなたを笑顔にできるの？』

まっすぐに俺を見て、彼女は言う。

俺は困っていた。わからなくて。自分のことなのに。

俺はリコに何を求めているのだろう…？

真剣に向き合うには、互いのことを知らなすぎる。

店の前で二人、少しだけ途方に暮れていた。

俺の性格的な問題もあるだろう。

俺は、完全に”受け”なのだ。

自分から前に出て主張するわけでもなく、他人に合わせるのが、いつの間にかうまくなっていてさ。

気付いたら、求めなくなっていた。だから…婚約者はいなくなったのかもしれないが。

こういう膠着状態が一番困る。彼女の心なんて見えないし、打開するほどの”何か”さえ見つけられない。

頼むからそんな目で俺を見ないでくれ。どうしたら…自然に笑えるのだろうか。愛想笑いでもなく、卑屈にもならず。

「ごめん。笑い方さえ忘れたみたいだ」手の内をさらけ出すように、裸の心が口をつく。

そうだ。きっと俺は泣きたかったのだろう。プライドなんて捨てちまって。人目なんか気にしないで。

ただ…一人では泣きたくなかったただけだ。惨めになるだけだから。

『 ”大人” って疲れるよね。甘えてもいいんだよ? 』

まるで聖母のようなその言葉に、俺は寄りかかってしまいたかった。

「一つだけ聞いてもいいかな？」

『なに？』

「俺はリコのなに？」

直球。どんな答えが出ても裏を取れないし、ソースもない。だけど……きつと俺はその時レミングスのように、風が吹いただけでも無くなってしまうくらい、弱々しかった。

まっすぐにじっと目を見つめる。彼女の拳動、呼吸音、空気や背景まで、見逃さないように。

ゆっくりと空気に色をつけるように、リコは話し始める。

『本音で言つとね、まだわからない。彼氏とも友達とも違うし……でもただの”客”としても……違うんだよね』

「信じていい？リコを」

『それも、わからないわ。例えばこのまま続くのか、明日、離ればなれになるのかさえあたしにはわからないんだもの』

ギリギリの本音だろう。俺にとって、都合のいいことばかりを言うわけでもなく、かといって依存させるわけでもなく。

「…そう…だよね。俺がずるかったのかも。傷つかないよう、傷つけないよう、慎重に言葉を選ぶとね、いつも相手に選択肢があつて俺は、それを責めるか、受けるかするだけで。…最低だよな?」自嘲気味に吐き出した本音。

生きていくための処世術は、いつしか”ずるさ”に変わっていた。

『あなたは優しすぎるのよ』

「違うよ。こんなの臆病なだけじゃないか君にさえカッコつけてばかりで、本音すら言えやしないんだから」

思わず涙がこぼれそうになる。忘れていたはずの、熱い気持ちがある。

『…じゃあさ、教えてよ…あなたの本音』

まっすぐにこっちを見て、リコは言う。

「うん…でもさ、場所を移さないか？路上で話すのも寒いだろ？」

『じゃあ…ホテル行く？』

「いや…帰れるように、駅の近くにしよう」

寂しい気配を感じ取ったのか、彼女は強く腕を絡ませた。
” 離れない”と主張するように。

『じゃあ行きつけのバーあるからそこにしようか』

断る理由もなく、俺は黙って彼女についていった。

駅のホームを通り抜け、歓楽街の方へ向かう。色とりどりのネオン看板。行き交う人々。

誰もが陽気で笑顔に見えるのは、酒のせいなのだろうか？

人ごみの中をはいくぐるように、スルスルと歩く。まったく迷いもせずに。

どんどんと、人がまばらになっていく中、目的の店はあった。

派手に主張する看板もなく、店名さえわからない。その中にスルリと入る彼女の背中を追った。

中には一人の客の姿もなく、若そうなバーテンが一人、暇そうにグラスをみがいている。

『いらつしゃい。珍しいね、誰かを連れてくるなんて』その声を遮るように、彼女は叩きつける。

『うるさいよ余計なこと言わないでよあたしが寂しい女みたいじゃない。あのさ、奥のボックス貸して。接客はいらないから』

…いいのか？それで？

『リコの頼みじゃしょうがないね。ボリューム上げるよ。あと…これ』

その一瞬を見逃さなかった。紙袋に包まれた”それ”を。たぶん…CD-ROMだろう。DVDかもしれないが。あの薄さ、あの形なら…きつと。

『ん、ありがと』と無造作にバッグに放り込み、俺の背中を押すようにして、一番奥まったボックスに陣取った。

続いてバーテンがボトルセットを持ってくる。

『あなたも災難ですよ。酒グセ良くないからさ』

『シン。”口は災いの元”って知ってる？』有無を言わさない冷たさで、バツサリと会話を切り捨てる。

バーテンは気にしない様子で、手を開いて、カウンターに戻り、ボリウムを上げた。

「…よく来るの？」

『たまにね。女が一人で飲めるところは案外少ないからね』

これだけの容姿なら、仕方ないことなのだと思うけど。

慣れた手つきでグラスに氷を落とし、静かに酒を注ぐ。水を入れてマドラーで、クルクルと回す手つきにも、色香を感じて。

どうぞ、と差し出されたそれを、がぶりと飲んで、ふうと吐き出した。勢いがなきゃ、たぶん言えないだろうから。

一瞬で空になったグラスに、すぐさま酒を注ぐ。

また同じように戻されるグラス。気持ちもこのようになればいいのにと、俺は心で強く思った。

傷ついて心の中身が流れたのなら、また注いで、元通りにすればいい。シンプルでいいんだ。

店内のスピーカーはポリウムを振り分けられるのだろう。入口の方は大きく鳴っているが、ここの席ではちょうどいい。彼もプロなのだから、当然か。

目の前のグラスを手に取り、もう一口流し込む。中々本音が出てこない。

「…初めてリコを見たとき、すごく綺麗な人だなんて思って。彼女にフラれたばかりなのにさ」

黙ってリコはうなずく。まっすぐに目をそらさないで。

「昨日、いっぱい泣いたよね？あれでどこか勘違いしてしたみたいでさ」

『勘違い？』

「”わかり合えた” 気がしたんだ。…少なくとも、俺は。でも、それは感覚だけで、現実は何も知らない、何もわからない。だって…まだ…俺の名前すら知らないだろ？」

彼女は軽く微笑んだ。背筋がゾクリとした。思わず、冷や汗が流れ出る。

『片桐：唯人さん』

「ど…どうして」

『意外と知ってるものでしょ？』 あっけらかんとして、彼女は言うが、俺は寒気が止まらなかった。

ヤバイ。本能からの恐怖。知られている、というのがすでにおかしい。

『安心して。悪用なんかしないから。ただの乙女心なの』

「…あの時の…” 携帯” か」

『ご名答。つい見ちゃった。ごめんね』 笑顔に騙されちゃいけない。本能からの警告は続く。一刻も早く、関係を切るべきだ。

だけど、離れたいと思う気持ちも、蜘蛛の巣の中。網に捕らえられた蝶なのかもしれない。

どうせ知られているのは、名前だけではないのだろうから。

俺は一つ息を吐いて、冷静さを取り戻そうと試みた。

打開策はないのだろうか？

…くそっ、何一つ見当たらない。一方的なワンサイドゲームに、俺は投げ出してしまいたくなった。

「目的は何だ？金か？」真剣な表情で、弱さをさとられないように。

…だけど、彼女は吹き出していた。

「何がおかしい」思わず声が大きくなった。

『ごめん。でもさ…おかしくて。もしそれが目的なら、こうやって一緒になんかいないよ。客だろうとあたしは嫌だし。目的は…そうね、あなたをもっと知りたいし、癒してあげたい。それだけよ』

「そんなもの信用できないよ」と吐き出した瞬間 リコは唇を重ねた。

「そんなことで騙されないぞ」

体を押しのけ、距離を取った。

リコは悲しそうな目で俺を見て、ため息を吐く。

『そんなに信用できないのに、どうしてあたしにメールしてきたの？あたしだって、あれを無視してくれたら…きっと、普通にいられたのに』

そう、癒されたくてメールしたのは…俺の方なのに、いざとなつて、どうして拒絶してしまうのだろうか？

彼女はスツと立ち上がり、隣に腰を下ろした。

『いいよ…全部吐き出しちゃいなよ。変に大人にならずにさ、素直になりなよ』

俺に少しだけもたれかかりながら、リコはそう呟いた。

葛藤。ぶつかり合う気持ちの渦。寄せては返す感情の波。相反する二つの気持ちがちょうど等しくなる。

完全なる”無”である。

リコの髪の毛を一房握りしめ、ごめん、と呟いて、あの子のことを思った。

忘れない、でも忘れるには”日常”に深く食い込みすぎていて。けれど…前に進まなきゃいけないんだ。

閉じていた目を開いて、まっすぐにリコを見つめた。胸が高鳴る。思わず吸い込まれそうになる気持ち。

彼女が静かに目を閉じた瞬間に、俺は首を傾けた。

「信じたんだ。怖いけど。そうじゃなきゃ…始まらない、そうだろう？」

『そうね…。本当に欲しいものを手に入れるなら、努力以外の何かも必要になるかもね』

「かもしれないな…」

並び合うグラスのように、俺たちも自然にもう一度、唇を重ねた。

満面の笑顔の彼女。すごく独り占めしたくなる。誰にも見せたくない。いや、俺だけのために笑っていてほしいんだ。

話し合いも終了し、バーテンのシンくんに合図をすると、興味津々な様子でニコニコしていた。

『リコの彼氏ですか？何を話していたんですか？』単刀直入に聞かれても…。

思わず苦笑いしていると、軽く彼女に一蹴されていたが。

3人で楽しく話す内に、疲れなのか、安心感なのか、彼女は眠ってしまっていた。

『寝ちゃいましたね。普段はこんなことないのに』

「普段はそうじゃないんだな」

『…ですね』

男2人では会話も盛り上がるはずもなく、どんどん酒を流し込む時間が増える。

…ん？そういえば、と先ほどの紙の包みが気になった。

CDサイズの紙袋。あの中には…何が入ってるのだろうか？

純粹な好奇心で何気なく、シンくんに見ると、借りていたCDと、彼は言い張ったが、ほんのわずかな動揺を俺は見逃さなかった。

ただ、これ以上は詮索できないだろう。逆に警戒されるのも、良くないと思われたから。

俺は気まずさをかき消すように、タクシーを呼んでもらうことにした。

すうすうと寝息を立てるリコ。その寝顔の裏側は、天使か…悪魔か。何にせよ、変化はある。

”やぶ蛇”にならないことを祈りたい。

この寝息さえ演技に思えてくるのは、やはり疑心暗鬼の現れなのか？

程なくしてタクシーが到着する。シンくん和軽い挨拶をして、折れそうなくらい軽い身体を持ち上げて、そつと後部座席に滑り込ませる。

運転手に行き先を尋ねられると、少し迷ったフリをして、ホテル街、と告げる。

『お客さんも悪いですねー。こんな美人を酔わせて、連れ込むんですか？』と、羨望と嫉妬混じりの言葉を投げつける運転手。

面倒は避けよう。多少イラッとしたが、聞き流して、タバコに火をつけた。

流れる景色を見つめる。ヘッドライト、テールライト。家庭から漏れる明かり。深夜でも煌々と光るコンビ二に群がる人々。まるで小さな誘蛾灯。例え、夜でも…俺たちは明かりを求めるといことなのだろう。

短くなったタバコを、フィルターを押しつけるようにもみ消すと、もう目的地は目の前だった。

身体を揺すつても、声をかけても一向に起きない彼女を、仕方なく首の後ろと膝の後ろに手を差し入れて持ち上げた。俗に言う”お姫様抱っこ”である。眠り姫ではあるが。

フロントでまばらに点いた電光パネル。部屋を選び鍵を受け取る。

なんとかエレベーターのボタンを押して、5階まで。

ようやくベッドに彼女を横たえた時には、もう汗だくになっていた。暑いな…暖房が効きすぎている。エコに関するサミットをやったところで、エコにはしょせん、効果は薄い。とにかく自分だけが良ければ、世界のバランスなんてどうだっていいんだ。

備え付けの冷蔵庫から、缶ビールを取り出し、プルタブを起こす。プシュツ、と音を立て炭酸が立ち昇る。

ゴクゴクと喉を鳴らして飲む。喉を通る苦味と刺激が、大きく息をつかせる。

…シャワー浴びるか。彼女は大人しく寝息を立てている。お酒の効果なのだろうか？深い眠りから覚めそうにない。童話なら王子様のキスで目が覚めるのだろうか、あいにく俺は王子様ではないし、意識のない子にキスをするほど無粋でもない。

彼女のアウターを丁寧に脱がし、ハンガーにかける。そつと布団をかけて、服を脱いだ。

食欲・性欲・睡眠欲。人間の持つ三大欲求。

どれも無防備な瞬間である。だからこそ、家があり、部屋がある。動物で言う”巣”だ。パーソナルスペースの確保が、安全の第一歩。

無防備な寝顔を晒すリコを見ると、ふいにそう思った。家はあるのだろうが、安心ではないのだろう。そして、少なからず俺を信用しているのだろう。

普通なら狼になってもおかしくはない状況。それこそが、逆に俺を縛り付ける。赤子より抵抗できない状況に身を任せるには、大人だということだ。目の前の欲求より、後々の信頼を買う、それが大人の振る舞いだろうから。

脱ぎ捨てた衣服を軽く畳んで、シャワーを浴びる。身体にまとわりつく、微妙な湿り気を洗い流す。

髪の毛の泡を流して、鏡を覗き、あごを触った。元々髭は薄い方で、まだ手に抵抗は感じられなかった。

吸水の悪い備え付けのバスタオルで、頭をこする。

ふう、と大きく息をついて、シャワールームから出てはまだ、彼女は寝息を立てている。よほど疲れていたのだろう。それを横目に冷蔵庫から2缶目を取り出した。

テーブルの上の案内を見る。ラブホテルも進化しているのだな…。パラパラと部屋の案内をめくり、流し読んでいた。そこで…ある一文が目飛び込んでくる。

【フロントにてノートパソコン無料貸し出し致します。（数に限りがございますので、ご了承ください）】

…瞬時に頭の中で葛藤が始まる。もちろん先ほどの”CDサイズのもの”の中身のこと。

あれは…何なのだろうか？違法コピーぐらいで、動揺するとは思えない。音楽が大好きな俺も、CDは買うものから、焼いたり、落したりするものと認識しているぐらいだし。

クリアすべき条件は3つ。ノートパソコンは借りられるのか。気づかれず、中身を出せるのか。そして…コピーできるのかどうか。

残念ながら、ロムもUSBメモリーも持ち歩いてはいない。じゃあ…まずは買い物に行くか。…と、その前にフロントに連絡だな。

「今から買い物に行きたいのだけど、最寄りのコンビニは？…はい。ええ…。あ、あとノートパソコンは借りられますか？ええ、ありがとうございます」

よし。一段階目はクリアだ。コンビニも近い。往復で15分かならないだろう。

例えば、起きてしまっても、明日使うとも言えはいい。

問題は…良心の呵責に耐えられるかどうか…だ。

いや、俺の個人情報を取られた今、逆転のカードはそれしかないんだ。

フロントの人が言っていたよりも早く、コンビニは見つかった。少しだけワクワクした気持ちを抑えるように、お目当てのＣＤロムを見つけてカゴに放り込んだ。

昨日、してもらったように軽めの朝食代わりにサンドイッチと、野菜ジュースを放り込み、カモフラージュも完璧だ。そして目を覚ますためと、頭を回すために、ミントのタブレットと、チョコレートの一つ買い込んだ。

およそ１０分ほどで部屋に辿り着いた。ここからが本番だ。

鍵を捻る手にも力が入る。寝起きドツキリのような手に汗握る緊張感。粘りつくような、プレッシャーの中、カチリと音を立て、扉が開いた。

テーブルに荷物を置いて、借りてきたノートパソコンを接続する。少しだけ処理が遅いのは仕方がないが。

確認のために、もう一度声をかけてみる。

「リコ」

…返事はない。相変わらず規則正しい寝息だけが繰り返されている。そうっと彼女のバッグに近寄る。胸が痛いほどドキドキする。なるべく音を立てないように、慎重にでもできるだけ素早く。

お目当ての紙袋は無造作に放り込まれていたため、すぐに発見できた。

カサカサと袋が鳴る音にさえ、反応してしまう。スツと中身を取り出すと…何も書いていない真っ白のCD-ROMが、姿を現した。

細心の注意を払い、寝息を聞き逃さずに、CDをインストールする。音楽ファイルであつてほしい気持ちと、そうではないだろうと確信めいた気持ち。…その答えは？

…もちろん後者である。

gifファイル。主に画像に使われる拡張子。

ダブルクリックで開くと…一面黒で塗りつぶされた画面しか出てこなかった。

…なんだこりゃ？まったく意味がわからない。…ただ、どこかに絶対に意味はあるはずだ。俺は買ってきたROMにコピーを始めた。

なにせこんなところに備え付けのノートパソコンである。コピーにさえ時間がかかる。その間ずっと背中寝息だけに集中し、生きた心地がしなかった。

なんとかコピーも終わり、そつとバッグに戻したときには、外も少しずつ明るくなり始めていた。

…ふう。額にへばりつく冷や汗を拭い、指を鳴らして、背中を伸ばした。緊張感からか肩の重みが取れない。

これで一步彼女に近づいたのか、それとも…関わってはいけないことに足を踏み込んでしまったのか。

それはまだ誰も知らない事である。

…ちょっと待てよ。ただのgifファイルなら、こんなにコピーに時間がかかるはずはない。…黒一色なら。例え、こんなに古いパソコンだとしても。

…とにかく調べる必要があるな。俺は上着の内ポケットに、用心深くそれをしまいこんで、ノートパソコンをフロントに返した。

不安と緊張からか、それから一睡もできず、ただ寝顔を見つめていた。このあどけなさを残す、この子の裏側には…何が隠されているのだろうか？

粘りつく疑心感。アウトサイドの寝顔と、インサイドの謎。早くたどり着きたい。真実に。

それから一時間ほどしてからだろうか？やっとリコがもぞもぞと動き出した。

山になった灰皿に、更に一本ねじ入れて、俺は彼女に近づいた。

そっと髪の毛に触れ、頭を撫でる。

「おはよ。大丈夫かい？」

目をつぶったままの気だるそうな雰囲気で、頭痛いと答えるリコ。

飲みすぎたんだろ？よく眠っていたよ、とミネラルウォーターを差し出す。

一口で三分の一を飲むような勢いでゴクゴクと喉を鳴らす。

『ありがと。ごめんね。迷惑かけてない？』

「うん。わりと静かに眠っていたよ」

『…で、ここはどこ？』

はい、とホテルの案内を差し出すと、理解したようだった。

『酔って眠ったあたしを、こんなところに連れ込んだんだ…』

「ち、違うよ。いや、そうだけど。普通のホテルに、まさか眠ったままのリコを、連れて行くわけにもいかないし、駐車場からそのまま入る形だったから…」としどろもどろに答える。

『冗談よ。あなたはそんなことしないって知ってるわ』と吹き出す彼女は、やっぱり一枚上手なのかもしれない。

「わからないよ。俺だって男だからね」悔し紛れに言ってみるが、じゃあ今から…する？なんて言われて一発でノックアウトだ。

「わかってるクセに。しかも鼻の下を伸ばした瞬間に、断るんだろ？」

『その通り。でも…あなたなら…ううん、何でもない』

意味深なセリフを残して、シャワールームに消えていく彼女。フワリと香る残り香に、少しだけ心が揺れた。

身支度を整え、別れの時間。

胸の内ポケットの秘密に気づかれないように、少し急いでタクシーに乗り込む。

「じゃあね……」

『うん。また連絡するね』

バタリと自動で閉まるドアが、二人を分断した。

いつも別れは寂しいものだ。つながりが消えてしまうみたいで。走り出すタクシー。小さくなるリコ。胸が締め付けられるんだ。

【3】

…ブウンと音を立てて、チカチカと灯をともしモニターの液晶。

家に返ってきてすぐにパソコンの電源を入れた。

少しの待ち時間に、コーヒーマーカーのスイッチを入れる。まだ眠るわけにはいかない。せめて…カギを開くぐらいまでは。

画面上に並ぶいくつものショートカットアイコン。でも今日はお気に入りまわりも無視して、スロットにロムを滑り込ませる。

口の中にチョコを放り込む。糖分は頭を動かすために必要になる。

さて…問題の黒一色の画面。これがどうして…こんなに重たいのか。

右クリックボタンを押し、中身を解析する。

…思った通りだ。

色というものは、基本的に三原色から成り立っているのは、ご存知のことだろう。赤・青・黄。用語でいうところのCMYだ。

Cとはシアン。明るい青。

Mはマゼラン。明るい赤。

Yはイエロー。そのまま。

三原色を等しく混ぜ合わせると…黒になる。原則的には。だけど、実際は濁った茶色みたいになるので、それにK（黒）を足して、CMYKの四色で発色しているんだ。印刷ではね。

さて、さらに深い話をしよう。このCMY方式では、基本が黒になっている。

HTMLで色をblackに指定すると…#000000と出てくる。CMYの数値を16進法で表したものだ。16進法は00からFFまで。

逆に白にしたいのなら、#FFFFFFとすればいい。

例えば、もしこの画像が、#000000で塗りつぶされていたとしたら、この重さはない得ない。

ということは…この画像の中に、何かが隠されているとなる。

人間の目なんて、あてにならないもので、例えば#000033でも視覚的には…黒になるんだ。HTMLの中身はそうでなくてもね。

…しかし、よく考えたものだ。一見わからない人には、ただの黒一色の画面にしか見えないのだから。

ただ…ここに並ぶ文字群に向かうには…体力が足りなかった。

次々に現れる文字群。それを解くカギが見つからないのだ。数字を抜き出しても、法則性はなんら見いだせない。

…ふう。集中しすぎたのだろうか。頭を鈍痛が覆う。こめかみを押さえて、痛みが過ぎ去るのを待った。

よろよろとベッドに倒れ込む。近づいたと思ったのに、指の間をすり抜けていく。…リコ。一体君は…。

まどろんでいた。夢でさえ幸せな気分にもなれず。

着信を告げるメロデー。わかつてはいるのだけど、指一本動かす気力さえ湧かない。

辿り着けなかった。その思いが余計に気分を暗くする。

やっとの思いで身体を動かし、天井を見つめる。

タバコのヤニが模様のように、シミをつくる。

…ああ、大掃除もしないとな…。

そう思いながらも、胸ポケットからタバコを取り出し、火をつけた。

…今何時だろ…。無意識に携帯に手を伸ばして、時間を確認する。
15時36分。疲れていたのだろう。会社が休みでよかった。

ベッドのスプリングの反動を利用して、立ち上がることに成功する。
服を着たままだったからか、首と肩に鈍い重みを感じる。

大きなアクビを一つして、リビングに向かい、冷めたコーヒーを注ぐ。

…そういえば、さっき携帯鳴ってたな。

冷めて苦味を増したコーヒーに顔をしかめながら、携帯を開くと、メールと着信が残っていた。

メールは…リコからだ。着信は…実家からか。

着信履歴からリダイアルする。

「もしもし？母さん？どうした？いつって…その内。決めたらまた連絡するから」

年末の帰省の話だが…帰省というほど遠くもない。母さんの愚痴に付き合えということなのだろう。

さて…メールか…。少し憂鬱な気分になりながら、受信ボックスを開く。

【今晚遊ばない？もうお金はいらないから】

…背筋にヒヤリとしたものを感じた。バレたのか？いや…間違いなく眠っていたはずだ。もし狸寝入りなら、ツバを飲み込む動きでわかるはず。だけど…あそこまでお金にこだわりを持っていた彼女が、タダでいいなんて言うとは思えない。

…畏だろう。直感的に思った。どうするのが一番いいのだろう。俺はまるでまな板の上の鯉だった。

逃げ場所なんてない。

…だけど、微かだけど何も気づいていない可能性も…ないわけではない。

家に帰りたくないし、二日間一緒にいて波長が合ったのかもしれない。無防備な寝顔を思い出し、わずかな希望もあると思い込んだ。

わざとらしく探ってみるか…。俺は携帯の返信ボタンに触れた。

【今のところ空いてるけど、急にどうしたの？いつも俺ばかりで大丈夫なの？】

まもなく返信がくる。

【昨日は寝ちゃって話せなかったからさ。今日はあたしが奢ろうかと思って】

腹の探りあいなのか、最もらしい返事。

虎穴に入らずんば…か。思わず、ひとりごちた。

虎穴に入らずんば虎児を得ず。

思考を麻痺させるみたいに、その考えに酔う。

だが、頭の片隅では常に逆の相反する考えが出てくる。

君子危うきに近寄らず、と。

イニシアティブがどちらにあるのか。

誘われているだけなのに、強制に感じるということは、俺に選択肢はないのだろう。

大きく息を吐いて、諦めにも似た思いで返事を打つ。

【場所も時間もリコが決めてかまわないよ。楽しみにしてる】

パタリと携帯を閉じて、シャワールームの扉を開いた。

浮き足立つな。冷静に。深く、深く、潜れ。潜在意識に刷り込むように、自分の脳髓に命令する。

仮面をかぶることぐらい、お前にもできるはずだろ？

鏡の前の自分に言い聞かせる。

髭を剃り、眉を整えて。準備は万端だ。一度きり、自分を奮い立たせる。

約束の時間まで、まだ余裕はあるが…いつもの癖でまた早く出てしまった。

待ち合わせは西駅。よほどの事故がない限り、およそ20分とかからないだろう。

ガタンゴトンと揺れる電車。疲れた身体、気持ち、まとめて受け入れて、揺らす。空はもう暗いのに、生活の光が夜を拒否する。こうして…何かが狂っていくのだろう。そんな思いさえ、黙って静かに運ばれる。

駅前に到着する。年の瀬ということもあり、家族連れが多く、日常のようなスーツ姿は少なく見受けられる。

子どものはしゃぐ姿に、少しだけ目尻を下げ、温かな気持ちになる。いけない。気を引き締めないと。あたりをキョロキョロと見渡しても、まだ彼女の姿は見えない。

微かな違和感。なぜか不安にかられる。沸き上がる焦燥感。昨日までは、なぜか先にいたはずなのに。

落ち着け。落ち着けつ 駅の構内を離れ、耳にヘッドホンをかぶせる。ポケットのiPodを操作して、鼓膜を優しく包み込む様な音を流す。喫煙所を見つけ、あまりの煙たさに顔をしかめながらも、タバコに火をつけた。

流れ出すアルペジオ。それは強く高らかに。だけど、耳に刺さらない。そして…柔らかな歌声が、包むんだ。

タバコを吸い終える間に、幾分落ち着きを取り戻した。

喫煙所の扉を閉め、外に出ると、少し風が出てきたみたいで、前髪を揺らした。

そのまま壁にもたれかかり、音だけを楽しんだ。目は行き交う人からリコを探しているが、漠然と見るでもなく動きだけを捉えていた。

約束の時間まで、あとわずか。腕時計をチラリと眺め、また視線を戻した。

漠然と前ばかり気にしていたから、不意に後ろから肩を叩かれビクリとしてしまった。

『…ごめんね。待ったでしょ？手もこんなに冷たい…』小さな両手が俺の右手を包む。温かい。

先に手に触れられては、言い訳もできるはずもなく。

『本当にごめんね。』 “用事” が長引いて…』

”用事”？昨日の画像に関係あるのだろうか。やはりあれには…秘密がある。

「ごめん。俺も早く来すぎたんだ。これから…どこ行く？」

その問いには答えず、そのまま左手を包む。

視線を合わせると、申し訳なさそうな目で見つめ返される。目は時に口よりも雄弁に語る。

その表情には嘘は…ないと思う。

『やっと暖まった』と自己満足のようにつぶやいて、俺の手を取りタクシーに乗り込んだ。

事前に連絡してあったのか…メーターには【貸切】と出ている。

行き先を告げられずに連れ回されるのは、恐怖に近い。人は”知らない”ということに恐れを抱くように出来ているんだ。DNAに刷り込まれている太古からの記憶。

緩やかに車体のスピードが落ちる。着いた先は…普通のカラオケボックスだった。

『行こう?』手はつないだまま、タクシーを降りる。

受付を済ませ、案内されるまま部屋に入る。

小さな密室。それは俺にとって触れ合える喜びよりも、緊張感を高めるだけであつた。

それは…彼女も同じであつたのか、何だか緊張するね、とストローに口をつけていた。

「今日は飲まないんだ?」

『…これでも反省の心ぐらいは持ち合わせてるのよ?』と、苦笑いしながら吐き出す彼女。

そうだった。昨日のお詫びとして、誘われていたのを忘れていた。

そしてそれは…飲まない理由にもなる。

一度、疑い始めると、全てが疑わしく思え、関連付けしようとしてしまう、豊かな想像力が…邪魔になった。

『…ねえ…これ歌える?』最近の邦楽のヒットチャートの上位の歌手。

「…悪いけど一曲も知らない」

『…じゃあ、これは?』

「それも」

『じゃあ好きな歌手は?』

「エリック・マーティン」

まるで暗号のように聞こえたのか、珍しくリコはフリーズしていた。

「Mr・Bigのボーカルだよ」

『余計にわからないよ』

…ジエネレーションギャップなのだろうか。けれど本当に、邦楽はわからないのだ。

「ごめん、俺は洋楽しか聞かないんだ」

…少し気まずい空気が室内を包み、エアコンの稼働する音だけが響

いた。

『…そうなんだ…』

だからカラオケは嫌いなんだ。好きなだけなのに”カッコつけ”とか”空気読め”とか無言の圧力で、歌本をめくられた経験は何度もある。薄っぺらな流行歌なんて聞きたくもない。

下を向いて塞ぎ込む俺の顔を覗き込むリコ。

…見るな。余計に惨めな気持ちになる。自分が”マイノリティ”側にいると自覚してしまう。

ネットで共感してくれる奴らがいるから、つい勘違いしてしまった。現実はとても狭いということを…忘れていた。

叱られた子どものように、ただ黙って下を向いていた。

【話せ。疑われる前に】

脳からの命令もむなしく、こだますだけ。

「…ごめん。トイレに行ってくる」

携帯を手に立ち上がろうとする背中を、彼女はギュツと捕まえる。

『イヤな思いさせた？ごめんなさい…でも、一人にしないで』

震える声で言われたら、座るしかないだろう。俺はまた腰を降ろした。

また響き渡るエアコンの音。重苦しい雰囲気のため息をつく。

「なあ…？教えてくれないか？どれが本当のリコなんだ？最初に泣いていた君か？酔いつぶれた君か？それとも今…震えている君か？」

『…どれもあたしで…どれもあたしじゃない。人間なんてそんなものでしょ？』

「確かに…ね。だけど、俺は知りたいんだ。本当の…君を」

知りたい。深くまで君を。

『自分語りは苦手なのよ』小さく苦笑いして、下を向いてしまう。汗をかいたグラス。水滴が玉になりコースターにシミを作る。

「俺はどうすればいいのかわからないんだ。正直ね。リコいるのは確かに楽しい。楽しいけれど…」

『信じられない。そうでしょ？そうよね。それが普通の反応よ』一息に話を結論づけてしまう。

「そうじゃないんだ。…リコを俺だけのものにしたい。そうするにはどうしたらいいのか…教えてほしいんだ」

思わず漏れる本音。

『…ごめん。そのごめんじゃなくて…。悩ませてごめん。あたしも…あなたのものになりたいよ…』

顔を手で覆う。溢れる感情を隠すように。

『これから先は…話せない。ごめん。でも…一緒に居たくて…あたしもどうしたらいいかわからなくて』

「何も言わなくていい。君は…何も言うな」

そこにあるのが当たり前のように、彼女はすっぽりと腕の間に収まった。

涙で濡れるのも厭わずに、強く強く抱きしめた。

ゴウゴウと温風だけが吹きわたる音だけが響く中、ただ二人、抱き合っていた。

…話せないこととは、きつと…あの”黒い画像”につながる部分なのだろう。

そんなことを聞きたいんじゃない。…救いたい。

そうか。俺はきつと…彼女の寂しさに惹かれたのだろう。ちょうど寂しかったからね…。同じ匂いがする同士が惹かれ合うのは、よくある話で。”共感”は、他人を近づけるから。

「俺さ…最初から遠慮してたんだ。あまりにも不思議な出会いだったから」

『誰よりもあなたは紳士だったわ…。欲望に流されず、あたしを普通の女として扱ってくれた』

「臆病さだよ…。どうしていいかわからなかったただけだ」

『…それでもあたしは、信じなくなった』

「…ありがとう」

『酔いつぶれた夜も、あなたは指一本触れなかったでしょ？』

「…そうだね」

不意に罪悪感が湧いてくる。確かに彼女には触れていないが、秘密には触れた。しかもたぶん…重大な秘密。

一呼吸置いて、静かに問う。

「リコを救いたい。そのためにどうしたらいい？」

寂しく笑って、ありがとう、と声を漏らしたが…でも無理よ、と続けた。

「どうして？」

一瞬にして表情から温度が消える。有機質から無機物に。…まるで人間からアンドロイドに。あの冷たい表情。すべてを凍らせるような瞳。

感情の全てを殺して吐き出す。

『理由が必要？あなたの知らない世界では”絶対”は”絶対”なのよ』

…絶対なんてない。そんな青臭い幻想なんて言えるはずもない。

絶対は絶対なのだ。

彼女の冷たさは他人を守るためだったのだろう。排他的に振る舞うことで、それ以上近づけさせない。

…それは危険にも、そして真実にも。

「確かに絶対はあるだろう。だけど…こうして今、現在進行形で俺とリコは一緒に存在してるだろう？」

『…確かに、今はね』

一緒にいる時間より、話せない時間の方が長いのだろう。ため息混じりに、彼女は言った。

「リコの時間を束縛したい。それには…いくら必要になる？」

『無理をやめてよこれ以上優しくしないであたしは…あなたに何も返せない』

涙と共に感情が爆発する。

「…別に見返りが欲しいわけじゃない」

『じゃあどうして』

本当のリコは、こんなにも感情豊かに跳ね回る。泣いて、怒って…。

「どうして？決まってるだろう？リコを救いたいんだ」

その場で顔を塞ぎ、泣き崩れる彼女。それを黙って見ていた。ただ黙って見ていたんだ。

タバコを取り出して、火をつける。煙に目を細めながら。

「…もう泣くなよ」

すすり上げる音がこだまする室内。

『巻き込みたくなかった…』

それも本音だろう。小さく彼女はつぶやいた。

「もう…今さらだろ？」

煙と共に吐き出して。

『…信じていいの？』

それは真摯で重大な問い。この答えで全てが変わってしまうような重みがある。

「俺は臆病だし、強くもない。だけど…きっとリコを…笑顔にしてみせるから」

『ごめん…ありがとう』

今まで生きてきた中で、何度も何度も使ったであろう言葉だけど、他のどんな言葉よりも胸を打った。それほどにたった二つの言葉に、想いを込めて。

「夜はこれからだ。笑って?」

泣き濡れた顔の口角を持ち上げ、にこりと笑う彼女。それがとても美しく見えたんだ。

『あーあ、泣いてばかりだなあ……』

「俺のせいかな?それとも最初から泣き虫だったんじゃないの?」

リコは軽く笑って、きつとそうね、忘れてただけで……と目尻に残った涙をキュツと拭き取った。

『ねえ、お願いがあるの』

「なに?」

『やっぱり歌ってよ。英語でいいから。聞きたいんだ。あなたの声で』

「…マジで?」

『マジで』

「なに系?」

『今の心境を、表す歌で』

…少しだけ迷って、俺はリモコンを操作した。

流れ出すイントロ。重厚なストリングス。そこに入ってくるベースが疾走感をつけて。軽やかに音を彩る。ギターはあくまでシンプルに。

緩やかに歌い出す。 B O N J O V I の 【 I N T H E S E A R M S 】

…今夜もし君が俺の腕の中心にいてくれるのなら、すべて上手くいかせてみせる。そんな決意の歌。

Cメロのハイトーンはフェイクでかわして、大サビを決める。

歌い終わると、拍手と笑顔で迎えてくれたリコ。

しっかりと化粧が直っているあたりはさすがというか…。

『カッコいいね。誰の何て言う曲?』

心の説明を繰り返す。

「決意の歌だよ」

『へえ…、こうやって口説いてるわけだ?』

「違うよ、俺はモテないし…」いつも”いい人”どまり。それはきつと、都合の”いい人”だろうし。

『怪しいなあ?』

「本当だよ。それこそ信じてよ」

結局、そんなやり取りをしながら、終了のコールがくるまで歌いきった。

カラオケ屋の店員の声が急に現実目に向けさせる。まるでサザエさんのエンディングテーマのように。

要は”終わり”ということだ。

気持ちは結び付きを強くした。だけど…現実にはリコのこととは何一つわからないし、明日の約束さえまだできていないんだ。

…そして、あの画像のことも。

お互い何かを意識したのだろう。ふと視線がぶつかった。

「これから…どうする？」

『あなたは どうしたい？』

そんな風に聞くから、思わず本音で、まだ一緒にいたいよ、と素直に言ってしまうて、照れた。

それは彼女も同じだったようで、透けるような白い肌がほのかに赤味を増した。

『じゃあ…あなたの家に行ってもいい？』

「うち？」

…一瞬の間に思考を巡らせる。そこまで信じていいのか？家を知ら

れた途端に…変なダイレクトメールとか届たりしかないだろうな？

そういえば…パソコンの電源は落としただろうか？もし、そうでなければ…アウトだ。

『嫌なら別にいいのよ』

本当に人の扱いが上手だと感じた。そう言われて、嫌だと言えるのはアメリカ人くらいだろ？

「いいけど…少し玄関で待ってもらってもいいかな？汚れてるからさ」

『ん？じゃあ手伝うわよ』

…なぜか冷や汗が出てくる。背筋に嫌なものを感じた。

「さすがにそこまでじゃないよ」とうまく切り返したが、不安は更に増した。それは疚しい気持ちなのか、それとも…彼女は家の何かを狙っているのか。

『わかったわ。じゃあ行きましょ』と腕を絡ませる彼女の笑顔の奥には、何が潜んでいるのだろうか…？

タクシーで駅まで戻り、電車に乗り込む。幸い、年末ということもあり、二人分の座席は確保できた。

「何だか不思議な気分だよ」

『何が?』

「二人でこうして家に向かっているのがさ」

『えっ? どうして?』

「リコとこんな風になるなんて思ってもみなかったからさ」

『それはあたしもだけど、こうして一緒にいるんだから、それを信じなきゃ、ね?』

「ああ、そうだね……」

ガタンゴトンと揺れる電車。毎日のように見慣れた景色も、リコと二人ならまるで違って見えたんだ。だから……なおさら不思議だったんだ。

電車を降り、途中で寄ったコンビニの買い物袋をぶら下げて、家に向かう。

俺の左手と彼女の右手は重なったまま。

こんな形の出会いじゃなければ……疑わずにすむのに。
そう思いながら、カギを挿した。

「ちょっと待ってて」

一人で中に入る。幸いパソコンは消していたようだ。エアコンのスイッチを入れ、暖房を最大にする。

エコロジーなんて、寒さより優先するもんじゃない。

自分の力が余った時に、気づいた時だけやればいい。まあ…あまらないけど。

脱ぎ散らかした服を拾い集めて、洗濯かごに放り投げる。

玄関は寒い。あまり待たせるのもかわいそうだろう。ベッドを整え扉を閉めた。

「ごめん。寒かったでしょ？」

『大丈夫だよ。もう片付いたの？』

「とりあえずはね…」

『じゃあ、お邪魔します』

うわあ、広いね。キレイじゃない。そう言いながら辺りを見回すリコ。

「…まあ…ね。二人で暮らしていたわけだから」

『…あ、ごめん。傷ついた？』

「ううん。大丈夫」

『…ねえ。嘘はいらないんだよ？大丈夫なら、大丈夫な顔で言わなきゃ…』

切なそうな目で見つめられるが、そんなに傷ついた顔をしてしまったのだろうか？

自分で自分は見えない。なら…他人の評価こそ本来の自分なのかもしれないな。

「…でも本当に大丈夫だよ。そうじゃなきゃ…リコを連れてきたりしないだろう？」

思い出を消されたくないのならば。逆に、もしも消したいならば…他の誰かで塗り替えてしまえばいい。

リコが今、ここにいるのは俺にとっても都合がいいんだ。

『あたしが無理言っちゃったかかって心配だったんだ。ほら…あなた優しいから』

…優しい？

そんなはずはない。もし俺が優しいのならば…君の秘密を暴こうと

さえしない。むしろ、前の婚約者を忘れたりもしないだろう。

素直に喜べばいいのに、気づいたらどんどんと自虐的思考になっていく。

よほど暗い顔になっていたのだろう。黙ってリコは隣に腰かけた。

『無理してない?』

無理?初めからだよ。この歳でお互いの親はもちろん、会社の人間でさえ知っているような婚約者に逃げられたんだ。

ヤバイ。思考回路を止めないと。

「大丈夫。いや…大丈夫にしたいんだ。何か飲む?それともCDでもかける?」

何かが伝わったのだろう。

黙って彼女は首を横に振った。

『…唯人さん』

初めて名前と呼ばれる。それなりの覚悟があるのだろう。

「えっ?」

振り向いた瞬間、抱きしめられた。

『今度はあたしの番。今まであなたに、いっぱい助けもらったんだから』

体温が、冷えきっていく心を温める。少しずつ…溶かしていく。

プライド。それは時に自分を惑わせる。自覚症状がないのが、余計に鈍らせる。

そうか。俺の邪魔をしているものはプライドだったのか。捨てちまえ、そんなもの。

…とは思っても、長年自分を作り上げて来た環境も土台も急に変えられるわけもなく。こんなにも泣きたいのに、涙さえ出ない自分に嫌気がさした。

優しく包み込まれているのに、素直になれない自分が悔しくて。

どうすることもできなくて、抱きしめ返すことさえできなくて、ただただ立ち尽くしていた。

「こんなにも泣きたいのに、どうして涙が出ないんだろうね」

『…きつと悲しすぎるからだよ。終わりを見つけれたら…泣けたのかもしれないけど。だけど、今あなたは泣いているわ。悲しさが、あふれているわ』

…そうなのだろうね。リコがそう言うのなら。

『全部吐き出しちゃいなよ。格好なんか気にしないでいいから』

「それができたら、苦勞なんかしないよ」

悲しみが怒りに変わる。

『グチでも言い訳でも言っちゃいな。言わないから心に溜まるんだから』

言いながら涙ぐむリコ。どうしてこの子は、こんなにも他人のために心を痛めるのだろう。

その気持ちに答えるように、誰にも言えなかった黒く汚い気持ちを吐き出し始めた。

「仕事を優先するのが悪いのかかまってくれないからって浮気しても許されるのか」

『悪くないわ。許されるはずないよ』

「休みのたびにどこかへ行きたいばかり。休みは休みたかった。行かなきゃ、友達はいつも連れていってもらってるってグチを言われるし」

『いつも働いているんだから、休みは休むべきよ。友達も友達付き合いがあるわ』

甘やかされているのか？いや…これはこれでリコの本音だろう。

自分の考えや想いが、ほんの少しの摩擦もなく、相手に受け止めてもらえること。それはまるで麻薬のようだ。

もしリコが彼女だったら…どんなに楽になるだろう。

いや、考えちゃいけない。きっと俺だけのものになんて絶対にならない。

いくら指輪を贈っても、所有物にはなりはしないんだ。自我のある人間だから。

心の中の汚い澱を吐き出し、それをリコが受け止めてキレイに昇華してくれる。その循環こそ、きつと…あるべき姿なのかもしれない。

「ごめん。汚くて」

『あなたに言われちゃ誰も笑えないわ。唯人さんは、誰よりも…いい人よ』

それはないよ。…俺は、君のことを裏切っているから。

吐き出してはみたものの、後味は悪いまま。

すつきりしないのは、きっと自分の中にある罪悪感なのだろう。

昔からそうだ。いつも肝心な二択は、ハズレくじを引いてばかり。あの時に戻るなら、あの画像なんて見ないのに。…そして、ありのままに彼女を感じるのに。

…だけど、時は誰にでも平等で決して戻ることはない。

覆水盆に返らず。仕方がないんだ。俺はもう…知らない頃には戻れない。

「いい人なんかじゃないよ。それならきつとりコの方が…」

『自分を否定すると、信頼してるあたしを否定することにもなるのよ?』

脅迫にも取れるようなセリフを、笑顔のまま言われちゃ逃げ場所なんてない。

「大丈夫。もう落ち着いたから」

『でも…もう少しだけ、このままでいさせて。あたしも落ち着くんだ』

抱き合う形から、くるりと背中を回し、腕の中に収まるリコの髪に触れる。ちょうど左腕に頭が乗るように調節して。

甘えてるのだろうか。…それを受け止められているのだろうか。

『ねえ？今日泊まってもいい？』俺を見上げるように、リコが言う。

…迷っていた。理性とか、欲とかではなく、君を知りたかった。

「お互い子供じゃないんだ。それがどういう気持ちにさせるのか、わかって言っているのか？」

キツイ言い方になるのは仕方ない。今すぐにでも抱きたい衝動に駆られる。

悲しみを癒すには、欲望に流されることも必要だと、勝手に決めつける。正直、理由なんてどうでもよかった。目の前にある優しさに甘えたかった。

『わかってるわ。でも…あなたにその覚悟はあるの？あたしが何者でも受け止められるの？』

急に人が変わったように、あの冷たい表情をする。

”覚悟はあるの？”

あたしに手を出すなら、欲望だけじゃすまないのよ。…と暗に言わ

れているみたいだ。

まるで孤高の薔薇。遠くで見ると分にはキレイだけど、触れるのにはトゲが邪魔をする。

その言葉が、俺を欲望の渦から救い出してくれた。

「ごめん。今日の俺はどうかしてる。夜に…一人に耐えきれそうになくて…リコを捌け口にしようとしてた」

『…正直だね。それでもあたしはかまわないんだよ？でも…そういうあたしが欲しい？唯人さんは…』

それでもかまわないと言う彼女のこと、何よりも寂しく見えたのは、きっと…気のせいじゃないだろう。

「そうだね…俺が欲しいのはそんなリコじゃない。本当の…お前が欲しいんだ」

『本当の…あたし？…知ったらきつと幻滅するわ』

「…それもまた一つの結果だろうね。けれどそれについて、考えることができる」

『じゃあ…明日一緒に行ってもらいたいところがあるの。…黙って着いてきてくれる？』

まるで悪魔の誘い…か。

「いいよ。その代わり、今夜は、一緒に…いてよ」

まっすぐに目を見て、伝える。

『唯人さん、その目ズルい。断れないよ、そんな目をされたら』

ちよつと早口で、ほんのりと顔を赤らめる彼女。

違う。君を縛り付けただけだ。今夜は誰のところにも行かせたくない。…特に…あの飲み屋には。

『一人にしないよ。安心して…』

そうつぶやいて、そつと俺に口づけた。

優しく探るように、唇を触れ合わせる。高鳴る鼓動。それをごまかすように、きつくリコを抱きしめた。どこにも行かないように。

「俺…こんなに独占欲あつたんだ」

抱きしめながら、つい漏れる本音。

『…嬉しい』

そんな風に言うから、また唇を求めた。

唇が離れたがらない。本当はもっと一つになりたい。そんな心からの衝動を必死で抑え込む。

その代わりに、彼女の顔にキスの嵐を降らせた。耳から首筋にかけて。もちろん頬や脛にまで。

どんどんと高まる衝動と独占欲の行き場所がない。それが切なくて胸が痛いよ。

「ねえ、リコ？」

『ん？なあに？』

…それは彼女も同じだったのだろうか。切ない声で答える。

「覚悟とかわからないけど、リコが好きだ」

欲望に流された訳じゃない。同情した訳でもない。

たぶん…初めて会った時から…かもしれない。

俺が不安だったのは、本気になってしまうことだったのだろう。

でも…もう世間体も何もかもどうでもよくて。ただ目の前のリコを好きでいたかった。

彼女の瞼から、キラキラと大粒の涙が頬を伝う。

他人同士が、本当に心を通わせようとするなら…涙ながらじゃなきゃ語れない。そんな想いは、誰もが胸に秘めているんだ。

さあ、カードは切った。片道分のチケット。…もう後戻りすらできやしない。

これは一種の賭けだ。

あとは…答えを待つしかない。ただ声だけが響く室内で、俺は黙ってそれが鳴るのを待っていた。

『ありがとう。あたしを好きになってくれて。だけど…』

答えなんかわかりきっている。彼女は俺だけのものになんて…絶対に
ならない。

「…ごめん。そうだよね」

『違うの。そうじゃないの』

彼女の瞳が悲しみに覆われる。うまく言葉にできないもどかしさ。
考えている中身ごと伝わればいいのに、と隠し事を棚上げして思っ
てしまう。

『明日、一緒に、来て。今はそれしか…言えない。ごめん、ごめん
ね…』

涙ながらに繰り返すごめんねは…どうしてこんなに胸を抉るのだろ
うね。

…アザーサイドって何なんだ？リコを縛り付けるものは一体？

聞きたい。でも…聞けない。リコは口を閉ざしてしまっただろうし、
案内人を見つけるのもそう簡単には行かない。

名刺もシンプルな一色刷り。手がかりは…ない。

となると…俺にできることは…目の前で泣き濡れる彼女の、涙を拭くことぐらいしかなかった。

指で雫を払い、そつと頬に触れる。そのまま髪を撫でるようにして抱き寄せた。

永遠ではないけれど、何よりも大切な現在を…受け止めよう。確約も保証もないけれど、今、現実に触れ合えている。それを…信じるしかなかった。

面倒なことは明日にまわそう。俺はただ…リコの笑顔が見たいんだ。

もう一度髪に触れ、肩を叩いてキッチンに行く。

きつと涙の後には喉が渇くから。

彼女は…アールグレイでいいだろう。戸棚の一番奥に眠っていた、秘蔵の茶葉を取り出した。

目の前に集中していたから、急に声をかけられビックリする。

「わあ、泣いてたんじゃなかったのかよ」

『だって…一人にするんだもの』

その上目遣いは反則だと思うが。

「泣き顔を覗く趣味はないんだよ」

『そのわりに…よく見るよね？ごめんね』

「ごめんねは…いらないよ。それだったら、いつも泣かせてばかりでごめん、って俺が言わなくちゃ」と言いながら、カップを温める。

…その様子に彼女がいきなり笑い出した。

『普通、男の人ってそこまでしないでしょ？絶対に怪しいよ』

…何が怪しいのだろう？マナー講師の花が大好きな母を持つと、こうなるだけだが。

「一応、お客様だからね。ミルクでいい？それともレモン？」

『お勧めは？ボーイさん』

おどけて言う彼女に、おどけて返す。

「それはストレートで茶葉の香りを楽しんでいただければ。…お嬢様」

幸せな時間はまだ始まったばかり。ティータイムぐらいの余裕は必要だろう。

温かく柔らかい香りが、鼻をくすぐる。

英国紳士を気取ってる訳じゃないけれど、そのぐらいの余裕はほしい。

ひとしきり泣いた後のティータイムも、ちょっと可笑しいけれど。

…紅茶をすすりながら、もう一度思案を巡らせる。忘れていたことはないか？いつもと変わっていた点は？

…浮かんでくる考えに、自問自答する。

名刺もダメ。あの飲み屋の線も…今は何も進展はしないだろう。

そして絶対に、何かの手がかりになるはずの画像も…無理だ。

…何か…きっかけは…。閃光のようなひらめきは…。

…待てよ。思い出せ。

今日…彼女は…初めて待ち合わせに遅れて…来たよな？

どうしてだっけ？

タバコに火をつけ、深く吐くようにして、考える。

…確か…『用事があつて』…って言ってたよな？

…用事？

心の中で、一つの考えにたどり着く。

…もしかしたら…今夜も、バッグの中に…何かがあるかもしれない。

用事を済ませてきたなら、なおさらのこと。

…と、なれば。

「知ってる？この紅茶はブランデーによく合うんだよ」

『えっ？そうなんだ？』

「試してみる？」

…ごく自然に…毒を盛る。好きだからこそ…知りたくなる。秘密にされると…探りたくなる。

疚しいことがなければ、誰も携帯にロックなんかかけやしないしね。

『あ…美味しい。唯人さんって物知りなんだね』

無邪気な笑顔が、胸を抉るけれど。目的のためには、手段なんか選

んでいられない。

2杯目を飲み干す頃には、頬を桜色に染めた彼女がいた。

『やっぱり…ブランデーって酔うね』

「紅茶で割ってるから、それほどアルコール度数は、高くないはずなんだけどなあ？」

『じゃあ…気分的なものかな？』

「きつとそうだろうね。紅茶にはリラックス効果もあるしね」

笑顔の裏に忍ばせた、醜い気持ち。少しずつだけ、ブランデーを濃くしていく。

呂律が回らなくなる頃には、ブランデーの紅茶割りなのか、紅茶のブランデー割りなのかわからない濃度になっていたが。

「あれなら先にお風呂入ってきなよ？ちょっと酔ってるみたいだし」

『うん…わかった…そうする…』

甘ったるい声で、浴室へ消える彼女。

バスタオルを用意して、彼女がシャワーを使うのと同時に、カバンの中に手を入れた。

…ビンゴ。昨日とは違うディスクが、そこにはあった。

…これもまた、一つの謎を呼ぶだろう。

懸念していた通り、ディスクが無造作に入っている。よほど俺を信頼しているのか…もしくは罠か。

気づいた上で、泳がされているのかもしれない。

手に取ったディスクを眺めながら、ゴクリと生唾を飲み込んだ。

胸の鼓動が意識とリンクするように、耳の中で鳴る。
どうする？

無意識に自分に問いかける。このままにしておけば、戻れるかもしれない。何も知らなかったフリを続けて。

ただ…心からの欲求は正直だった。見たい。知りたい。もつと深くまで。…君のことを。

…ザアザアと水の流れる音はまだやまない。なぜか震えが止まらない。
い。

俺は思い出したように、袖口でディスクの表面を拭った。指紋がついているかもしれない。些細な疑心暗鬼は、闇の中へと俺を引きずり込んだ。

…昨日は…そのまま触ってしまった。バレているかもしれない。一度芽生えた疑惑の根は、心の中をかき回す。

…その時、シャワーの音が不意に消えた。

ビクリと背中を震わせ、それをカバンの中に放り込んだ。

不自然じゃないように、少しカバンから距離を置いて、滝のように流れ出る冷や汗を拭った。

ガチャリ。扉が開く。

『…サッパリした。唯人さんも入ってきたら？』

「いや…出かける前に浴びたから」

『でも…なんだか汗をかいてるみたいよ？』

…彼女を一人にするわけにはいかない。その隙に何をされるのかわからないから。

リコを信じたい気持ちと、不安な気持ちが入り交じって吐き気がした。

相反する二つの想いを抱えたまま接するのは、俺には到底無理な芸当だ。

その場をごまかすように、一緒にいたいから、リコが眠ってから入るよ、と告げて、使ったカップをシンクに下げた。

『ねえ？唯人さん…』

まだ酔いが回っているのだろう、甘い声で俺の名を呼ぶ。

「なに？」

『本当に明日…一緒に来てくれる？』

…そうだ。何も言わずについてきて欲しいと。そんな約束をしたんだ。

「行き先さえ秘密なのか？」

『うん…まだ言えないんだ。だから…明日一緒に…』

酔いが抜けないのか、傷ついたレコードのように同じセリフを繰り返す。

「わかったよ。それなら早く眠らないと。リコも酔ってるみたいだし…」

『唯人さんも一緒に寝てくれる？』甘えた顔で言われたら、断れるはずもなく。

だけど…眠るわけにはいかないんだよ、リコ。

…あの秘密に近づくためには。

人の呼吸音、心音は安らぎを与えるようにできている。BPM60の胎内回帰。

俺の胸に耳をつけて、生きている音を聞かせている内に、重みが増した。

よほど疲れていたのか、それともブランデーの効果だろうか、すぐに寝息をたて始めた。

まだだ。人間にはレム睡眠とノンレム睡眠があり、今動くとき逆に覚醒しかねない。チツチツと定期的に時を刻む、掛け時計の秒針の音を頼りに、しばらくの間それを数え続けた。

寝息も安定してきた。慎重に慎重に、ゆっくりと左腕を引き抜いた。俺の代わりに枕を置いて、そっと布団を被せた。

リビングまで歩いて行き、タバコに火をつける。暗い室内に、その炎だけが鈍く灯る。

ふう…白い煙に混ぜるようにして、ため息をつく。

物音一つしない丑三つ時、伸ばした袖口でそっとディスクを手にとった。

…今しかない。スロットに飲み込ませ、すぐにデータをコピーした。

ディスクを元に戻し、USBファイルにデータを移す。黒い画像ファイルも、合わせて移し…元ファイルをデリートした。

ただし、パソコンにはオートバックアップがついている。EXEから履歴までデリートをする。ここまですれば…たぶん大丈夫だろう。無造作にカバンに、ディスクを入れておくぐらいだから、やり方だけは知っていても、パソコンには無頓着なのかもしれないと判断したからだ。

さて…問題は、中身だ。

…つつ、と汗が額を伝わり落ちる。意識はリコの寝息に向けながら、左手をCTRLキーの上に置いた。いつでもシャットダウンできるように。

ダブルクリックして開くと…これも画像ファイルだった。

開かれた画像を見ると…日常にごくありふれた海外の風景。これは…どこだろう？

何か有名な建造物なのだろうか、建物の前の道路を車が行き交っている写真。

ただ…それだけ。

…面白い。俺は脇に置いてあった板チョコにかじりついた。絶対に秘密は…ある。

…ただ、ざらつきがひどい箇所があるな…。

違和感を感じた部分、それは…車のナンバープレートと、看板だった。

切り抜いて解像度を上げてみると、よりハッキリした。元あった画像の上に…画像を重ねているんだ。

…それが意味するものは…。

まさか…。看板に書いてある電話番号を控える。

車に書いてあるナンバーも抜き出す。

あとは…黒い画像のナンバーと照らし合わせると。

…少しだけ共通点が見つかった。

あの黒い画像の謎に比べると、ずいぶん雑だな。

さて…と。車のナンバープレートは当たり前だけど、四桁の番号がついている。

大事なのは『〇〇〇〇』ではなく『〇〇・〇〇』ということなのだろう。

連続する四桁ではなく、二桁と二桁の組み合わせなのだ。

おそらく…左が種類、右が個数か？もしかしたら逆かもしれないが左側に共通する数字が多く、右側は様々。…ならたぶん、左側が種類だと思う。

そしてあの黒い画像は…顧客管理データといったところか…。

あれは…六桁まで書き込みが出来るし、基本黒い画像にたった一ピクセルの何色が混ざっていたって、わかるはずもない。木を隠すには森。一ピクセルを隠すには、黒い画像を用意すればいいのだろう。

そして…あの電話番号は…きっとバイヤーの人間に直接つながるのだろう。

ただ気になるのは、二つの画像に共通点が見つからないことだ。

黒い画像の方が、プロの仕事だとすれば、風景画はアマチュア以下

の画像処理レベル。

それだけが不安要素だ。

…あとは、すべて推測の域を出ないのが問題だけど。

目の前の携帯電話の番号と、しばらくにらみ合いを続けてみたものの、確信がない以上、危険に飛び込む勇気はなかった。

ただ唯一、確信がもてること…それは、リコは何らかの黒い話に、関わっているということだけだ。

彼女は何なんだ？データの運び屋か？

あの飲み屋のシンから受け取ったのが、黒い画像。今日の用事で手に入れたのが風景画。

ただカバンの中に、これ以上怪しいものは入っていないことから、ユーザーではないと推測できた。

明日はどこに連れていかれるのだろうか？まさか…東京湾じゃないよな…。

一抹の不安を覚えながら、パソコンをシャットダウンして、USBメモリーは普段着ない服のポケットにしまいこんだ。

ベッドサイドに近づいても、まだ寝息を立てているリコの隣に滑り

込み、不安と謎が入り交じる中、それを閉じるようにして眠りにつ
いた。

ほんの少しのまどろみの中、小さな夢を見た。幸せだったあの頃の夢を。

互いに夢を語り合い、それが終わることなんて、これっぽっちも考えてなくて。

それもまた一つの罪悪感なのだろうか。君じゃない人と、同じベッドで眠っているから。

…夢か。ふと目を開くと、心配そうに見つめているリコと目が合った。

『大丈夫？ひどく寝苦しそうだったけど…』

「夢を見ていたんだ。遠い昔のね…」

それにひどく感傷的な顔をする。何かを思い出しているのだろうか？

『それは…辛かったね』

本当に辛そうに吐き出すから、何も言えなくて。

「もう…そんな時間？」

『唯人さんが起きてからと思ったけど、大丈夫なら早めに行く？』

「ああ…シャワーだけ浴びれば…いいよ」

『あ…それと、電車がいい？車がいい？唯人さんタバコ吸うから…』

「遠いの？そこ？」

『車で3時間ぐらいかな？』

「…なら、ドライブ代わりに、車で行こうか。タバコも吸えるし、コンビニにも寄れるし」

『…とは言ってもあたし…ペーパーなのよ…』

「ああ、もちろん俺が運転するよ」

…どんなことがあるか、わからないから。他人のハンドルに命を預けたくはないし。

『いいの？ごめんね』

俺は一つ手を振って、シャワーを浴びた。

朝のシャワーは思考回路をクリアにする。汚れを落とすことよりも、目覚ましのための習慣。

車で三時間。およそ…200kmというところ。

一体…どこに行くつもりなんだろう？その範囲内には、都市なんて腐るほどあるし。結局…蓋を開けなきゃ…わからないってことだね。

身支度を整えて、家の力ギを閉める。

一緒に部屋から出るのに、少しだけ恥ずかしかったけれど。

シャワーを浴びている間に、駅前のレンタカーを借りたようで、あとは駅に向かって歩くだけ。

いつものように腕を絡めて、微笑みを絶やさない。

完璧だからこそ…裏があるって思ってしまう人間もいるんだよ…リコ。

レンタカーなら、ディスクを運ばされる心配も…いや、ディスクはリコが持っているんだ。もしかしたら…遠い誰かに渡すために、俺を利用していいのかもしれない。

…今日は、一人にさせない。そんな思いを秘めたまま、俺もリコに微笑みを返した。

借りた車は普通のセダン。もちろんオートマで、喫煙可。ベルトを締めて、ゆるゆると見送られ走り出す。

「それでどこに向かえばいいんだ？カーナビに入れちゃうから」

『…ごめん。面倒かもしれないけれど、あたしの言う通りに走ってくれる？』

…そこに何らかの意味はあるのだろうか？ただ、今は従うしかないだろう。

「…じゃあ、どっちに向かえばいい？」

『西に向かって』

ここから西。どちらかといえば農村地帯。北の方なら、繁華街なのに。

西に3時間で大きな街つてあったっけな…。そんなことを思いながら、車を西へ走らせた。

「高速に乗る？」

『うつん、とりあえずこのまま国道走って』

何かCDでも持ってきてくればよかった。味気ないラジオの音じゃ、隙間は埋められないから。

ずっと西に向かうと、視界が開けて海が見えてくる。細く開けた窓から、少しだけ香る潮の匂い。

残念ながら鉛色に濁っていたけれど。

『海だね…』

はしゃぐわけでもなく、ただ淡々と口をついて出た言葉。

俺も黙って頷いて、ただ車を走らせた。

二時間ぐらい経った頃、ただでさえ少ない会話が、更に少なくなる。いつものような軽口も聞こえなくなり、表情もどんどん重くなる。

…そこには一体何が待ち構えているのだろう。

言葉少なになるリコの表情からは、何も読み取れないが。

…会話がなくなるとタバコが増える。つけては揉み消し、またつけて。

手持ちのストックが切れたから、近くのコンビニに立ち寄った。

「何か飲み物でもいる？」

『うっん、大丈夫』

少しも大丈夫ではない表情で、やっとのことで言葉を返す。

店内に入り、いつもの倍のタバコと、ブラックコーヒー。ミネラルウォーターを買って、リコにそれを手渡した。

『ありがとう…』

飲む気がないのか、手で遊ばれているけど。

すっとおでこに手をかざす。

「大丈夫？熱はないみたいだけど、具合悪い？」

『…うん。大丈夫だよ』

笑顔。すごく悲しい笑顔。それに心を痛めるけれど。

「なら…いいんだけど」

切なさに気づかれないように、表情を消して、また車を走らせた。

ブラックコーヒーの苦味が、心の苦味と相まって、俺の心を揺らしたけれど。

『次の信号を右に曲がって』

右？

さすがにこの辺りには土地勘がない。リコの重い表情が意図するものは？

わからない、わからないけれど得も言われぬ不安の渦が、広い車内を支配していた。

「なあ…そろそろ教えてくれないか？どこに向かっているのか」

『ちゃんと説明するから…ごめん、今は聞かないで』

さつきからこれの繰り返しばかり。悲しみを帯びた表情に、思わずため息が出そうになる。

リコの予想時刻まであと、15分。だいぶ…景色も変わった。閑散とした農村地帯。正月を迎えるこの時期、歩いている人さえ見えな

い。

…まさかな…。一抹の不安が頭をよぎる。

人目につかないところで…何かをする気なのか？

いつそう警戒を強めるけれど、表情から窺うと、そんな元気さえ見

当たらない。

リコの指示の元、右に左に車を走らせる。少し小さな集落に差し掛かる。

さびれたスタンド。シャッターの降りている店々。古ぼけた商店。昔ながらの理髪店。

それをぼんやりと見ながら、走らせていると…急にリコの様子が変わる。

『止めて』

周りに車がないのをいいことに、言葉に反応するように急ブレーキを踏んだ。

キキッという音の後、車を端に寄せ、ハザードを付けた。カチカチという規則正しい音が、連続して聞こえる。

「どうした？」

『その角に、赤い屋根の家は見える？』

下を向いて震える声で。

「ああ…それが？」

『その左隣の家。壁は白くて…屋根は…青い』

「そう。リコ…もしかして…」

『…うん…あたしの生まれた家よ。二度と…来ることなんてないって思ってたけど』

…やけに詳しいとは思っていたけれど、まさかこんな綺麗な子が…。

「それは…どうして？」

リコは小さく笑って、明らかに無理をしている表情で少し歩こつか？と車を降りた。

まあ…この様子じゃ車にイタズラする奴もいないだろ…と、カギを抜いて俺も車を降りる。

風が冷たく感じるのは、人が出す温度があまりないからなのだろうか？

やけに寒さが骨身にしみる。

リコに手を引かれるまま、ゆっくりと俺たちは歩いた。

つないだ手が震えてる。きつと…何かを抱えてるのだろう。

荒れ放題の生家を横目に、それを通り越して、坂道を上がる。

途中に石の階段がある。

『こつちよ…』

手を引かれるままに、石段を登る。はあはあと切れる息。タバコで衰えた心肺機能には酷な段数。

ゆっくりと一步一步、目の前の道を登る。

やっとの思いで登りきり、手をつないだまま振り返ると…眼前に広がるのは、空。

町を一望して、枯れた茶の大地と、鉛色の空とのコントラスト。晴れていれば…もっと。

『あたしが小さな頃ね…よく…弟の手を引いて…ここに来たんだ』

痛みをこらえるように、ゆっくりと吐き出すリ。

「弟がいたんだ？」

『…昔ね…』

迂闊に聞いてしまつて後悔した。そこは悲しみの地雷原。駆け抜けるには無防備過ぎて。

「ごめん…俺、知らなくて…」

『いいのよ。あたしも…言わなかったんだから…』

言わなかったのか…言えなかったのか。自分の弱さをさらけ出すリコに、少しの戸惑いを覚えて。

本当に戸惑っていたんだ。リコの変貌ぶりに。いつも笑顔で強く見えた彼女が見せる生身の表情。

信頼の証なのか？それとも…。いつもより小さな背中を抱きしめた衝動に駆られる。

その氣を知つてか知らずか、背中を向けて歩き出すリコ。

それを支えるでも見守るでもなく、私情を押し殺して、ついて歩く。

小さな林道を進む背中を追いかける。たぶん地元民だけが知る抜け道なのか、地図にはないであろう、踏みしめられた道を歩いていく。鉛色の空が不安を高める。枯れ木は切なさを増して。

それを抜けたところにあつたのは、社。小さな神社だった。

『小さな頃ね、よくここで遊んだのよ』

幼い頃の記憶を噛みしめるように、悲しい微笑を浮かべて、落ち葉が舞う境内に二人立ちすくんでいた。

今は廃れてしまったのか、落ち葉がつもり、社もボロボロで神の不在を示すよう。

『小さい頃、よく探検ごつことかしなかった？唯人さんは？』

「ああ…自分だけの地図みたいにな？」

『そうそう。ここに抜け道があつて、ここは吠える犬がいるから注意とかね？』

妙に明るく振る舞おうとするから、それが余計に…痛い。

『あたしたちには…親がいなくてさ…』

衝撃的な告白もさらつと言われては…何も言えなくて。

リコは…何を考えて俺にさらけ出しているのだろう。すべてを伝えたら…今にも消えてしまいそうで、恐い。

『特に弟は嫌なことがあると…ここに隠れてさ…』

…”嫌なこと”

それにある種の苦味を感じて。

「その嫌なことって…まさか…」

『今で言えば…ネグレクトかな。親が事故で死んじゃって、引き取られた家であたしたちは…』

「もういいよ…」

それ以上聞いても悲しみだけが、落ち葉のように降り積もるだけ。
俺は途中で言葉を遮るように抱きしめた。

『ちゃんと聞いて…最後まで』

リコの真剣な眼差しに、気圧されるように腕をほどいた。そうか…
きっと俺は試されているのだろう。…愛する資格があるか。

昨日の【あたしがどんな人間でも?】という言葉に込められた迫力は、これが背景にあったからなのだろう。

「…わかった」

俺も覚悟を決めて、長く息を吐いた。

『こつちへ来て…』

古い社のカギを外し、真つ暗な室内に入る。そこら中にゴミが広がり、ひどくカビ臭い。神の住処だったとは到底思えないな…。

ようやく暗さにも目が慣れてくると、リコは小さく泣いていた。

「どうした？」

何も言わずに柱を指差す。…よくわからない。慣れたとはいえ、ただでさえ暗い室内。近づいて目を凝らすと…小さな傷が見える。

「これが？」

『あたしたちの記念。まだ残っているなんて…』

「…それは？」

『誕生日の背比べ…』

携帯の光を頼りに照らして見ると、小さな傷がはっきりと形になっている。

そこには…”ユイ”と…。

「まさか…」

小さく頷いて、震える声で吐き出す。

『弟も…唯人って名前だったんだ。…だから…』

…そんな”偶然”も生きていればあるわけで。

「だから…俺を選んだのか？」

『…違う初めは確かにビックリしたわけだけど、それはきつかけなだけで…あたしはあなたを…』

…揺れ動く心。やじろべえより繊細に。崖の上での綱渡りみたいに…
…一歩間違えれば…ゲームオーバー！。

いやが上にも…緊張は高まる。

「それを信じて言うのか？あれも言えない、これも秘密。自分の語りの結果はこれなのに」

抑えていた感情が暴発する。傷つけたくなかない。でも…最初から騙されていたなんて…思いたくなくて。

『…当然だよ…あたしなんか…信用されなくて。いつそあの時…あたしが死ねばよかったんだ』

いつそう小さく見えるリコが涙と一緒に吐き出したものは”闇”

誰にも見せられなかった黒い黒い衝動。

『あたしなんかと違って、よくできた弟でさ…。お姉ちゃん、お姉ちゃんってあたしの後ろにくっついてきたわ』

きつと誰にも話せなかったであろう、心の闇。信頼の証なのか、都合がよかったのか…今は目の前のリコに集中しよう。…そうじゃないと、壊れてしまいそうだ。

『でもさ…生まれつき身体が弱くてね。風邪なんかしょっちゅうひいてて』

「…ああ」

俺の目も見ないで、ただ独り言のように。

『あの時も、いつもの風邪だと思っていたんだ…』

空気がズンと重くなり、表情は痛みを増した。大きな…波が来る。

『ずっと咳が止まらなくて、あいつは血を吐いた。じいちゃんも、ばあちゃんも…面倒だから…って…』

言葉にならない。声が掠れ、嗚咽混じりに吐き出す。

『…救急車を呼ぼうとしても、恥ずかしいからやめろって言われて。あたし…あの時は呪われていたの。命令に逆らっちゃいけないって。…だから…雨の中、あたしはあいつを背負って…走り出したんだ…』

…心の呪縛。きっと彼女も…被害者なのだ。

『でもさ、ドラマみたいになんていかないんだよね。名医がいて、奇跡みたいに助かるなんてさ…。現実には、保険証も持ってない子ども二人に、誰も手なんか差しのべちゃくれなかった』

…現実。それは心に重くのし掛かる。どうみても…「厄介」に見えるのだらう。常識的に考えて。

『結局、あいつはあたしの腕の中で死んだわ。あたしが殺したの』

雨など一つも降っていないのに、すごく肌寒く感じる。”死”というものの重みをまだ、俺は実感したことはないけれど…肉親の死は、相当心に爪痕を残すだらう。まして…救えなかった実感が、まるで拷問のように、身を苛む。彼女は幾度、そんな夜を過ごしてきたのだらうか。

「…リコ。それは違う。君は…精一杯救おうとしたじゃないか」

『…救えなかったなら同じことよ』

「違う違うよ絶対に悪いのは…リコじゃない」

なぜか俺は叫んでいた。心が思うままに。きっと…許したかったのだらう。

『あたしもね…冷たくなったあいつを抱きしめながら、ずっと雨に

打たれていたの。そうしたら…きっと…一緒に…。でも…あつけない死ぬくせに、あたしは死ねなくて…』

「それはきつと…弟さんの意思だよ」

小さく笑って、それは生きている人のエゴよ、とささやくように吐き出した。

『…痛みも苦しみもなく、考えることも、伝えることもできない…それが”死”よ…。どんなふうに思っていたかなんて、あたしたちの想像でしかないわ』

「俺は…わからないけど、残酷かもしれないけれど…生きるためなら都合よく考えてしまいかもしれない」

それもまた一つの本音。味わったことのない、甘い考えなのかもしれないが。

『唯人さんは強いから…』

「…リコ。そんな悲しいこと言うなよ。忘れたのかい？俺の痛みや弱さを…。何も強くなんて…ないよ」

そう…強くなんて…ない。

『ごめん…あなたを傷つけるつもりなんかなくて…ただ…』

暗黙のタイミングで、彼女の手にそつと触れた。いつしか温めてくれたみたいに、小さなその両手を包むように。

手は包めば温まる。だけど…あまりにも冷えきったリコの心は…どうすれば温まるのだろう。包み込むには…俺自身じゃ小さすぎて…。

確かに覚悟はあった。だけど…いや、よそう。今はできるだけのことを、するしかない。

「ありがとう。誰にも言えなくて…辛かっただろ？」

返事はなく、代わりに溢れるのは涙。

「今すぐじゃなくていい。ゆっくり…許していこうな…」

『許せるはずないじゃない。あたしが…殺したのよ。きっと唯人も…恨んでるわ』

「…それはない」

『どうして他人のあなたが断言できるのよ』

痛い言葉の飛沫が、胸に突き刺さる。そう…俺は他人だね。知ってる。だけど…そこは譲れない。

「確かに、他人だけど…リコに感謝こそすれ、絶対に恨んでなんかいない。賭けてもいい」

『何を？』

「…命を」

もちろん死ぬつもりはないけれど、俺はそれぐらい譲れなかったんだ。

『もう…やめよう。証明しようがないじゃない。…意味がないのよ』

少し落ち着きを取り戻したのか、冷静に嘘の仮面を被ろうとする。

ダメだ、なにか決め手はないのか？

…わからない。でも、これじゃ…ふりだしに戻ってしまう。

『でも懐かしいわ。よくあの子とあそこめがけて、いろいろ投げたわ』

リコが指差す天井に穴が空いている。

誰かが空けたと思っていたが…。

『でも、子どもでしょ？だから中々届かなくてね…。”脱走ゲーム”なんて言っただけ…あそこの上に入ったら…”自由”になれるなんてね…』

…ゲームにまで自由を求めるのは…きっと、誰よりもそれを望んでいたからなのだろう。子どもの感性は…時に大人を上回るから。

『でも、唯人はズルくて、小石とか空き缶とかは届かないから、紙飛行機を飛ばしたりね』

思い出を噛みしめるように、悲しく笑う。つないだ手から温かさは伝わらないのだろうか。

「…きつと、考えたんだろうね。自由になるために…」

今では手を伸ばせば、普通に届きそうな天井だけど、あの頃には高かったのだろう。…待てよ。いや…そんなことがあれば…奇跡だ。

「なあ？弟さんがここに一人でいたりしたことは？」

『しよっちゅうよ。自分たちが氣にくわなければ、よく閉め出されたわ。でも、それが？』

…可能性はあるということか。

俺は上着を脱いでリコに手渡した。

「ちょっと離れてて」

こくりと頷いて、壁際に下がり成り行きを見守る。

そこに落ちてた角材のようなものを握り締め…一息に天井を突いた。

木はやはり弱く、簡単に穴が空いた。埃まみれになりながら、何度も何度も、天を突く。

『ねえ？何してるのよ？』

不安のような、悲鳴のようなリコの声も無視して、パラパラと崩れ落ちる板を振り払う。

今ではメーカーもわからないような空き缶、小石、埃。広がるカビの臭いは、身体にいいはずもない。

少し大きめな穴をつくり、手をかけた。懸垂の要領で身体をグツと持ち上げる。

…見えた。思いを乗せると…意外に飛ぶんだな。

目で見た通りの場所の真下に入り、そこを…突いた。

崩れ落ちる破片の中から、手でゆつくりと拾い上げる。窓がないのがよかったのか…意外に損傷はない。

ふつつと息を吹きかけて、埃を飛ばす。確信なんかない。破らないように、そつと折り目を戻す。

この先は…俺の出番じゃない。

まだ思考が働いていない彼女にそつと、彼の思いが詰まった紙飛行機を手渡して、一度外の空気を吸った。

ポケットをまさぐり、タバコに火をつける。口の中が埃っぽい。俺

は、大きなクシャミをして、一度地面に唾を吐いた。

涙を見るのは趣味じゃない。抱きしめるには汚れすぎてる。あの純粹な彼の思いには…勝てはしない。

深く吸い込んで、煙を吐いた。少しだけ目を細める。

昔から涙をごまかすには…目に煙が入ったと言えがいい。

このタバコを吸い終わったら…様子を見に行こう。煙が沁みたわけじゃない目を袖でこすり、もう一度煙を吐いた。

短くなったタバコを足で捻り潰す。吐いたのは煙か、ため息か。踵を返し、小さな社を振り返ると…リコはそこにいた。

手に紙飛行機を握りしめ、立ちすくんでいた。

そこに書かれていた想いを、俺は何も知らない。どれだけ気持ちを巡らせても、今の彼女にかけるべき言葉は見つからなかった。

たぶんその事件以来、訪れていないだろう地元。そこでずっと待っていた想い。

視線が合った。迷わずにリコは俺の腕に飛び込んできた。汚れるのも厭わずに。言葉も言い訳もいらぬ。泣いている女の子がいる。なら…俺がすべきことは一つ。思いきり抱きしめて、涙をぬぐうこと。

まるで少女のように泣きじゃくるリコ。これがフィルターを通さない本来の彼女かもしれない。生きていくうちに、余計な生きるためのぜい肉はつくものだから。

手を洗えばよかった。これじゃ手をつなぐことも、頭を撫でることもためらわれる。それが…誤解されないといい。幾分、冷静なのか…そんな余裕さえあって。

残酷だな、と自嘲めいた思いが浮かぶ。確かに、痛い事実かもしれないけれど、知らないというのは、時に人を大胆にするから。

いや…違うな。選ばれた理由が名前というのが…思いの外ショックだったんだ。それは動かしがたい事実で。俺たちの今までを否定するには充分過ぎて。だから…。

言葉が出ない。間違えちゃいけないんだ。出口も、順番も。どれか一つ間違えるだけで…俺たちの今までなんて一瞬で消えてしまう。

口火を切ったのは彼女の方。ありがとう、と無難であり、本音である言葉で。

俺は何も言わなかった。すべてを見きわめるために。

あそこに書かれていたのは、なんだったのだろう？今さら気になっても、仕方がないことなのだろうが。

『…あなたがいてくれてよかった』

「きっかけはどうでも…か？」自嘲気味に吐き出す言葉に、トゲが含まれるのは仕方ない。

『…騙していたわけじゃない』

「黙っていたただけだもんな…」

ダメだ。傷つける言葉しか出てこない。

『それは…ごめんなさい…でも…』

「信じて…か？リコの何を信じればいい？」

傷つけたくなんかないのに、口について出るのは…刃物より鋭利な言葉で。

嘘だ。ただ…俺は、受け止める勇気がなかったただけだ。

もう一度思い返してみる。きっかけを責めるには、あまりにも偶然の出会い。…いや、あれこそが仕組まれていたのかも。思考の迷路に迷い込んでいた。

揺れ惑う。繰り返す自問自答。出口のないミラーハウス。どこを見ても、自分だけがうつる。

唯人。自分に問いかける。お前は どうして、彼女を好きになったんだ？ 顔か？ スタイルか？

…違う。それだけじゃない。

じゃあ…何だ？

すぐには答えられなかった。少しずつ少しずつ、不安を信頼に変えてきた。そして…また。

あの時の決意は嘘だったのか？

…違う、決して嘘なんかじゃない。俺は…本当にリコを…。

【救いたかっただけだ】

…自分の手に負えないからと、危うく投げ出してしまうところだった。

人一人救うというのは、その場だけじゃなくて、きつとそれだけの時間はかかる。傷ついてきた時間の倍以上。やっと入口が見えたのに、ここで逃げるわけにはいかない。

「リコ。好きって状況でコロコロ変えちゃいけないよな。ごめん…傷つけて」

『唯人さん…あたしを…許して…くれるの？』

「許すも許さないもないだろ？きっと君の名前が違ったとしても、変わらず好きになっていただろうし…」

『あたしも…そう思うわ。きっかけにしたのは、あたしが悪い』

「そんなこともないさ。そのきっかけで…やっと弟さんも報われただろ？」

リコは、やっと泣けたのかもしれない。自分のために。自分を…傷つけるためじゃなく、許すために。

さつきより風が強くなってきた。…今夜は雨かもしれない。枯葉がふわりと宙に舞う。それだけがカサカサと音を立てた。

石段を降りて、車に戻る。ここに残るのは痛みしかない。痛みはすべて置いていけたら…楽なのにな。

カバンの中からウェットティッシュを取り出して、薄汚れた手を拭いた。まだ少し涙目のリコを見つめて、ゆっくりと車を走らせた。

『ありがと…』窓を見ながらポツリとつぶやく。

俺はあえて何も言わずに、ただ前だけを見ていた。

『そう…あれからあたしはすぐにこの町を離れたわ。小さな町でし
よう？いくらでも噂には事欠かなくて』

「…最低だな」

吐き捨てるように、本音で。人の死さえ、くだらないゴシップにするなんて…本当に最低だって思った。

『…女一人で生きるには、色んな手段を使ってたわ』

…聞きたくない。別に綺麗でいてほしいとかじゃなくて。でも…それ
も受け止めるのが…今の俺の役目か…。

『でも本当に自分を売ったことはないのよ？』

「ああ…」

胸ポケットからタバコを取り出し、火をつけた。

フィルターの端っこを噛んで、深く吸った。苦みばしるのは味が気持ちか？

ラッキーストライク。幸運が当たるという名前も、戦時中では…爆弾が当たるとって意味を持つ。ちょうどベトナム戦争時の戯れ。

リコの過去を知ることには”普通”とは違う重みと痛みを感じた。否定はしないが…理解するのには時間がかかる。全くもって、自分の過去の経験が通用しないのだから。

リコの自分語りはまだ続く。

『身体を売らないで生きていくには、やっぱりそれなりのリスクもあつて』

「…ああ」

およそ触れてはいけないラインに、達しているようにも思える。気にしてないフリを続けるにも限界はある。

『あたしが生きていくだけなら、そんなことをする必要はないのよ。どうして…それを続けるかわかる？』

…借金だろうか？よくある話なら。

「借金かな？」

『ふふつ。普通そう思うよねえ』

小さく微笑みをたたえて、明るい声を出そうとする。

「じゃあ…なに？」

『さっき見たでしょ？あの家を買いきたいの。もう誰も住まないけど…あの子の思い出はあそこにしかないから』

…きつとそれが彼女なりの償いなのだろう。忘れるなんて軽々しく、口に出さなくてよかった。

「…そつか…それが終われば…自由になれるのかな？」

希望的観測も含めて口に出すと、あの冷たい表情で、無理よ、と吐き出した。

『一生許されることなんてないわ』

…そうか、リコの冷たい態度と表情は、傷つけないための優しさなんだろうね。だけど…それだけは違うんだ。

「…あの紙飛行機にも、君への恨み言がつづられていたのか？違うだろう？」

憶測でしかないが、もし彼が生きていたなら…絶対に違う答えだろう。同じ名前のよしみで、一度だけ、彼女の気持ちを溶かす力を貸してくれ。

『でも、あの子は、きっと…』

フロントガラスに水滴が跳ねる。ポツポツとアスファルトを黒く染めて。

…冬の雨は冷たく感じるね。きっと…リコは、あの夜からずっと…雨に打たれているのかもしれない。

隣でグズつくリコの手から、紙飛行機を奪い取った。

そこに書いてあった言葉は…【お姉ちゃんありがとう】と。

「これを見てもまだお前は縛られ続けるのかいい加減許してやれよ自分を」

泣き崩れるリコ。それを支えるにはまだ早くて。彼女が自分の意思を取り戻すまで、雨が叩きつける車内でただ黙って見つめていた。

降りつける雨は次第に激しくなり、フロントガラスをノックする。パチパチと雨の跳ねる音だけが響く車内で、俺はタバコをふかしていた。

あたりはすっかり暗くなり、赤い火だけがゆらりと、形を残す。

同じ名前の彼がどんな気持ちで、ありがとと書いたのかは知らない。だけど、それすら利用する俺は…どこか残酷なのだろう。

いや…これも、今生きている彼女のため。恨むなら俺を恨めばいい。

茫然自失としているリコ。今君はどこにいるのだろう。過去か？未来か？…取り戻せ…現在を。

消え入りそうな声で、呼びかける。

『唯人さん…あなたなら自分を許せるの？まだ手の中にあの子の重みが残っているのよ？それなのに…自分だけが幸せになんて…なれるはずないじゃない…』

「…なら、幸せにならなきゃいい。それで…リコがいいのなら。だけど…幸せになりたくない人間は…いないんだ」

残酷な答え。傷つけない言葉なんて選んでいられない。まるでボクサーのように、反射だけで言葉を返して。

『許しても…いいのかなあ…』

「…それは俺が決めることじゃない。だけど、リコが幸せになりたいというのなら…いくらでも協力するよ」

短くなったタバコを、灰皿にねじ込む。肺に残った煙を吐き出して、ミントのタブレットを口に放り込んだ。

これは一種の賭けだ。時間の流れがひどく遅く感じる。数秒間が長い。沈黙が…痛いよ。

『幸せに…なり…たいよ』

涙ながらに吐き出した本音。罪の意識は消えなくても、誰もが持つ本能。逆らえない重力のような…その気持ち。誰しも、幸せになりたくて、生きていたいんだ。

「…ああ、なろうよ。弟さんの分まで…幸せに」

降りしきる雨よりも激しい慟哭。ギリギリと切りつけるような痛み。本当に許せるまでは時間はかかるだろうが…俺はずっとお前を…。

頭を一つ撫で、その手に紙飛行機をそつと置いた。ハンドルを握り返し、アクセルを踏み込んだ。

小声でそれを握りしめながら、ごめんなさいと繰り返すリコ。もう

…きつと…許してもいいんだ。誰よりも…幸せになって…いいんだよ。

ありがとう唯人くん。君のおかげで、お姉ちゃんは…少しだけ前に進めそうだよ。

ザアザアと降り続く雨は、涙を隠すにはちょうどいい。俺は正気を保つために、またタバコに手を出した。

煙を目に入れるため。

涙、涙…また涙。心の汚れを落とすには、たくさんの純粋な水が必要なんだろうね…そう、ちょうど涙のように。

ずっと泣き続けているリコにかけるべき言葉が見つからない。拭うハンカチさえ持っていないんだ。運転席と助手席の近くて遠い距離がもどかしい。手を伸ばせば届く距離なのに…何かが邪魔をして手を伸ばせないんだ。

背筋にザワリとしたものを感じ、ヒーターのツマミを一つ上に上げる。雨音だけが響く車内に、ごうごうと風の音が追加された。

…音楽が聴きたい。この雨音にはレイ・チャールズが似合う感じがして。チック・コリアでもいい。ベン・フォールズ・ファイブでも。とにかく、この気が滅入りそうな雨音を、消してくれれば…。リコも笑ってくれる…そうなぜか思ってた。

緩やかなカーブを曲がり、黒く濡れるアスファルトを駆ける。もうすぐ…見えてくるはずだ。俺たちが…生きる街が。涙は止まっていたんだけど、糸の切れたマリオネットみたいに、椅子に深く腰かけたまま動かない彼女。

「寒くないか？」

あまりに見ていらなくて、声をかけてみる。

だけど、小さく頷くだけで、言葉を発することはなかった…。

見慣れた街並は、俺にとっては温かい。街灯の一つ一つが出迎えてくれるみたいに感じる。

…もう、着いてしまう。あの角を右に曲がれば…スタート地点、いや、ゴールか。

俺は間違っていたのだろうか？あそこでただリコの過去を受け止めて、ぬるく同意して、かわいそうだね、と同情の一つでもしたらよかったのか？

いや…もう過去でしかないな。たればなんて、言い出したらきりが無い。ただ…あまりにも荒療治。事を急ぎすぎたのかもしれない。感情に任せて、よかれと思い…ただ傷つけてしまったただけなのかもしれない。

心に残るカサブタを剥がしてしまったことに、後悔していた。それは、他人が剥がすものではない気がして。

そんな失意の中、もう目の前に…ゴールは見えていた。

緩やかにスピードを落とし、ハザードをつける。カチカチと規則的な音が鳴る。

「リコ」

呼びかけても反応はない。

肩を叩いて、もう一度呼びかける。

「リコ？」

『なに？』

「…もう着いたから…」

…どこの世界へ行っていたのだろう。…危うい匂いがした。

『うん…』

言葉少なに頷いたけれど、一向に足は動く気配がなかった。

一人にはできない。まだ帰すわけにはいかない。

無言のまま降りようとしないリコ。彼女の望みはなんだろう？ 一体、俺はどうすればいいんだろう？

「リコ。…もう帰らなくちゃ…」

『うん…』

恐らく空返事だろう。気のない返事は宙を舞う。紙飛行機を見つめたまま、焦点さえ合っていない。

俺は肩を掴んで強く揺さぶった。まるで振り子のように揺れる細く白い首。

「リコ目を覚ませ」

強い呼びかけも空しく、車内に響くのは俺の声だけ。本当に…壊れてしまったのかもしれない。あまりにも強いショックで。…医者に見せるべきだろうか？

いや、それしかないのだろうが…俺はあまりにもリコを知らなすぎる。住所も、年齢も…名前すら…危うい。彼なら…飲み屋のシンなら…いや、変に探られるのもいいとは思えない。

…とすれば。

俺はハザードを消し、ハンドルを思いきり切った。

アスファルトとタイヤの摩擦が音を立てる。クラクションや信号なんてかまっていられない。さすがに赤は止まったが、それ以外は右に左に車を走らせ、アクセルを強く踏み込んだ。

車を降り、助手席から動かない彼女を持ち上げた。

ホールに入り、エレベーターのボタンを乱打する。中々降りてこないエレベーターにイライラして、叩きつけるように、ボタンを押した。

鍵を開け、大腿で歩く。そっとベッドに彼女を横たえた。

「すぐに戻るから」

届かないであろう言葉を投げかけて鍵を閉めた。

ちらりと腕時計を見る。急げば15分もかからないだろう。

車に乗り込み、タイヤを鳴らしながら、急いで車を返しに走った。

…幸い駅前だから、タクシーはすぐにつかまった。

「とにかく急いでくれ。金額ははずむから」

『急いでくれて言ってもねえ…法定速度は守らないとねえ…』初老ののんびりとした口調が、やけにイライラする。

胸を探りタバコを探す。

『お客さん、禁煙ですよ』

「くわえるだけだ。火はつけない」

手に握りしめたライターを早く使いたくて、さらにイライラしていた。

「釣りはいない」

札を取り出して、扉が開くや否や駆け出した。

…どうか大人しくいてくれ。

鍵を挿し込み、開こうとすると…鍵は開いていた。

「リコ」

叫んだ勢いのまま、部屋に入ると…そこにリコの姿はなかった。

テーブルの上に、ごめんなさい、とだけ書き置きを残して。

「バカ野郎」

俺はそのまま外に飛び出した。恥ずかしげもなく名前を呼ぶ。

「リコリコっ」

もちろん返事などあるはずもなく、空にこだまするばかり。

さっきから鳴らしっぱなしの携帯にも出る気配すらなかった。

息が切れ、足がもつれる。お気に入りのジャケットも泥まみれだ。

「ちつくしょう」

思わず大きな声を上げ、地面を叩いた。擦りむいたところから、心臓の音が聞こえる。おそらく…血が出ているのだろう。

いくら名を呼んでも、手がかりすらなく、フラフラと泥だらけの身体を引きずり、街を歩いた。

…まるで初めて知り合った日みたいだ。婚約者にフラれ、浴びるように酒を飲んで転がっていたあの日。

確かに、そのことも忘れるぐらい忙しい日々だった。

世界が違う。そんな言葉はクソ食らえだ。俺もお前も何も変わらない。変わらないじゃないか

もう…疲れたよ…リコ。

あの日のように、汚れることも厭わずに壁にもたれかかってしゃがみこむ。街行く人の視線さえどうでもよかった。

下を向いても出てくるのはリコのことばかり。

…その瞬間、トントンと肩を叩かれた。

「あ？何だよ？」イラつき任せに吐き出した言葉に…そいつは飄々とかわすように言った。

『嫌なことがあったんですか？忘れちゃいましょうよ？』

…この声は…ウオッチマン

ガバツと身体を起こし、じっと見つめる。細長い体つき、相変わらずな口調。…間違いない。彼だ。

「忘れられないよ…いや、忘れやしねえよ。お前の顔は」

『…おや？どこかでお会いしたことが？これは失礼致しました』

「リコはどこだ」

『はて？…私は案内人でございますから…中のことはトンと無知です』

「とぼけるな」

胸元を絞り上げるように、揺さぶった。

『…離せよ』

飄々とした仮面が剥がれ、俺の手首を掴んで力を込める。

「普通に話せるんだな」

手首を掴まれたまま、壁に叩きつけた。胸骨を押し込むように、力を込めて、何度もレンガ造りの壁に。

「話すまでやめねえぞ？」

咳き込むウオッチマンを気にも止めず、何度も叩きつける。

『わ…わかった話すから』

「よし、じゃあ話せよ」

俺は掴んだ手を離さずに、そのまま言った。

『今日は…いや、最近は休んでいるんですよ…』

「呼べ」

『どこにですか？』

「駅前でもいい。早く呼べ」

『離してくれなきゃ…』

もう一度思いきり壁に叩きつける。

諦めたのか、ポケットを探り、電話をかけた。

…しばらく鳴るコール音のあと、力ない声で出た。

『リコさんですか？お休みのところすいませんけれど、どうしても断れないお客さんがいまして…』

『…無理よ』

『…そこを何とか…最近休みがちでしょう？』

『…1時間ちょうだい。場所は？』

『駅前で』

『これきりだからね』

ニヤニヤと取り入るようなウオッチマンの顔にイラついて、もう一度壁に叩きつけ、踵を返した。

何かわめいていたけれど時間がない。

俺は急いで部屋に戻り、泥だらけのジャケットを脱ぎ捨てた。

…きつと、駅には仲間がウジャウジャ来ていることだろう。感情が先走るといいことなんかない。大きなため息をついて、滲みる新しい傷にシャワーを浴びた。

ただ、服装を変えれば気づかれないだろう。ウォッチマンと会った時は、どちらもジャケット。怖いのは接触の瞬間。まずは…場所を変えるしかない。もしその場で逃げ切れても、きつと…後でリコに迷惑がかかるだろう。

…だけど、俺の携帯からは電話に出ないだろうし…。

一か八かで、ＩＰフォンからかけてみるか…？自宅電話を知られるリスクは大きいが…今さらだろう。

…震える手で間違えないように、一つ一つ番号を押す。

…プルルルル…プルルルル…。

何度目かのコールの後、少し警戒した声で電話がつながった。

「お休みのところすいません。リコさんの携帯でしょうか？」

『はい…そうですが』

「待ち合わせ場所が変更になったみたいで。中央ロイヤルホテルです」

『時間は変わらないのね？…あなた新人？』

「はい。急にそれを伝えろって言われまして…」

『よくあることよ。頑張ってね』

…多少、声色を変えたとはいえ、一段階目はクリアだ。いや…それも気づかないほど…傷心しているのかもしれない。

俺は、黒い細身のパンツに赤いギンガムチェックのシャツを合わせ、走れるようにスニーカーを履いた。

ダテ眼鏡をかけ、扉に鍵をかける。

もう一度会いたいただけなのに、すごく危ない橋を渡っている気がする。ただ、崩れ落ちる橋は、振り返ることも、後戻りすることも許されないんだ。

携帯をお守り代わりに握りしめ、ゆっくりとタバコに火をつけた。

広い通りに出て、タクシーを拾う。行き先を告げて、腕を組み、黙って下を向いた。

彼女自体がつけられている可能性は？彼女の携帯のGPSから居場所が割り出される可能性は？

あの一枚目のディスクを作った奴がいるのなら、それぐらい簡単にできそうだが…。いや、ならあの二枚目のディスクは存在するしないだろう。まったく別のものと考えても大丈夫だろう。

…中央ロイヤルホテル。この近辺では敷居が高く、セキュリティも万全。なにより…友人が働いているのが心強い。

笑顔で切り盛りしている友人に声をかける。

「久しぶりだな」

『おう、唯人じゃないか元気だったか？』

「ま…それなりにな。それより…ずいぶん偉くなったんじゃないか？」

『まあな…やっとここまでできたよ…。それより今日は？』

「野暮用でな」

口角を持ち上げてニヤリと笑う。

『お前も…若いな』

「ああ…」

苦笑いしながら、リコの特徴を伝え、部屋に通すように頼んだ。もちろん俺の名前は出さないように。

『それぐらい朝飯前だよ。それより今度…な?』

グラスを持ち上げるジェスチャーに、右手を上げて、エレベーターに乗り込んだ。

部屋の造りはシンプルで、ベッドの陰が死角になる。あらかじめ力ギはかけずに、彼女を待った。

砂時計の砂を一粒ずつ数えるような遠く長い時間。突然、部屋のベルが鳴った。

「はい」

『いやーすごい美人だな今エレベーターに乗ったぞ』

「ありがとう。とりあえず内緒で頼むよ」

『ホテルマンの義務ですから、まあ頑張れよ』

息を殺して彼女を待つ。

トントンと部屋の扉がノックされる。

「どうぞ、開いてるよ」

『失礼します』

姿が見えない不安なのか、一步一步ゆつくりと歩いてくる。ベッドの端から影が見えた瞬間。…入れ替わるようにしてカギを閉めた。響き渡る悲鳴は漏れなかっただろうか？恐怖にひきつる彼女をゆつくりと振り返った。

『ゆ…唯人さん？ど…どうして？』

「探したよ…」

顔色の悪さを隠すためなのか、いつもより濃い化粧。ゆらりと近づいて…抱きしめた。

「心配させやがって」

『あ…あたし…ごめんなさい…』

静かに、静かにゆつくりと時は流れ始めた。

「ちゃんと話してくれないか？もう…一人にしないから」

そつと包み込むように抱きしめながら、囁くように伝えた精一杯の本音。

まっすぐに届くことを信じて。

『怖かったの…傷つけることが。これ以上誰も傷つけたくなんかないの』

「俺はお前が傷つくのを見てられないんだ」

『ダメよ。きつと…不幸にしまうわ…』

「未来なんてわからないだろ」

『唯人さん…わかって？もう誰も…巻き込みたくないのよ。傷つくのはあたしだけでいい』

「もう…巻き込まれてるよ。俺がここにいるのが何よりの理由だろ？」

『一体どうやって？』

「”案内人”の身体に聞いた。新人は俺だ」

『それぐらいなら大丈夫。まだ戻れるわ』

「そうじゃない俺はリコを救いたいんだ」

『…あたしが間違っていたのよ。一瞬でもあなたを信じてしまった。優しさに流されてしまった…』

「そのどこがいけないんだよ」

『言つたはずよ？あたしは幸せになんかなつちやいけないの…』

あの時、届いたと思つた気持ちは、幻ではなかつたはずなのに、今じゃ…別の答え。瞬間は戻らないから。

「それが…君の…答えか？あの手紙を読んで目の前に俺がいて出した答えか」

『仕方ないのどうしても、どうしても、あたしはあたしを許せないの』

少しだけ力を込めて、強く抱きしめる。

「俺がそばにいる。君が君自身を許せる日が来るまで…ずっと」

『やめてよ、もうあたしに優しくしないであたしをかき回さないで』

「無理だよ…出会う前には…戻れないんだ」

彼女の両手がだらりと下がる。

『もう遅いよ…今さら…変われないよ…。あたしは生きるために、たくさんの人を傷つけた。もう…許されるわけないよ』

「バカ野郎」

力を込めずに、右手で頬を打った。

「いつだってお前が思えば、未来なんて変えられるんだよ可能性を信じるよ」

いつしか涙が溢れていた。頬に触れた右手から流れ込むのは痛みか…悲しみか。

『でも、忘れられないのよあの夜が』

「誰も忘れるなんて言っていないよ…。俺だって、あいつを忘れた訳じゃない」

『えっ？』

「忘れるんじゃない、想いを結晶にして”思い出”に変えるんだ…」

『思い出…』

「そう。思い出。たった一文字つけ足すだけで、いつでも思い出せるように」

『あの夜のことも？』

「忘れるんじゃない、受け止めるんだ。俺が支えるから。…一度だけでいい。俺を…信じてくれないか？」

力なく垂れ下がった彼女の両手が、意思を持ち探るように俺の背中に触れる。

届いた。抱きしめ返すその力を感じた。

部屋の間接照明に照らされて、キラキラと涙が反射する。オレンジ色の柔らかな光だけが二人を包み込む。

「…もう傷つかないでいい。俺が…お前を…守るから」

『幸せになっても…いいの?』

まるで叱られた少女のような上目遣いで、幸せを求めるリコを…もう一度強く抱きしめた。 ” 護る ” という硬い意思を持ったまま。

そして…そつと唇をなぞるように…触れた。すべてが欲しい衝動。それは止められるはずもなく。彼女から呼吸を奪うくらい、長い口づけを交わした。

一つ一つ彼女の痛みを奪い去るように、ゆっくりと口づけていく。高まるのは情感だけではない。…それはきっと ” 愛 ” みたいなもので。

血管が浮き出るほど白く透ける肌。それをなぞるように触れて。耳元で漏れる吐息は、俺の鼓膜と心を優しく震わせる。

リコの痛みや傷。すべてを受け止めたくて、一つになってしまいたくて。

弾むベッドに倒れ込む。二人分の体重を受け、わずかにベッドがきしむ。目と目が合う。彼女は静かに目を閉じる。それは…暗黙の了解。少しだけ震える肩に触れて、二つの影が重なった。

「リコ…」

名を呼ぶだけで、なぜか愛しくて、何度も名を呼びながら、そっと柔らかな身体に触れていく。

…が、その想いは遂げられることはなかった。

『…「じめん」』

小さく身体をよじり、ベッドに腰かけるようにして、身体を起こす。

『…あたしやつぱりまだ…』

欲望に身を任せて、急ぎすぎたのだろうか？

わからないけれど、とにかくリコは…少しだけ身を固くした。

また言葉なく、重い沈黙が訪れる。そしてその沈黙は、新たな自問自答を呼び起こす。

どこで間違えたのだろうか？と理由を探すけれど、見つからない。ならきつと、答えは彼女の中にしかないんだ。…だから、俺はごめんと言えなかったんだろう。

『あたしも…きつと唯人さんのことが…好き。でも…もう少しだけ時間をちょうだい？』

「…そう…だね。お互いに時間は必要なのかもしれない」

『ごめんね…』

つながったと思う瞬間は、ほんのつかの間で。苦味だけが空気を支配していた。

行為の拒否は想いの拒否に思われがちだが、それは違う。特に俺とリコの場合には。なぜか…そう感じて。

本能に身を任せたい衝動を必死に殺して、リコの隣に腰かけた。

リコはスツと立ち上がり、ブラインドを開く。

眼下に広がる町並み。その光の一つ一つが生命力に溢れていて。脈々と波打つように、灯る。

「この光の一つ一つが、生きているんだよ。もちろん幸せかどうかはわからないけれど、生きてるんだ」

『…そう…だね…』

小さく呟いた響きに、心が疼く。癒したい。守りたい。そんな気持ちになる。

じつと夜景を見つめ続ける彼女の肩をそっと抱いた。

『唯人さん…ありがとね』

さっきまで泣いていたなんて思えないくらいの、凜とした表情でまっすぐに俺を見た。

…大丈夫だ。この目の輝きなら…きっと。俺はどこか安心してしまった。その裏に隠された決意には気づかずに。

『ねえ… 少しでも飲まない？ せっかくこんな高いホテルなんだしさ』

「… いいね。 何がいい？ やっぱりワイン？」

『そうね。 それがいいわ』

ルームサービスの中から奮発して、一番状態の良い白ワインを頼む。

キリリと冷やされた、黄みがかった柔らかな液体がグラスに注ぎ込まれる。

本場とは作法は違うけれど、カチンとグラスをぶつけ合う。

緊張感で喉が渴いていたのもあり、スルスルと奥に流れていった。

「すごく飲みやすいね」

『はい、 ついであげるね』

7分目まで注がれたワインを、 3分目まで飲み干したその瞬間 突然視界が闇に包まれた。

薄れゆく意識の中で小さくごめんねと聞こえたのは、 嘘か真かはわからないけれど。

朦朧とする中で、 また彼女は泣いていたんだ。

ジン、ジンと耳鳴りがする。ここはどこだ？どうして俺はベッドで寝ているのだろうか？

まだ少し舌に痺れが残っている。まるで幽体離脱みたいに、遠い自分を操るような感覚に陥る。自分の身体じゃないみたいだ。

「リ」

うまく喋ることはできないけれど、力の限り叫んだ。

…いや、叫ばずにはいらなかった。

何度も何度も繰り返される叫びは、壁にこだまするだけであつたが。

薄れゆく意識の中のほんの僅かな記憶。あれが…真実ならば。…叫びは徒勞であることは容易に想像もついたが、ほんの少しだけの可能性を俺はどこか…信じていたんだ。

重い身体を引きずるように、ベッドから床に転げ落ちる。ほふく前進みたい、床を這いずり、壁に何とか掴まって身体を起こした。ベッドルームから壁づたいに、リビングルームへ抜ける。もちろん姿なんて見えるはずもなく。

シン…と静まり返る部屋の中で、もう一度だけ名を呼んだ。

「くそっ」

拳を固め目の前の壁を叩いた。どうにもならないのがわかってしまっていたから。

信じていたんだ。いや…誰だって信じてしまっただろ？

最初のような不安はいつしか消えて、どこか…つながりさえ感じていたのに、残された結果は…間抜けな男が一人、ソファで転がっているだけ。

信用してしまった俺が…きっと馬鹿だったのだろう。いつの間にかスルスルと心の奥まで入り込んできたリコ。それを…信じてしまったんだ。

本能的に感じる”終わり”。

それは俺の目から涙を溢れさせた。

リコ。リコ。リコ。

何度名を呼んでも、二度と届かないであろう想い。ゲームオーバーは、いつも突然やって来る。それなのに、ゲームのように、リセットボタンもセーブもできるはずもなく。

…八方塞がり。それは小さな希望が絶望に変わる瞬間であった。

リコ…忘れるには心に食い込みすぎているよ。

その爪痕が深ければ深いほど…探し求めてしまっんだ。

リコの裏切りを信じられるはずもなく、頭が一つも回らなかった。
真っ白で…何も考えたくなかった。

今はもういないリコを探し求めている。つながったと感じた瞬間に剥がされたのは、心のかさぶただろうか？それはきつと絆創膏でも、止められないほどの出血で。

高級そうなガラステーブルをドン、と叩いた。拳に爪が食い込むくらい握りしめ、指先が白くなっていた。

なぜか笑いが込み上げる。俺は自分の馬鹿さ加減を笑ったんだ。…今となれば、どうして信じてしまったのかわからないが。一人ではもて余すほどの空間に、笑い声だけがこだました。

ひとしきり自分を笑ったあと、ふと顔をあげると…テーブルに一枚のメモが残されていた。俺は光よりも早く、それを掴み、目の前に広げた。

【唯人さんへ

臆病なあたしを許してください。

すべてを終わらせた時、もう一度会えたら…きっと

ごめんね。ありがとう。】

泣いた。声を殺して。ポロポロとこぼれ落ちる涙など、気にも止めずに泣いた。

もう二度と会えない今生の別れの予感を感じさせる。

リコ。名を呼べばまだ心のどこかに温もりはあって…なのに…もう…いない。そう、いないんだ。

一体…どうすれば、お前にもう一度会えるんだろう…。ウォッチマンもさすがに警戒はしているだろうし、いつもあそこにいるとは限らない。…他にリコとコンタクトを取れそうな人物は？

…一人だけしか、いない。

リコに繋がる線は細く頼りない。だけど、ほんの僅かな可能性に賭けてみたいのはなぜだろうね。

思えばここまで感情が揺れ動くことも、まったくなかった。何かと理由をつけて諦めたり、遠い話にしていた。でも…諦めたくないんだ。どんなに小さな希望だとしても。

ゆっくりと深呼吸を繰り返し、手を強く握ってみる。少しずつ戻ってくる手足の感覚。黙ってなんかいられない。

近くにあった上着をはおり、カードキーを手に取った。

軽く手を上げてタクシーに乗り込む。告げた行き先は…もちろん、シンの店だ。

ボロボロになった外観。灯りの乏しい寂れた飲み屋街の一角。あの日の記憶を頼りに何とかたどり着くことができた。

だけど…一体どうすればいいのだろうか？もしかしたら連絡の一つぐらいあってもおかしくはない。警戒心を持たれたら、きっと何らかのアクションは起こるだろう。店の前で少しだけ悩んで腕を組んだ。

ただわかることは、もうここにしかリコに繋がる道はないということ。もし失敗したのなら…それはゲームオーバーを意味する。

ネガティブな考えだけが頭を支配する。それを振り払うかのように、重い店の扉を開いた。

相変わらず客のいない店内。そこに彼はいた。

『いらつしゃい…』

含みを持った挨拶。招かれざる客なのは重々承知で、近くのカウンターに腰を降ろした。

『今日は一人なんです』

「ああ、近くで飲んでいてね。君のことを思い出したわけさ」

『今日も水割りで？』

「ああ…それで頼むよ」

トクトクと注がれる薄く色づいた液体。俺は手元に注意しながら、それを受け取った。

「よかったら君も飲んでよ」

目の前のグラスに酒と水を注ぎ込む。…これである意味同条件。グラスにさえ細工されていなければ…彼はそれを飲むはず。

だけど、結果は…お互いが動きを止めた。警戒心が口をつけるのを拒むように。

「どうしたんだい？飲んでいいよ？」

促すように、じつと彼の目を見つめる。明らかに目が泳いでいる。

【隠し事があります】と顔に書いてあるかのように。

彼は意を決したように、口をつけ…一口飲んだ。薄く額に汗がにじんでいる。

「お前…わかりやすいな。何を隠しているんだ？」

『俺は何も知らない』

「そうは思えないけどな」

懐から一枚のCDを取り出すと、明らかに顔色が変わった。

水戸黄門の印籠のように懷から取り出したそれ。

彼は本当に愚かだ。その反応こそがまずいと理解していないところが。

「これが何か…わかるな？君がリコから借りたCDを借りたんだ」
模造品だとしても揺さぶるには充分過ぎるその品。

「それにしてもおかしいんだよ。音が鳴らないんだ。…何か知っているんだろ？」

少しとぼけて、中身がわからないフリをすると幾分安堵の表情を浮かべた。…リコ。君はひとつだけ間違いをしたね。彼を相方に選んだことだ。

『元々コピーですからね。イカれたのかもしれませんが。治せるかもしれないから、それをもらえますか？』

そう来たか。まあ…予想通りだけど。本当に彼はわかりやすい。

「いや…俺の友達に相当できる奴がいてね。そいつに頼むことにするよ。中身の解析を仕事にしている奴だから」

また動揺。明らかに顔色が悪い。もう一押しで崩れ去るであろう脆い壁。

『いや俺ならすぐに治せますよ。裏にパソコンもありますし』

「…もう友達に送ってあるんだよ。これのコピーもな…。すぐに中身がわかる。その前に本当のことを話してくれないか？」

『だから俺は何も…』

「知らないなんて言わせない」

カウンターを叩き、強い口調でじつと彼を見た。

「俺は警察でもなければ、君たちの邪魔をする気もないんだ。…ただ、彼女を救いたいんだ」

ふう、と一つため息をついて、彼はポーカーフェイスを崩し、髪をかきあげ、顔を撫でた。

『あんた、勘違いしてるよ。俺は誘われた方だ。アイツにな。あんたが救いたいと思うのは自由だけど、アイツは…邪魔だ』

悪魔…。

あの裏切りを悪魔の仕業と呼ぶのならそうなのかもしれない。

意識を失うまで、まったく無警戒だったから。

だけど、最後の涙は…嘘でも幻でもない…信じたい。信じたいんだ。

「悪魔とは？」

『自分で確かめればいい。あの顔の下に隠された真実をな』

「…頼むリコの居場所を教えてくれ」

『なあ…諦めることはできないのか？あんだ、どう見たって普通のリーマンだろ？住む世界が違いすぎるだろ。アイツが消えたなら、きつとそのままの方が、幸せになれるぜ？』

シンの口から思いがけず漏れた幸せという言葉に、少しおかしくなった。

ただ迷いなく思ふことは、俺の幸せはリコのそばにしかないってことだけだ。

どうしてこんなに頑ななのか自分でさえわからない。リスクを避けて生きてきたはずの俺が、今こんなにもリスクな賭けに出ているのかわからないんだ。

だけど、このタイミングを逃したら…一生後悔するような気がしてつながった実感を忘れられないだけかもしれない。ただの意地と言えばそれまでのこと。でも…舐められるのはごめんだ。たとえそれが運命だとしても。

ふと、運命の神の話を思い出す。運命の神には前髪しかない。その瞬間に捕まえないければ…指をすり抜けていくんだ。

そう。タイミングは今しかない。

「もう迷わないと決めたんだ。彼女が何度裏切ろうとも…俺は彼女を裏切らない」

『そつか…。じゃあこれを持っていきなよ』

「これは？」

カウンター越しに差し出されたのは、一枚の…ディスクとメモ。

『俺には彼女を止められなかった。アイツを止めてやってくれ。…』

きつとあんななら…』

男同士にしかわからないアイコンタクト。きつと彼も…淡い想いを抱いていたのだろう。託された想いはきつと…無駄にはしない。

その品を懷にしまいこみ、そつと店を後にした。

そのまま家に戻れるはずもなく、タクシーでホテルへと戻った。

『おつ、デートは終わったのかい?』

フロントで暇そうにしていたヤツに捕まった。今はそんな時間なんてないのに。

「部屋にパソコンを運んでくれないか? 仕事が詰まっっていてね」

『デートより仕事か…年末だっていうのに、お互い忙しいな。わかったよ。すぐに運んでいくよ』

「ありがとな」

部屋に戻りパソコンの到着を待つ。静かに。備え付けの椅子に深く座り、指を組み合わせ、額をつけた。

もうベッドに温もりはない。数時間しか経っていないのに…唇には感触さえリアルに思い出せるのに。

悲しみに囚われている暇はない。しつかりしなきゃ。心に言い聞かせるほど、揺れ動く。さざ波から大波へ。寄せては返すノイズのよう。心にひび割れができていた。

部屋の扉がノックされる。わかっているのに、もしかしたら戻ってきてくれたのかもなんて、期待している自分が滑稽に思えた。

やはり来たのはパソコンの方だったが。

電源を立ち上げ、間髪を入れず、CDをスロットに入れた。

ガリガリという読み込み音の後に、ファイルが姿を見せた。

ブウンとディスプレイが唸り、開いた画面には、パスワードとログイン認証。

ただじゃ渡せないということか。

俺はハッカーではないし、ワームソフトもクラックソフトも、持ち合わせてはいない。ただ…思考レベルを読み取れば…そこまで難しいものでもないだろう。

おざなりに作られたあの画像ファイルが、それを物語っている。

どうせログイン名は名前だろうし、パスワードは…近いものだろう。

おおよそ勘は当たっていたらしく、数回のチャレンジでファイルは開いた。

パスワードは『other side』ログイン名は『sin』

特に捻りもなく、強制ロックもなく、彼の短絡さだけが強調されていた。

但し、中には思いもよらない内容。言うなれば切り札。彼の保身。警察もブンヤも喜んで飛び付く中身に、少しだけ言葉を失った。

中でも【アザーサイド計画】というのは…想像を絶するものだった。

こんなことが現実で起こりうるのか、すぐに理解はできずにいた。

街で酔いつぶれている人間をキャッチして、デートクラブのように金を巻き上げる。金が底をついたら…見込みのある人間には、薬の密売。ここでいう見込みのあるとは、素直に言うことを聞く人間であるということなのだろう。

リコは…その手先なわけだ。

こんな巨大な組織に、俺みたいな一個人が…敵うはずもない。救うには…力が必要だということを何も考えていなかった。

考えなしの理想論ならいくらでも言える。ただ、これを警察に持ち込んでも…彼女はきつと捕まるだろう。

一枚のメモには、彼女の住所が書いてある。

止めたい。でも、どうやって？

具体的な方法など何一つ見つかるはずもなく、ただ時間だけが過ぎていく。

手元にあるのは3枚のディスク。それと…俺の身体だけ。戦争に出かけるには軽装過ぎる。時間がない。

迷っていてもリコが戻ってくるわけではない。…行くしかない。意を決して、俺は外へ飛び出した。

フロントにいるヤツにメッセージを添えて。

これがダイイングメッセージにならなければ……いい。まさに決死の覚悟で、タクシーに乗り込んだ。

あえて少し手前で降ろしてもらう。いろんなことがありすぎて、冷たい夜風にあたりたかった。キリキリと冷える温度。吐く息は白く手はかじかむ。タバコを探すより、ポケットに手をねじこんだ。

手の先に当たるのはミントのタブレットケース。2、3つ口に放り込んで噛み砕いた。

ふと上を見上げると、一つだけ明かりが点いている窓。誘うように煌々と。草木も眠るこの時間なのに。

わかつてる。彼女は待っているはず。…すべてを見通した上で。

内装に金をかけた豪華なエントランス。ホテルのロビーを彷彿させるような。レプリカではあるが名画が並び、グランドピアノまで置いてある。

吹き抜けをぐるりと金をあしらえた手すりがつたう。赤い絨毯をゆつくりとのぼる。

奥から三番目。部屋番号を確認する。チャイムも鳴らさず、ドアノブに手をかける。

カチャリ。音もなく開く。

『やっぱり来てしまったのね』

目の前にいるのはリコであり、リコではない。固い表情に冷たい微笑。まるで別人。泣き上戸で、明るい笑顔のリコじゃない。

「こうまで人は変わるんだな」

『座って?』

イタリア製の仕立てのいいソファーに浅く腰を降ろした。いつでもアクションを起こせるように。

ガラステーブルを挟んで向かい合う。時おり垣間見えたのは、この表情だったのか。人から感情を全て無くしたような表情。そうちょうどこの季節のように、冷たい零下の表情。…冷たさも突き詰める、美に至るのかもしれない。ブルーローズ。人の手では造ることのできない青いバラ。

『あなたはやっぱり見込んだ通りの人ね。普通はここまで来れないわ』

皮肉めいた響き。俺は最初から試されていたのだろうか？

「見込み通りか…いつからだ？」

『もちろん一目見た時からよ』

恐らくは嘘だろう。簡単に信じてはいけない。ライターゲーム。勝者は正直者ではない。

見えない駆け引き。無言の中、ただ見つめ合う。微妙に届かない距離がもどかしい。

「きつと君のことだ。ディスクにも気がついていたんだろう？」

『勿論ね。あなた用のトラップではなくて、あたしなりの用心だったのだけど』

細く透明なナイロン線をCDケースにクルリと結び付け、ライターで軽くあぶった。言うなれば簡易的な”鍵”。暗闇ならわかるはずもない。

「見事に踊らされていたわけだ」

『…そうね。楽しかったわ、久しぶりに』

まるで月のようだ。日ごと形を変え、追いかければ逃げていく。

目の前に対峙しているのは確かにリコなのに、拭えない違和感が胸のどこかを締め付けた。

「一体どうして君が」

つい声も大きくなる。あの時の涙は…嘘だったなんて思えなくて。

『どうして？言っただでしょう？あの子の帰る家はあそこしかないの』

「…ただ君にもあの手紙だけは読めなかったはずだ。あの紙飛行機だけは。それなのに君は」

『…逆よ。あれを見てしまったから…あたしは…』

「…違うな。止まらない言い訳をそのせいに行っているだけだ。君が心を開いた弟のせいに」

『やめてそれ以上言ったらいくらあなたでも許さない』

「どう許さないんだ？何度でも言うさ。お前は全てを弟のせいにした卑怯者だ」

スツと胸元から取り出されたのは、ベビーコルト。手の平に収まり

そうな22口径。

『それでも人は殺せるわ』

怪しく光る瞳。冷たく濡れた唇が僅かに持ち上がる。

「君には撃てない」

『どうかしら？』小さく小首を傾げて、セーフティロックをはずし、銃口を向けた。

心臓の音が聞こえる。ドクンドクン…これが生命の音か。走馬灯は見えない。視線は外さない。

「考えればわかることだ。君は自分の手を汚すことはない。傷つきたくないから。弟の死からも逃げている君には、そんな勇氣さえない」

『馬鹿にしないで』

頭に突きつけられる銃口にも、どこか冷静なのは、あまりにも非日常過ぎるからなのかもしれない。

「リコ。もうやめないか？自分に嘘をつくのは…」

『嘘なんかついていないこれが本当のあたしよ』

人差し指に力が入る。小さな震え。

「…なら撃てばいい。その震える指に力を込めればいい」

死んでもいいなんて思ってた。だけど…命ぐらい賭けなければ、きつとりコは止まらない。

静かに下げられる右手。

『唯人さん…あなた本当に馬鹿ね…』

「かもしれないな。でも仕方ない。…性分だからな」

『だから…あたしは…きつとあなたを…』

…言葉にはならない。でも痛いくらい伝わる。空気なのか、感覚なのか。

カツンと右手から銃が落ちる。

…やっと戻ってきたね。

『憎かったのよ。すべてが』

静かに語り出すリコ。

『あの子が死んで本当に一人になった時、あたしはあたしじゃいられなくなった。唯人さんの言う通り、卑怯者だったんだろうね。転がるように地元を飛び出したのはいいけど、あてもなくツテもないあたしは…』

一度視線をはずし、下に向ける。過去を振り返ると痛みが伴うのだろう。

『あたしは…どんどん染まっていった。善悪の判断なんて忘れちゃって、自分を正当化してさ』

責任転嫁なんてよくある話だ。

『それだけ…傷ついたんだろ』

『…かもしれないわね。でも、自分が傷ついたから、他人を傷つけていいなんて話でもないわ』

やんわりと微笑みを浮かべるリコ…なんて悲しい表情。

『アザーサイドのシステムを聞いた時に、すぐに飛び付いたわ。汚い大人を見過ぎたせいかな、洞察力には自信があってね』

確かに、それは言う通りなのだろう。まるでシナリオライターのよう
に、ここまでの脚本を書き上げたのなら。

「じゃあ…どうして俺を？」

『今ではわからないわ。…良心？出来心？ちょっと違う。あなたの
心を折りたかったのかも…』

残酷な言葉には違いないが、気持ちはわからないわけではない。

慎重に慎重を重ねれば、試すためのハードルは高くなる。…ちよ
うど神の試練のように。

「けれど俺はここにいます。それが…答えだろ？」

『そうね…』

ため息を一つついて、小さく笑う。後悔もあり、懺悔もあり。

『あなたは諦めなかった。あたしは諦めてしまった。もっと早く出
会いたかったわ』

「今からだって遅くないよ」

『…無理よ。今さら戻れるはずなんて…ないのよ』

「そんなことはない」

人はいつからだって変われるんだ。

『もう計画は動き出しているの。今さら止められないわ』

「計画？」

『アザーサイド計画よ。あなたも見たでしょう？』

これまでの行動を見透かすように、さらりと言われる。もちろん見たには見たが。

「一応は…」

『あの半分は嘘なの』

「それは一体？」

『あたしがシンに確信に触れるような情報を流すと思う？』

…確かに、そうだな。彼の浅はかさは…危ういんだ。

『あなたも見たでしょう?』 リコの手には2枚のディスク。

同じ作者とは思えないほど、クオリティに差があるディスク。

やはり…それは。

『…そう、片方は子供のいたずら程度。もう片方は…』

「それが本当のディスクというわけか」

『たぶん、シンも中身は見たはずよ。でもきつと”黒い画像”にしか見えなかったでしょうね』

…黒い画像。 解読すれば色番号が並ぶ数字の羅列。 木を隠すには森、数字を隠すには数字ということだろう。 推測すれば、組織には相当切れ者がいる証明にもなる。

『もちろん唯人さんは…解読できたのでしょうか?』

挑戦的な問いかけには、それぐらいできて当然と、ある種の期待がこめられていた。

「どうして?俺はただのサラリーマンだよ?」

とぼけてもバレているのはわかっていたけれど、ペースに巻き込まれたくなかった。

『確かにね。でもあなたは中身に気付いた。そうでしょう?』

「…いや、あの画像にはカギがない。相對表がなければ、解読したとは言えないよ」

リコはニコリと不敵な笑顔を浮かべた。

『期待以上ね…。だからあたしは…』

最初から、俺はリコに目をつけられていたということか。作為の上で。

気づいてしまった瞬間、視界が滲んでぼやけた。

悔しさと悲しさが入り混じり、苦味だけが胸に広がる。

好きとか嫌いとかは、そっちの世界じゃ利用するものであって、感情に左右されては…生きていけない世界なのか。

あの時、俺は怒ったのに、今となれば…世界が違つたというのを痛感していた。あれだけ君が冷たく隔ててくれたのに、優しさだとは気付かずに…。

急に地面がわからなくなる。宇宙空間に放り出されたように。目の前にいるはずのリコが近くなったり、遠くなったり感じるのはきつと…俺の心が不安定だからなのだろう。

もう一度自分に問いかける。俺はなぜここにいるんだ？

リコを止めるためだろう？今さら感情に流されるな

揺れ惑う気持ちを必死に抑え、自分を奮い立たせる。

「それでもリコが好きだった」

青臭いと言われようが、俺の素直な気持ち。どんなに背伸びしようとも、結局俺は俺にしかねないから。

『バカね…本当にバカ』

少しだけ前のような空気に変わる。バカという優しい響きが、二人を包み込んだ。緊迫した状況にはなんら変わりはないけれど。

『今がそんな状況じゃないのはわかるわよね?』

諭すようにため息混じりで吐き出して。

それぐらいわかってる。それでも、口にしなければ伝わらないから。

「君を止める手段が見つからないんだ。俺がここにいる理由さえわからない。もうとつくに理論でなんか動いていない。感情のまま、本能のまま…動いてんだ」

そう、冷静になんかいられない。ずっと心のままに。

『それじゃあ無理よ。感情に左右されれば、そこを狙われる。隙は見せちゃ駄目なの』

「そんなのは人間じゃない感情が動くから、行動するんだろ?すべて理知的になんて神様でも無理だよ」

『それでもあたしはそう生きてきた。そうじゃなきゃ…きっと…』

悲しみに彩られた複雑な表情が、言葉より雄弁に語る。

「けどもう違つだろ君は思い出したはず。それならあの紙飛行機を捨ててみるよできないだろそれが当然なんだよ」

熱くなっていた。そうなればなるほど、まずいのは知っているのに。

感情のコントロールができるほど冷静になんてなれない。

『…捨てられるはずないじゃない…。あなたは…残酷だわ…。こんなにも計画を狂わされるとは思わなかったわ』

「リコ。もう一度だけ聞きたい。その計画とは？君の目的はなんだ？」

『…言えない。言わないんじゃない。…これが最後よ』
「言わないのではなく”言えない”」。

その理由は？

…ハッと気付く。

「もしかして…シンは？」

『今頃、行方不明になっているでしょうね。搜索届のない行方不明者は警察でさえ搜索しないのよ』

「リコ。どうして…」

『どうして？わかるでしょ？組織には裏切りは許されないのよ』

俺のせいだ。がくりとその場に膝をついた。俺が彼の元を訪れなければ…。

『あなたのせいじゃないわ。きっと遅かれ早かれこうなっていたの

よ
『

冷たい響きに、吐き気がした。

目の前がグルグルと回る。暗く重い事実がのし掛かる。間接的にとはいえ、俺が殺したようなものだ。

膝をついた床、その目の前に彼女が落とした銃が見えた。無意識に拾い上げ、銃口を向けた。

「君を止める。力づくでも」

『無理よ。止まらないの。あなたにもわかるでしょ？これが”組織”よ』

緊張が走る。手にじつとりと汗が滲む。向けられた銃口に怯みもしない。いったい主導権がどちらにあるのかわかりもしない。

「あいつはいい奴だった」

『いい奴ほど、先に死ぬのよ。憎まれっ子は…生き延びる。そういう風に出来ているの。世界は』

力無い正義もまた無力。それなら、力有る悪の方が…ということか。確かに、真面目に努めている奴より上司に巧く取り入る奴の方が出世も早い。

「かもしれないが、俺は…」

『所詮、偽善よ。あの子がいなくなっただって、世界は普通に回るのよ。世間は自分じゃなくて良かったと。養父母は、食いぶちが減ったと喜ぶのよ』

叫ぶようにさらけ出す本音はまるで嵐。言葉を遮るようにぶつけられているのは、きっと彼女の根の部分。暗くて深い闇の底。

「俺は違う」

『ならあたしを撃つてよあたしが生きている限り誰かを不幸ににしてしまう今さら組織も裏切れない。なら…いつそあなたの手で…』

初めからそれが狙いだったのか。俺はそのため…選ばれたわけだ。

パラドックス。好きだから撃って楽にする。好きだから撃てない。

前者はリコのため。後者は自分のエゴのため。

突きつけられた二つの命題は、思考回路を狂わせた。

『意気地なし』

一瞬、ほんの一瞬の隙をつかれ、彼女は自ら胸に銃口を押し当てた。

『あたしが大事なら、できるでしょ？人差し指を動かすだけ。簡単でしょ？』

ダメだ。聞くな。これは暗示だ。マインドコントロールだ。

大事なら指を動かすのは簡単。そう意識に刷り込むことで判断を鈍らせるつもりだ。

手首を両手で掴まれ、胸に押し当てた銃口。冷たい銃の感触と硬質感が、手に不快感を残す。必死の力で抗い、何とか胸から引き剥がした。

「簡単なわけないだろそう楽な方に逃げるなよ」

『…あなたならきつとあたしを殺してくれると思ったのに。とんだ見込み違いね…』

荒んだ物言いに怒りと悲しみを覚えた。身近な肉親の死はこんなにも人を狂わせるのか。

「リ」…もうやめよう？自分を傷つけるのも、諦めるのも…」

『無理よ。さっきから言ってるでしょう？止まれないのよ』

「でも君は止まりたいんだろ」

『でも、もう遅いのよ。すべて…』

達観したように、冷静に吐き出したのは、諦めの言葉。止められないのか、俺には。無力感だけが胸を締め付ける。

もう一度握っていた銃を静かに向けた。自分のこめかみに。

『ちょっと何やってるの？冗談はやめて。そんなこと意味ないわよ』

「かもしれないね。でも俺にはもう…これぐらいしかないんだ」

『銃を降ろしなさい。意味がないわ、そんなこと』

冷やかな声で静かに告げる。

俺はなぜだか笑えた。腹の底から笑いが込み上げた。

頭に銃を突きつけながら、なぜか気がふれたみたいに。演技ではない。気づいたらそうなっていたんだ。

制止の声が劣化したビデオテープのように、スローモーションに聞こえて、遠いところで鳴る。

自然に涙がこぼれた。走馬灯は見えないが、別れた彼女の疲れた顔を思い出した。蔑んだ瞳。救えなかったのは…俺だ。どうしてそんな映像が浮かんだのだろうか？何らかの暗示か？

滔々と流れる涙を気にも止めずに、考えていた。緊迫した状況の中、それがひどく重要なことに思えたんだ。

リコにこだわる理由。救いたい気持ち。それは…根底に元彼女との別れがあつて。偶然か必然かわからないけれど、俺たちは出会ってなぜか今、俺は…死ぬ気で銃を頭に向けている。

シンの言葉を思い出す。

『忘れた方が幸せだ』

だけど、心の全てが否定する。ひどく食い込んだ爪痕。それを剥がせなかった。諦められなかったんだ。

この感情が芽生えたのは、きっと捨てられることが怖いのを知っているからなのだろう。

状況にはなんら変わりはない。だけど…。一つ深呼吸をして、もう一度笑った。

「ありがとう」

自然に口について出た言葉。ただ、ありがとう。素直にそう思えたんだ。

『どうしてももうやめてよ』金切り声でかぶりを振った。

「…やめないよ。君が止まるまでは」

一瞬、刹那の沈黙。

『またあたしを一人にするの?』

いくつもの人格が入れ替わるように、表情を変えるリコ。

捨てられる恐怖感に縛られた瞳。すべてを否定する瞳。どれも本当のリコ。その全部受け止めたい。

「絶対に一人なんかしない。そのために：俺はここにいるんだ」

こくりと小さく頷いて、寂しそうな顔を向ける。

涙が止まらない。視界がぼやける。

『最初から負けるゲームだったのよ。唯人っていう名前だった時から』

「そうかもな：俺にとってはすごくラッキーだったかもしれないね」

静かに銃を降ろし、そのままリコを抱きしめた。

強く強く、二度と離さないように。

静寂。抱きしめた瞬間、そこには何の感情もなくて。夜の間に静かに積もる雪のように、静かだった。

涙が流れるのは悲しいからじゃない。行き場のない感情が溢れているだけ。

状況は何一つ変わってやしないのに、またリコを抱きしめることができた、ただそれだけで震える手。

前よりも少し華奢になった気がする。折れそうなほど細い腰。心ごと抱きとめて。これからのことなんて何一つ確かなことはない。だけど、あの時の歌のように…君が今夜腕の中に居てくれるなら 全てうまくいかせてみせる

震える手を握りしめる。リコに気付かれないように。その気持ちが伝わったのか、俺の手を両手で包み込んだ。ただ、黙って首を横に振って。

涙が止まらなかった。大人になって初めて声をあげ泣いた。

「怖かった…」

いなくなることも、違うリコになってしまうことも。やっと吐き出すように言えたのは、それだけだった。

グルグルと回るエピソード。出会いから裏切りまで。怖くないはずがない。まだおさまらない震えがそれを物語る。

「笑って…くれないか？」

『そんな気分にはなれないわ』

痛みと悲しみを宿した瞳。それを伏せるように静かに吐き出す。

「わかってる。だけど、リコが笑ってくれたなら…きっと大丈夫にしてみせる」

小さくクスリと微笑んだ。

『バカね…本当にバカ』

ああ…それでいい。そのために俺は…ここにいるのだから。

「死んでも治らないのはわかっただろ？」

口の端を持ち上げて、深く息を吐き出した。

『もう一度だけ聞いわ。今なら…戻れるわよ、日常に…』

「わかってるだろ？覚悟はできてる」

そう、ここにいることが全て。

『その覚悟とか…使命感とか捨てられる？』

気負うのは仕方ないだろう。それを捨てられるのか？

「どうして？」

『自然体じゃなきゃ乗り越えられないのよ』

初めからすべてを見通したようなセリフ。大きく一度深呼吸をした。感情を捨てるんじゃない。フラットして、ナチュラルに戻すんだ。深く潜るイメージ。海の底。暗闇だけが広がる中に一筋の光。その光はきつと…リコ笑顔。

そつと目を開いて、静かに頷いた。

「どうせリコのことだ。もうシナリオはあるんだろう？」

指を組んで静かに吐き出す。

それに柔らかな笑顔で応える。

そう…反撃はこれからだ。幸せになるために…二人の未来のために。もう一度だけ勇気を下さい、と小さく祈った。

「具体的にはどうすれば？」

少しだけ複雑な表情で、じっと俺を見つめるリコ。

『そうね…あたしを信じてとしか…この先何があるかと…あたしを信じていて』

そつと俺の両手に触れて、信じろと言う。どんなわだかまりも、裏切りも、過去も捨てて、ただ信じろ、と。

返事の代わりに頷いて、大きく息を吐いた。そして信頼の証しと…もう一度強く抱きしめた。

もう迷わない。ただまっすぐに、信じる。生まれたての赤子のように、目の前にいる君だけを。

静かに、自然に身体を離し、彼女はパソコンのスクリーンセーバーを外した。

デスクトップから、ログイン認証を経て、出てきた画面は、俺が探していた鍵だった。

住所や氏名、電話番号はもちろんのこと、職業、家族構成まで羅列された顧客リスト。あの黒いだけの画像と対になる鍵。

「これを持って警察に行けば…」

『無駄よ。確かに何人かは捕まるでしょうね。…あたしみたいに末端の人間は』

そうか。偉いやつは手を汚さない。それもまた社会のルール。

「その線は無理ってことか…」

モニターを見つめながら、腕を組んだまま、呟いた。

『そうね…そんなに簡単ならとくに潰れているか…あたしが辞めているかだよ』

悪びれもせず、ハッキリと彼女は言う。

そんなものに手を出す方が悪いということか。他人や自分と向き合えずに、逃げてしまったのだから。

『これはただのご褒美よ。あなたへの信頼の証』と、一枚の口ムを差し出した。

「…これは？」

『あたしを信じられなくなったら、これを持って警察に駆け込めばいいわ』

「俺が裏切るとでも？」

『人は裏切るものよ。あなたが一番知っているでしょう？』

完全に信頼した矢先に、薬を盛られたのは記憶に新しい。苦い苦い記憶。胸のどこかが痛くなる。

『…もしあたしが失敗したら、これで取引すればいい。あなただけは無事でいてほしいの』

蚊の鳴くよりか細い頼りない声で、小さく顔を伏せた。

「わかった…でも俺は信じてる。バカみたいでも、ずっと…」

それだけの覚悟と決意。俺は大切に胸ポケットにしまった。

コクリと頷いた後、どちらからともなく言葉が消えた。

何を言っても正しくて、何を言ってもどこか間違えているようで、痛いくらい気持ちがわかるから、そこから一步も動けずにいた。

わかっているのはここから先に、安全圏などないということ。自ら飛び込んだのに、リコはきつと自分を責めてしまう。そんな残酷な答えもわかっていたのに、俺は自分の気持ちを曲げられずここにいるだけで。

ただ一つだけわからないのはリコの本当の気持ち。

目的も、欲望も何一つわからない。今までに何度も重ねたはずの唇さえ、どこか儀礼的に感じてしまっていて。

人の心は見えない。だからこそ知りたい。だけど、目を凝らしたところで見えるのは過去の傷。月のない夜のような漆黒。そこには光なんてない。まるで黒い朝みたいで。

未だに沈黙は続いている。

沈黙は心の内側を雄弁にする。ネガティブな思想に基づく、終わらない自己討論。

俺にとっては薬やそのシンジケートなどどうでもよくて、ただリコ

を救いたただけ。遠い昔に無くしてきたはずの”普通”を取り戻したいんだ。

環境は人を大人にしてしまうから。

ベッドスプリングの反動を使い、器用に立ち上がると黙ったまま彼女は俺を見つめた。

その視線を横切るように、冷蔵庫からビールを取り出した。小気味良い音を立て、昇る泡の微粒子。言えない言葉を飲み込むように、グイッと流し込んだ。

その瞳には何が映っているのだろうか？少しだけ潤んでいるけど、何かを見据えている大きな瞳。強い意志を感じるけれど、それがわかるようなエスパーにはなれないよ。

缶の底にわずかに残った滴まで飲み干して、俺は腰を上げた。

「リコ…言ってくれなくちゃわからないよ」

結局、沈黙に音を上げたのは情けないけれど俺の方で。頭の意味とは裏腹に、眠ったはずの感情が目覚めます。

伝わらない思いは、いつしかトゲに変わり、身をえぐるんだ。

『あたしだってわからないのよ。こんな時に冷静でなんていられない』

本心からの叫びなのだろう。小さく震える肩が、より切なさを増す。

捨てたはずの感情がリコの中でも、戻ってきたのだろう。

『きつと出会わなければ、こんな思いをしなくて済んだのに…』

「お互い様だろ？でも、俺たちはもう出会ってしまったんだよ。今さらなかったことにはできないし、だったら…進むしかないんだ」

…そう、全てはあの日の出会いから、始まったんだ。

必死に自分を押し殺すことで、保ってきたギリギリのバランス。常に断崖絶壁から片足をのばすように。

壊してしまったのは、俺かもしれない。だけど、俺は本当のリコが欲しかったんだ。それはエゴと言われればそれまでの話だけど、自分をコントロールできるようなら、愛とは呼べないのではないか。

狂おしいほどの感情だけが、今の俺を突き動かしているんだ。

冷静でなんていられない、と叫んだリコ。きっと彼女自身も戦っているのだろう。表面と深層で。

こんな時に不謹慎だけど、どこかで俺は嬉しかったんだ。

「リコ、それが当たり前の感情だよ」

許すでもなく、突き放すでもなくただ口について出るのは本音。

その本音が、リコの凍りついた表情を変え、時計の針を動かした。

氷解。氷が融けるように、感情が溢れ出した。

『怖いあの日からずっともう誰も信じない、好きになんてならな
いって、誓ったのに…』

「俺も怖いよ…。力もないし、何もない。あるのは…リコ、お前への気持ちだけ。でも、それだけあれば、今の俺は生きていけるんだ」

心からの叫び。それは恐怖。失う怖さはきつと誰もが知っている。でも、俺はもう逃げない。まっすぐにお前だけに向き合うよ。

両手で顔を覆い、座り込んだままのリコに手を伸ばした。もう…一人で泣かせない。ゆつくりと手を伸ばし、柔らかな頬に触れた。

他人の体温が、心まで温められるのかわからないけれど、そうなればいい、と思いを込めて。

差し出した右手に触れ、温かい、とつぶやいたリコ。届いたのかな？それが、コミュニケーションだよ。

思いが正しく届いて、それに反応があつて。

今、二人は正しくつながっているに違いない。直感でそれを感じた。

「一人じゃないよ…確かにそれが怖いときもある。一人でいれば傷つかずにも済むかもしれない。だけど、俺はお前にもう…一人で傷ついてほしくないんだ。だから…俺は…」

その先は言葉にならなかった。

もう言葉より、理由を探すより、大事なことがわかっているから。

具体的には言えない。見えないけれど、誰もが求めている、きっとそこにあるもの。

そつ…ちようど『愛』みたいに。

川に浮かんで小さくクルクルと回る笹舟を、そっと持ち上げるように、リコの気持ちごと優しく掬う。

止まらない涙はきつと今までに嘘をついていた分だろう。それは自分の悲しみから目を逸らした分。

いつ止まるのかわからないけれど、それでいい、それが自然なことだと思っただ。

喜怒哀楽。人間らしく生きるためにどれも必要な感情で、素直に表現できる場所がきつと誰にも用意されていて。ただ弱さを頑なに否定するから、見えなくなっているだけなんだろう。

寂しさだけじゃなく、優しさだけでもなく、お互いの弱さを許し合うように、唇を重ねた。

言葉だけじゃ足りない想いを伝えるために。

やっと本来のリコを見つけられた気がした。本当の意味で同じワールドに立てた気がしたんだ。弱さもあって、泣いて傷ついて...だけどしなやかで折れない。

静かに唇が離れた後に、小さく笑うリコ。ああ、この笑顔を守るためなら、俺は全てを賭けてもいい。素直にそう思えるような微笑み。仕立てのいいシルクのドレスのように、ふわりとリコを抱きしめた。

「幸せになろうよ……。もう許してもいいんだ。自分自身を……」

一度ビクリと身を固くして、小さくつぶやく。

『……なりたいよ……。幸せに……』

ずっと心の深いところに押しやっていた、感情。何度も何度も叩き続けて、それでも閉じていた扉、高く築いた防壁が今、音を立てて崩れ落ちた。

隙間ができないように強く重ねた二人の身体。とめどなく流れ落ちる涙は、心の汚れを流していく。小さな痛みと共に。

漠然と勝たなくちゃって思った。世間でも、周りでも、自分でもなく、それは運命ってヤツに。

どんなに苦しくても、辛くても、寂しい思いをしても……今、俺たちは生きているのだから。

差し出した左手に伝わる重み。無防備に眠るリコを見つめ、髪を撫でた。等身大はこんなもんだ。俺の両手にすっぽりと収まってしまっ、小さな女。取り巻く環境が彼女を変えただけで。

今度は逃げられないように、ギュッと右手で抱きしめながら、俺も柔らかな眠りについた。

どれくらい眠ったのだろうか？

左腕に残る痺れは存在の証。俺が目を覚ました時、彼女はまだ静かに寝息を立てていた。

瞼から微かに残る涙の筋。きっと夢の中でさえも、許されることはなかったのだろう。

起こさないように慎重に腕を引き抜いて、少し離れてタバコに火をつけた。

静かな室内に響き渡る石が擦れる音。ゆっくりと深く煙を吸い込み、またゆっくりと吐き出した。

期間は、たった数日間でしかないが、指折り数えても足りないくらいのいろんな出来事があった。泣いたこと、笑ったこと、お互いに許しあったこと。

それを噛み締めるように、一つ一つ思い出しているうちに、タバコが短くなって。結局、ほとんど口をつけずに灰になったそれを、灰皿に押し付けた。

一体これからどうすればいいのだろう。”幸せにする”と言ったものの言葉は漠然としすぎていて、具体的に何を為すべきかまったく不透明で。

ただ一つだけ、リコには…自由になってほしかった。雨の中でも踊れるくらい自由に。

彼女の心の縛りをほどくには、何をすべきなんだろう…。一緒にいるだけじゃきつと足りなくて、でも言葉にするのはどこか違うっているように。

ひどく不安でどうしようもなさに襲われる。

うつむいて下を向いていると、がさがさと言つ音を立てて、彼女も目を覚ました。

『…おはよう』

「…おはよう」

どんな言葉より大切な言葉を互いに交わして、存在を確かめる。

その視線の先には何が映るのだろうか？

何度も否定された話題。頭によぎるのは、ただそれだけ。素人が迂闊にふみこんじゃいけない闇。

だけど…だけど、俺はリコを救いたいんだ。

踏み込んだ先は、100m 遙か上空に張られた細い綱かもしれない。もしくは、いきなり崖かもしれない。

だとしても…本当の意味で救うというのは、きっとそういう事の連続だと思えて。

手助けはできる。簡単にいい人にだってなれる。だけど…救うということは…本当に難しいんだ。

『…そんな思い詰めた顔しないで話してよ…』

寝起きの少し潤んだ瞳のまま、まっすぐに俺を見つめる。

「…うん…これからのことを考えていたんだ。リコを自由にするにはどうしたらいいんだろうって…」

その視線から逃げるように、宙を見て、もう一度タバコに火をつけた。

ゆらゆらと揺れる煙が、細く立ち昇り、霧散する。静かに、消えていく煙。

音が聴きたい。なぜかそう思ったんだ。

なぜ音が聴きたかったのか。それはきつと怖かったんだ。どこにもいる普通のサラリーマンの俺に何ができる？

それを見越されることが…俺は怖かったんだよ。

『あたしはとつくに自由だわ。あの町から飛び出した時から』

吐き捨てるように、下を向いて言う。

「リコ…間違えずに聞いてほしいんだ。確かに、自分だけの力で今生きているのだから、自由ではあるかもしれない。そうじゃなくて…俺が言いたいのは…リコを縛り付けるものからの…自由のこと」

間違えないように、傷つけないように、ゆつくりと言葉を選んで。

反射のように言いたいことを言う。それが会話と思う人が多いけれど、きつと今必要なのは、脊髄で答えるのではなく、自分の思いを過たず相手に伝えること。それが大切な人なら尚更のこと。

少数派だっていい。それだけ俺はリコが大事なんだ。

『…ごめん、わかっていたけど…逃げた。…ふふつ、やっぱりまだなれないよね。ごめんね…』

軽く笑いながら、悲しみを避けるように視線を逸らした。

自分の中の渦巻く変化。それに気付いてしまったから。…無理していたということにね。笑顔の裏の悲しみに気付いてあげられる人間はどれくらいいるのだろうか？

その深い悲しみが、今までのリコを動かしていたのだけれど。

「急に変わるものじゃないからゆっくり…と言いたところだけど…」

『ちよつと待つて』

着信を告げるメロディーが、二人の会話を止めた。

それは着メロでも着うたでもなく、機械的に事務的に鳴る。

【はい…えっ…はい…わかりました…】

唾を飲み込んで、表情を見つめる。その表情は固く、空気を張り詰めた。

短めの電話のあと、会話を再開させるのが憚られるような、不穏な空気。

「…聞いてもいい？」

それを無視するかのように、まるで耳に入っていない。

「リコ？」

肩に手をかけた瞬間、思いきり振り払われて、驚きを隠せなかった。

『…あつ、ごめん。大丈夫だから…』

一つもそれを信じられる要素が無い中で、大丈夫、と言われても信用なんかできるはずもなく。

「…リコ、これ以上何が起ころうと、俺は驚かないよ。…一体、何があった」

ピクリと反応はあるけれど、口を開いたまま、言葉だけが出てこない。吐き出されるのは、ため息に似た呼吸音だけ。

…しばらくの無言のあと、一言だけつぶやいたのは、失敗した、とだけだった。

…失敗した…。

その力なく吐き出された小さな呟きが、その場の空気を支配した。

リコにとっての失敗。

それはきつと、いや確実に二人には良くない知らせ。

音を立てるのはもちろん、息をすることさえためられる重い沈黙。冷たい汗が背中をつたう。

一人爪を噛むリコ。悔しさなのか、クールなポーカーフェイスを崩し、渋面をつくる。

その初めて見る表情が、事態をより深刻化していく。

鬼気迫る表情に声すらかけられず、ただ心配でずっと見つめていた。

どれほどの時間が流れたのだろう。結局、沈黙を破ったのはチェックアウトの時間を知らせるコールだった。

『起きてるか？』

「…ああ」

『どうした？昨日は頑張りすぎたのか？』

下世話な友人の声が余計に神経を尖らせる。

…いや、悪気はないんだ。ただ何も知らないだけで。

「想像に任せるよ」

受話器をフックにかけ、振り返っても、何も変わらない形でリコはベッドの端に座ったままで動かない。

「リコ…？」

不安げな問いかけにも答えるはずもなく。思い詰めた表情を一つも変えずに、ただ脱け殻のようにそこにいる。

…一つ大きなため息をつく。きっと今のリコはそれすら気づかないだろう。

昨日、あんなにわかりあえたと思ったのは何かの幻だったのか？

またリコは一人で全てを抱えている。

チェックアウトまであと5分。刻一刻と腕時計が時を刻んでいく。

このままではお節介な友人が乗り込んでくるのも時間の問題だろう。

肩に触れようとするも、手を振り払われた記憶が邪魔をする。

怯えるな。自分の心に言い聞かせる。

手を伸ばせば…届くはずだろ？

そう、現実には手を伸ばせば、確実に触れられる距離。なのに…。

何度も何度も追いかけて、やっと手に入れたと思って、腕の中をすり抜けていく。

人と向き合うのがこんなにも怖いって気付いてしまった。人を好きになるのがこんなにも怖いって気付いてしまったんだ。

だめだ。溢れてくるのは思い出の洪水。フラッシュバック。婚約者に捨てられた夜。リコがいなくなった部屋。

心の震えは頭では止まらない。いくら脳でストップをかけても、感情の波は止めることができない。

どんどんと冷えていく指先。この冷たい手で、触れてしまっているものか、じっと考えていた。

ちらりと時計を見る。残りは1分。

折れそうな心をもう一度奮い立たせる。

届け

細かく震える指先を、開いて握りしめ、自分のものか確かめるようにもう一度伸ばす。

あと数ミリ。見えない壁に阻まれる。まるで結界。間違いなく作り出しているのは自分の心。

わかつているのに届かない距離。俺は結局声をかけた。

「…タイムリミットだ。出よう」

その声に促されるように立ち上がりはしたものの、平衡感覚を失ったようにフラフラと歩く。海中を泳ぐみたいに。

だけど、ここは陸地。しっかりと地面もある。

危うい。だけど…怖い。

結局、臆病さと守りたい気持ちの戦争は…守りたい気持ちが勝って足取りのおぼつかないリコの左手を握りしめ、手を引いてエレベーターのボタンを押した。

この先のことを考えると、見えない不安に押し潰されそうだ。手はつながっていても、心はつながっていない。それが一番の不安材料で。リコの言う『失敗』とは一体どういうトラブルを引き連れてくるのだろうか？

グングンとめまぐるしく続く数字のカウントダウンを見つめながら、漠然とそう考えていた。

スツと音もせずに関く地上への扉。

虚ろなりコを促すようにして一步前へ踏み出して。

しっかりと握りしめた手だけが、二人のバランスを保っていたに違いない。

エレベーターホールからエントランスに進むと、少し眠そうにして友人が手を上げる。俺もそれに手だけで返し、唇だけで「またな」と伝えた。

すぐさま目の前に停まっていたタクシーに乗り込み、自宅の住所を告げた。

ジロジロとなめ回すように、こちらを見つめる視線に苛立つ。

お前の下世話な想像なんて一つも正解じゃねえんだ

…と、たとえ怒鳴ったところで何も変わりはない。ただの八つ当たりにしかならないのが目に見えて。それは自分の余裕の無さを痛感させる。

…ひどく疲れている。日差しが目痛いぐらい。暖かな車内は、快適さより不快感を上げる。

バックミラー越しの視線を外すようにして、残った左手で頬杖をつき、窓を眺めた。

ガラス越しに反射して映るリコ表情は未だ失われたまま。

出口のない深い森に迷い込んだみたいに、一人もがいていた。

リコ…答えが欲しいよ。傷つくのなんてかまわないから。だから…一人で抱え込むなよ。

伝えたい思いが、浮かんでは言葉にならないまま、霧散していく。

ため息を一つついて、もう一度右手に力を込めた。

朦朧としているリコを早く落ち着かせたいから、財布から札を抜き取り乱暴に手を引いて降りた。

エレベーターが降りてくる時間さえ煩わしいほど、なぜか焦っていたんだ。

身を焦がすほどの焦燥感の正体は、きつと寂しさのせいだろう。

あたりをぐるりと見渡す。いつもと変わらない景色が広がる。

なのに…拭えない違和感は増していくばかり。リコの発言の意味がわからないからなのか、それとも未知なる不安のせいなのかは…自分でさえ見えない。

但し、あながちそのカンも間違いではないことを知らされる。

『…素人にしてはいいカンしてやがる』

『さすがアイツが選んだ、だけはありますね』

立ち並ぶマンションが作り上げるわずかばかりの死角。そこに並ぶ二つの影。

一人は屈強な、もう一人は細身のシルエットが、外壁に映り込む。

開いたエレベーターに飛び乗って、すぐに『閉』のボタンを押す。

ぺたりと床に座り込んだ彼女の手は離さないけれど、不安は募るばかりで、消せやしなかった。

…ひどい汗だ。ぬるりと手にまとわりつく嫌な感じが、いつそう不快感を強調する。

音もなく開くエレベーター。迷うことなく、一直線にドアの前に向かう。鍵を差し込んで捻る。

毎日繰り返している当たり前の行動…のはずが結果は違っていた。

開けたはずの扉が開かない。と、いうことは…鍵が開いていたということがあるか？

そんなはずはない。毎日の習慣。鍵をかけ忘れるなんてあるはずがない。

一気に緊張感が高まる。

だけど…手を離す方が不安で。こんな時まで、感情に左右される自分が少し情けなくなる。

もう一度鍵を捻り、ロックをはずす。

「…リコ、俺から離れないで」

どうせ聞こえていないだろうが、一声かけて気持ちを奮い立たせた。

ゆっくりとドアノブに手をかける。

悪い想像が脳裏を横切る。

もう一度手を握りしめ、静かにドアを開いた。

玄関は変わりのないように見える。靴の位置、数、すべて出ていったそのままだと思われる。

なら…なぜ鍵は？

慎重に歩を進めていくと、荒らされた室内が目に入る。

内側に散らばるガラスの破片。床に散乱するCDの群れ。吹き込む風に、カーテンがただ揺れていた。

『動かないで』

ずっと黙り続けていたリコが、跳ね起きたように大きな声を出した。その声に制されるように俺は歩みを止めた。いや…怯えていたんだ。現実を起こっている非日常の世界。それを受け入れられなくて。

立ち尽くす俺を追い越して真っ直ぐにPCに向かう。

…そうだ。PCは？

床に散乱しているCDに気を取られて、全く何も見えていなかった。ブウン…という音と共に、電源が入る。良かった。PCは死んではない。

画面が立ち上がると、リコは一心不乱にキーボードを叩き続けた。

…速い。どんどんと書き綴られているのは英文。…何かのプログラムだろうか？

流れる文字を追うことが精一杯で、中身など全く理解できずにいた。

『…そういうことが…なら、まだ手の打ちようはあるのね』

独り言のように呟かれた言葉。

”失敗”から”手の打ちようがある”という変化は、希望となりうるのだろうか？

リコならばきつと……。だけど、リコの視界にも、思考にも、俺はいなかった。僅かにも映ってはいなかったんだ。

まだ荒らされた痕跡が色濃く残る床にぺたりと座り込んで力無く笑った。

受け止めたつもりがすり抜けられ、受け止めてもらえと思った期待が、一層傷を深くする。

今ここにいるのは抜け殻。人の形をした何者でもない物。

空っぽだ。胸を風が通り抜けていく。

独り言を呟くりコの言葉など、もう何一つ聞こえなかった。いや、聞きたくなかったんだ。

一つ一つCDを拾い上げる。どれも大切な音たち。それを見るたびに思い出す悲しい思い出。

フラッシュバック。記憶が胸の中を埋めつくしていく。

目の前がグルグルと回り、吐き気がした。

冷たいものが頬を伝う。

…堪えきれない思い、やるせない思い。怒りと悲しみと…絶望。だけれど、不思議と後悔はなかった。

【同情を引こうとしているのか？】

頭の中に鳴り響く声。

…そうヤツは疲れた時をめがけてやって来るんだ。

もう一人の自分が、ボロボロな心を揺らし責め立てる。

【違う】

そんな否定の言葉さえ意味はないのかもしれない。

だって、リコは俺を見ていないのだから。

どんどんと闇に飲み込まれていく心。黒く塗りつぶされていく領域。

視界に映るリコをもつ見ることすら苦痛に変わり、振り払うように目を閉じた。

『乗り込みますか?』

細身で長身の影が、隣の男に問いかける。

『いや…待とう。アイツにはいつもしてやられてばかり。今回も油断させる作戦なのかもしれない』

苦いことを思い出したのか、顔に渋面を作り、腕を組んだまま部屋を睨み付けている。

『…でもあのガキが嘘をついてとは思えないんだけどなあ…』

幾分と崩した言葉で、ちらりと様子をうかがうも、一度待つと決めたらもう動きそうもない。

『…なら、俺ひとりでも行きます。ボスの命令だしね』

”ボス”

その響きにぴくりと反応するも、彼は岩のように動かない。

長身の影は、お手上げのポーズを決めて、ひらりと踵を返した。

少しだけ目を細め、歩き出す背中を見やる。

…うまくはいかない。

確信を持ってそう言えるのは、幾度も相対した経験からか。

自分よりも劣るアイツが…成功などするはずもないのだ。

あの跳ねっ返りの、冷酷なクイーンには勝てる見込みなどありはしない。

どうせ俺たちは捨て駒。闇から闇へ、手を汚すだけの実働部隊。

それでも命令は絶対。とうに忘れたはずの感情が出てくるのは、きっと俺も本当はわかつているのだ。

勝ち目のない戦いは避けるべきだ、と。

もう遠く見えなくなった背中に、やりきれんな、と呟いた。

どれくらいの時間がたったのだろうか？

耳をふさぎ、目を閉じたまま自分と対峙していたら、時間の感覚を忘れてしまった。

腕時計をちらりと見ると、まだ3分ほどしか経っていなかった。

相変わらずリコは、PCの画面に向かったまま。こちらになど目もくれない。

これが彼女の生きている世界。

一つ何かを間違えるだけで、すぐにゲームオーバー。もちろんコンティニューなどない。ないんだ。

覚悟が足りないと言われればそれまで。だけど、いきなりこんなことになるなんて、誰も予測なんてできないだろ？

どんなことも受け止めるつもりだった。でも、それはあくまでも向き合っていればのこと。

結局、俺の誓いなど何の意味もなかったのだろう。彼女にも届かなかったのだろう。

あの時のあれも全て、嘘だったのかもしれない。

他人の心なんて見えない。わからないから、怖い。

心の闇がどんどん幅を広げてゆく。

もう…無理なのかもな。

諦めが胸を支配しようとした瞬間。

『…ごめんね…』

小さく彼女は言ったんだ。

【ごめんね】

…それは間違いなく俺に向けられたものだったのだが、心のどこかがそれを否定してやまない。

巻き込んでしまった後悔なのか、またそこに二人は戻ってしまっていた。

あの時、何度も確認した気持ち。あんなに確かめあつたはずなのに、まるで幻のように消えてしまっていた。

俺の幸せは彼女のそばにしかない。それはもう消えない事実。

自分だけが傷つけばいいという彼女の破滅的な思考も、過去の傷跡がもたらした習慣。

…結局、今あるものにしがみついてしまうのかな。新しい一步を踏み出すよりも、過去の慣例に縛られているのだから。

どんな理想の未来よりも、今ここで起こっている全てが現実。それを受け入れられなければ…未来など見えやしない。

開き直りとも、自棄ともつかない思考でネガティブな思いを振り払った。

『…あたし、また一人になつてた…』

自分を責めるように吐き出す小さな本音。

彼女が求めている言葉は、どんなものだろう？

正解を探すように、次々と浮かぶ言葉たち。

だけど、実際に口をついたのは…説明してくれ、だった。

一度、悲しい表情で視線を切り、大きく息を吸い込むリコ。

痛みが伝わる。空気中の成分に悲しみが含まれたように。

皮膚でも、肌でも…感覚でも伝播する。

『その前に…お客が来るわ。離れていた方がいいわ』

えっ？と、聞き返す間もなく、窓ガラスが割れると共に、人が転がり込む。

…ウオッチマン。

まるで同じ人物とは思えないほどに、危ない目つき。

呆気にとられている俺を視界に捉えると同時に、拳を繰り出した。

…当たる

思わず反射的に目をつぶり、衝撃に耐えようとしたが…それは届くことはなかった。

ドサリ、と崩れ落ちる身体。

目の前に広がる光景に思わず目を疑った。

「これ…リコが？」

『唯人さんに意識が集中していたからね』

と、にこりと微笑む。

…それにしても、あまりにも想像がつかない。

こんなに簡単に人は気絶するのだろうか？

事実、ピクリとも動かないのだから、間違いなくそうなのだろうが。

「…す、凄いな…」

思わず言葉を失って、本題を忘れかけたけれど、何事もなかったかのように話し出すリコの言葉に、一気に現実を引き戻された。

確かに説明してくれと心が叫んだ。

だけど、目の前の光景にそんなことに意識が向くはずもなく。静かに話し出す、リコの口が動くのを目で追った。

『こいつは”実行部隊”。…その中でもポーン。チェスはわかる？ただの駒。文字通り兵士なのよ』

…いきなり次元のぶっ飛んだ話に、頭が回らない。ただ文字を追うのが精一杯で、理解などできずにいた。だから、とりあえずそれを聞くだけに集中した。

質問など後でできる。そう思うことにして、次々と一呼吸で話し出すリコについていかないと。

意識を切り替えて、唇を見つめていた。

『失敗。…そうあなたに言ったよね？あれは…失敗でもあるけど…そうならないかもしれないって今なら言えるわ』

一つ一つの言葉を噛みしめるように碎いていく。

『こいつが来た時点で確信したわ。きつと…相手は”ナイト”』

…ナイト。ビショップでもなく、ルークでもない。縦横無尽に飛びはね、神出鬼没に敵陣を切り裂く。

直線的に動くのではない。きっと変則的に。こちらに近づいているのだらう。

俺の思考を読んだ上で、小さく頷く。

『だから…いいのよ。今ここで直線的に攻められるのは、形勢的にも不利。それはわかる?』

俺もこくりと頷いて、同意を返す。

『…実はね、シンは生きてるわ』

「えっ?」

思わず聞き返してしまう。きっと驚いた表情をしたのだらう。それほど衝撃があった。

…シンが生きていたなんて。

間違いなく、始末されたと思っていた。その事実が嬉しくて。

『…おめでたいわね…どうしてここにコイツが来たと思う?』

足元に転がるウオッチマンを指差して、あの冷たいすべてを凍らせ

るような顔をする。

…言葉が指す意味。それは…残酷な想像。

「裏切った。そういうことか…」

僅かな沈黙は、肯定を示す。

『…正確には寝返ったとも言うのが正しいわね。あたしたちの情報を流すことで、ボスに尻尾を振ったのよ。きつと…何日かだけ生き延びるために、ね』

それが悲しいのか、空しいのかわからない表情。 たった何日かだけでも、生き延びたいのは当然だろう。それを裏切りと思うには…俺にはできなくて。

俺がシンでも…きつとそうしてしまうのではないか？

そっちの世界では、それが当たり前なのか？俺が足を踏み入れたのは…そんな世界なのか？

次々に吹く嵐。二人の間を引き離すように。それはまだ入口にすぎないんだ。

あいつがいなくなってから20分。音沙汰もないところを見ると、やはり失敗したのだろう。

…クイーン。その名前を思い浮かべるだけで、背筋に寒気を感じる。勝てる見込みなど1%もないだろう。それなのにボスはなぜ俺たちを向かわせたのだろう？

プライドなのか、意地なのか、俺には何もわからないが。

ちらりとマンションを見やる。外から見ても何の変化もない。

ふう…と大きなため息をついて空を見上げた。

一体、俺は何のために？

誰も答えられるはずのない問いかけは、少しずつではあるが強ばりをほぐしていく。

自己暗示のように自分に言い聞かせる…理由なんて必要ない。ただ任務を遂行する。それが俺の役目であり、生きる証。

何も考えないようにして、一步步マンションのエントランスへと近づいた。

キラリと胸から下げた馬をあしらったペンダントが光を反射する。
それこそが自分の存在の証明。

事態は急を告げる。

シンから洩れた情報が、俺たちを危険に晒している。ただ、それを責めるなどできるはずもなく。

もう現実には、実際に動き出してしまっているのだから。

沈黙はより一層不安を募らせる。

事実を事実として受け入れるまで、二人の間に静かな時間が流れた。

『…たぶんもうすぐ…ナイトが来るわ』

初めから決まりきっていたかのように、リコが告げる。

…どこからその情報を得たのだろうか？

たぶんPCからだろう。そしてそれは、他に内通者がいることを示す。組織も一枚岩ではないのだろう。大きくなればなるほどに、派閥は増え、統制は取れなくなるものだから。

「それで…俺はどうすればいいんだ？」

理解した上で、少しでも自分の役割を探す。

ちよつと困つた表情をつくり、柔らかに微笑みを返すリコ。

きつと俺ができることなど何もないのだろう。初めからわかつていたこと。それなら、俺は盾になろう。身を投げ出せば、一度くらい守ることができるはず。

いつ来るのかわからない不安に押し潰されそんな気持ちを、彼女を守る、という意味に変えて。

いつでも動き出せるように、壁に背中をつけて、軽く肩を回した。

『…唯人さん…』

「何も言わないでくれ。俺に力なんてないのはわかってる。だけど、君を守りたいんだ」

そう告げて、割れた窓に近づいた。

きつと来るのなら、正面ではないだろうから。

そう思つた瞬間、予想に反してインターホンが鳴り響いた。

このご時世、連絡のない来客など、招かれざる客に違いない。

セールス、新聞、NHK…。いずれにしても、ドアを開けたくはない。

ちらりとリコの顔を見やると、少し緊張した面持ち。その表情だけでテレパシーのように察した。

…ドアの向こうにいるのは、敵。

荒れた室内に走る緊張。窓から容赦なく吹き込む冷気に、吐く息も白い。カーテンも風に煽られて揺れる。

窓の方から玄関の方に身体を向ける。背中に走る緊張と、拭いきれない不安を抱えながら、一步步慎重に歩を進める。

玄関と居間を隔てるドアノブに手をかけたとき、もう一度チャイムが鳴った。

何があるかわからない。手をかけたまま、一度返事をする。

『そこにリコはいるんだろ？話がしたい』

落ち着いた迫力のある低音で、真っ直ぐに言う。

こいつは違う。今までの誰とも。自分なりの美学なのか、話がした

い、と正面からドアを叩くなんて、小者にはできるはずはない。

もう一度振り返ると、視線だけで頷きを返す。

それを確認して、玄関への扉を開いた。

『君も不安だろ？そのまま構わない。時間は取らせないつもりだ』

俺の心を見透かすように、落ち着き払った態度は、自信の現れなのだろうか？

その声に応えるようにして、リコが声を上げる。

『それがあなたの悪い癖ね。話を通じるとでも思ってるの？』

まるで体温など感じられない冷たい声。

思わず耳を塞ぎたくなるほど、冷たく響く。

『相も変わらず口だけは達者だな。そちらの青年も苦労しているだろう』

ドア越しで見えるはずもないのに、鋭い洞察力での読み合いが続く。

俺の役目は…ただ黙って聞くよりほかは無いのだろう。

『そんなことあなたに言われる筋合いはないわ。本題は何？』

『つれないな。しょせんは相容れないと言うことか。では…単刀直入に言おう。戻るつもりはないのか？』

…戻る。それは俺が見てる世界とは別の世界。より近づいた俺にはそれがよくわかってしまう。

戻るべき場所。それは…あちら側なのか、こちら側なのか？

リコ自身も揺れ動いているのは間違いない。コロコロと変わる表情や人格。それがその証明になるだろう。

リコよりもかなり緊張していた。いや、これは原始的な恐怖。

こちら側に繋ぎ止めているのは、ただのわがままかもしれないのだから。

冷たい響きと、風が吹き込む室内はより気温を下げていく。

扉一枚の間にどれほどの壁があつたのだろう。

リコと向こうにいる”ナイト”との壁。

俺が生きていた世界との壁。

もちろん俺たちは今、現実的に同じ側にいるのに、その間にも大きく高い壁を感じた。

【戻れないか？】と尋ねる彼の言葉には妙な説得力さえ感じて、意識しないようにしていても、まるで刷り込みのように、あちら側に戻る人間なのではないか、とさえ弱い心がさえずりだす。

だけど、心のどこかで迷わずに信じている。リコが否定してくれることを。

『今さら戻れないわ。戻る気があれば…あんなことはしないでしょっ？』

吐き捨てるように力強く”戻れない”と宣言するリコに、そつと胸を撫で下ろした。

『きつと…答えはわかっていたんだよ。初めて会ったあの時から』

少しだけ何かを噛み締めるようにして漏れたのは、それもまた一種の本音なのだろう。

『…そうかもしれないわね…』

幾分と柔らかく、そして切なく響くのは小さな嫉妬。俺の知らない時間、知らない彼女を、彼は知っているんだ。

チクリと小さなトゲが胸を刺すのを、おくびにも出さずその痛みをこらえた。

今はそんな場面じゃないのは、当たり前前に理解していたが、感情は理性とは別のところで目を覚ましていた。

お互いに過去を思い出しているのか、僅かに時の流れが緩やかに変わる。ちらりとリコを見やると、険しい顔を変えずに、目だけで笑う。

優しげな目が、逆に俺の痛みを膨らませる。

覚悟ならいくらでもしてきた。そう、いくらでもしてきたはずなのに、今の立ち位置はお荷物でしかないのだから。

『俺にはここしかない。戻るべき場所も、進むべき場所も。戦いの中にしか存在を見い出せはしないのだ』

張りのある声で出されたのは宣戦布告。まるで獅子の咆哮のようにビリビリと空気が震えた。

『あなたは…いや、言葉はこれからは平行線ね…』

「違う」

気づいたら叫んでいた。

意識が俺に集中するのがわかる。

「進むことも戻ることも出来るんだだけどあんたはその可能性を捨てちまっただけじゃないか考えることを忘れて、ただ楽な方に逃げただけだ」

『…お前に何がわかる』

鼻で笑うようにして吐き出された言葉。

確かに、俺は何もわかってはいない。だけどそれを許せはしなかったんだ。

二人のこれからのためにも。

くっ、と喉を鳴らしたまま、吐き出されたのは『お前は何も知らない』という事実。

それはキリキリと締め付けられる。

『逆に君に問うが、お前はこの女の何を知っている？こいつはなあ…魔…』

『これ以上、口を開くなら…たとえ相手が誰だろうと後悔することになるわ』

先を遮るように、リコが叩きつけるように話を切る。

『…過保護だな。君はこの先を知りたくないのか？』

甘い蜜のような誘い。文字通り甘言なのだろう。誘われた先は、間違はなく罠。

だから静かに俺は言う。

「知りたくないとは言えないけれど、俺はリコを信じている。過去は過去でしかないし、今は俺という。それが現実だろう？」

小さな笑い声から、大きく変わる。

それはいつしか怒りに変わる。

『過去は過去でしかない。素敵な言葉だ。だがそれは幸せに生きてきたから言えることだ。環境を選べなかった俺たちに、過去こそが生きる原動力なんだ。それがわからないガキに、リコを任せるわけにはいかん』

「過去に縛られた人間に、もう彼女は渡さない」

きっと勝てるはずなどない。最初からそんなことは見えている。それでも俺は、後には引けなかった。いつまでもリコを、悲しみに縛り付けるわけにはいかないんだ。

ふと神話を思い出す。アンドロメダとペルセウス。

囚われの姫を助け出した勇者。ハッピーエンドの原点とも言われるそれを。

そうか、俺が求めていたのは、勝利でも支配欲でもなく、彼女の解放だったのか。

なぜか力が湧いてくる。もう何も怖くなどない。ただ俺は俺の思うままに。

一度、拳を握りしめる。強く手の平が白くなるほどに。

一歩外へと近づこうとした瞬間、その手にそっとリコが触れ、小さく首を降った。

彼女の中にあるのは絶対の確信。それもわかっていて。だけど、俺は小さく微笑んで、その手をそっとはずした。

『やめて行っちゃダメ』

あの冷静なりこじゃなくて、昔のりこが帰ってきたみたいだ。うん、それだけで充分だ。

俺はもう一度微笑んで、振り返らずにドアを開いた。

まるで岩みたいだ。隆々とした逞しい体躯。ドアを開いた先に待ち受けていた”ナイト”と呼ばれるその男。

何も言葉は交わさずに、静かにその男の後ろに着いていった。

その男の背中に見えるのは自信。これから闘うであろう俺に、背を向けながら、まったくこちらを気にする様子も見えない。たとえば俺が、後ろから襲いかかることも可能性はあるだろうに。

ただ、お互いにわかっていたのだろう。交わした言葉は一瞬でも相容れないことを。そして、正々堂々と闘わなければならないことを。

中心街を外れた倉庫街。きつと昼間はトラックや、人であふれかえるだろうに、今では人の気配すら見えない。

ずっと無言で歩いていた背中が止まり、こちらにくるりと振り向いた。

正面から見据えられると、なおさら威圧感を感じる。

『正直、失望したよ。あいつが組織を捨ててまで選んだものは、こんなドン・キホーテだったとはな。君にもわかるだろ？こんな闘いなど意味をなさないことを』

挑発的なセリフは、緊張感を高めていく。まるで酸素が薄くなったかのように、張りつめていく温度。

「それでも彼女は俺を選んだ。お前や組織ではなく、俺を。確かに、俺はお前には勝てないだろう。だけど、それでもやらなきゃならない時もあるだろ？それとも、お前は弱い奴とばかり闘ってきたとでも？」

吐き捨てるように舌打ちをして、蛇が鎌首をもたげるように、こちらを睨み付けた。

『きっと後悔するぞ。その減らず口を今すぐに塞いでやる』

怒りを露にして、今にも襲いかかろうという気配。

まさに火蓋が落とされる瞬間に、滑り込んできた車のヘッドライトに照らされる。

いったい誰だ？

そちらを見ようにも眩しすぎて、手をかざしても見えない。

一方、ナイトの方も同じようで、知らされていない様子。

静かに扉が開き、降りてきたのは初老の男。

見覚えなどない。

ちらりとナイトの方を見やると、怯えた様子で下を向いていた。

…誰だ？

あのナイトを震え上がらせることのできる人物。

単純に考えて、一人しかいない。

「お前がボスカ」

ずっとリコを苦しめてきた人物。全ての悪の正体。こんな毒気のない爺さんが…と思ったのは、目を見るまでだった。

忘れもしないあの目。全てを憎み、自分以外の人間など信用しない、凍らせるような目。

それが更に確信となった。

その冷たい瞳は、まったく俺のことなど見ていなかった。

きつと路上に転がる石ほども。

『どうして命令を聞けない？』

ボソリと囁れた声でのつぶやきは、聞き取れないほどに小さく暗い。

ただ、聞き逃すことは許されない迫力もある。

『も、申し訳ありません』

明らかに小さくなって、震えた声でナイトが答える。

『まあいい。今日のわしは機嫌がいい。一度亡くしたものが返ってきたからな』

助手席をちらりと見やり、にやりと笑う。

勝者の笑み。それがさす事実。俺の現実を、根底から覆した。

見なくてもわかる。ナイトが受けた命令とは、リコの奪還。亡くしたもののとは……リコ自身のこと。

「…どうして？」

誰に聞こえるでもなく、自然に口をついて出た言葉。

もちろん答えなど返ってはいない。聞いたら全てを教えてくれるようなことは、現実にはあり得ないのだから。

小さなつぶやきは、鳴り響く心音と共に痛みに変わる。自問自答、抜け出せない忘れたはずの闇。

頭の中で何かが弾けた。

声にならない叫びと共に、飛び出した俺の体は宙を舞う。

…ナイト。走り出す足に合わせて、その軸足を払ったんだ。

冷静になどなれるはずのない俺は、受身も取れずに地面に叩きつけられ、身体を強く打つ。

反射的に咳が出る。

それでも地面を掴み、立ち上がった俺が見たものは、世界で一番見たくない映像であった。

あの凍るような目で、ベビーコルトを構えているのは。その照準の矛先は。

結局、彼女が選んだものは俺ではなかった。

それが全て。

目の前にある全てを否定した。

光景、状況、自分、他人。とにかく全てを。

沸き上がる衝動は、憎しみや怒りじゃない。まして、悲しみでも痛みでもない。

ただ黒い気持ち。

何の色にも染まらず、どんな色をも飲み込んでしまう黒。

思考回路にもやがにかかる。これ以上の負荷は危険と判断している。鳴り続く警報を無視して、その先へ。

あの時の笑顔も黒く塗りつぶし、あの時の泣き顔も黒く塗りつぶす。

ものすごい速さで思い出を侵食していく黒色。

もう、まともでなんかいられない。

きつと誰が見ても、狂っていると言っただろう。

結果はわかっているのに、俺は何度も立ち上がり、そのたびにナイトに跳ね返された。

もう俺を見ていない瞳のために。

腫れ上がる顔。きしむ骨。それでも俺は、真っ直ぐに目指した。

身体中が痛い。もう立つな、やめてしまえと身体が訴える。

でも心は一つも折れる気配すらなく。まるでゾンビのように、震える足を引きずりながら、その照準の先へ。

もう理由なんてなくて、ただ俺は前に前に進んだ。

『とんだ茶番だな』

枯れた声で、傍らにリコを置きながらボスが言う。

悔しい。届かない一歩が。

何度殴られただろう。もう立つことすら難しい。固い地面を掴み、それでも這いずるように前へ。

目も開かない。だから、顔も見えない。

絶体絶命なのはまったく変わらないのに、俺はそんなことすら考えてはいなかった。

進む、戻される、進む。

ある種、異様な空気が場を支配していた。

『もうやめろ、これ以上は命にかかわる。意地のために死ぬつもりか？俺は向かって来る者に手は抜かない。お前だってわかってるだろ？俺達は棲息域が違うんだよ』

「うるせえ！！なら殺してみろよ。手加減なんかするんじゃない！！」

精一杯、振り絞って出した声は、どれほどの大きさだったのだろうか？

口の中もズタズタに切れ、腫れ上がり、喋りにくいのも確か。

『面白い、ならクイーン…引金を引きなさい』

辺りに緊張が走る。ざわりと空気が変わるのがわかる。

さすがのナイトも手を止めて、固唾を飲んでいるようだった。

静寂が包む。感じるのは意思の渦だけ。

ナイトは考える。初めから計画通りだったのではないかと。クイーンを泳がせておいたこと自体が。

そして最小の動きで、最大の効果を出すために、この場を用意したのではないかと。

…残酷だな。と口の中でつぶやいて、せめてものはなむけにそつと踵を返した。

「どうした？お前のボスが命令してるぜ？早く撃てよ」

地面に大の字に寝転び、その瞬間を待つ。もうどうでもよかったんだ。裏切りの果てにあるものは、ただの静寂。漆黒のガソリンも今では空っぽになっていて。

『ほら、こいつもそう言っているんだ。早く楽にしてやれ。それともこいつにやらせるか？どちらにしてもワシには同じことだ』

結局、死ぬことには変わりないらしい。

それならば、せめて一度は本気で愛した人の手で。

全ての思いが、リコに引金を引かせようとしていた。

それでリコはクイーンとして、完成するのだろっ。

指先さえ自由にならない身体に反して、思考は妙に冴えていく。

俺はそのための駒でしかなかったわけだ。

どうしてこの人は立ち上がるのだろう。

ピタリと頭に照準を合わせながらあたしは考える。

もし、あたしなら… 適当に切り上げて、反撃のチャンスを探つ。

一度くらいなら尻尾を振る真似くらいしてもいいわ。

あの時の痛みに比べたら、そのくらい何てことはない。

無様に地面に転がりながら、目は一度もそらさず、未だに強い光を宿している。

なぜそんなに他人にこだわるのか、まったく理解ができない。

裏切ったあたしのことなど忘れて、日常に戻ればいいのに。

愛とかくだらない妄想に、取り憑かれているのではないかとさえ思う。

生殺与奪の権利はあたしにある。この人差し指に力をこめれば… あつたもの変わるだけ。

他人の命などあたしに関係ないわ。…ただ、名前があの子と一緒に

だけ。

それなのに、どうして引金が引けないのだろう？

キングの命令は絶対。

組織にいる者なら、一般常識以上に当然のルール。

もちろん命令は聞こえていた。

けど…。

あたしは今までに一度も手を汚したことはない。組織には、そこにいるナイトのように実行部隊がいるから。

なのに、なぜ今回はあたしに引金を引かせようとするのだろう？

思考の癖を素早く読み取るように、反射して考える。

【どちらでも同じこと】とキングは言ったけれど、それはきっと不自由な二択。予め答えが決まっている。

では、なぜあたしにそれをさせたいのか。

本当に殺すだけなら、ナイトだっていい。なのに、一撃でトドメをさすやり方ではなく、まだるっこしい方法で、未だ生かしている。

これはきつとあたしに対する挑戦。いろいろな要素が絡んでいる。

忠誠心、度胸、痛みや悲しみ。

この人差し指を引けたなら、組織の中での地位は磐石なものになるだろう。

引けなかったなら…きつとあたしはまた一人ぼっちになってしまふ。いや、すぐに会いに行けるかな。

唯人、お姉ちゃんバカだから、何かを間違えたみたい。

誰も巻き込みたくなかったのに、結局あたしは誰かを不幸にしてしまふ。

同じ名前だからと、興味さえ持たなければ、こんなふうに傷つくこともなかったのに。

もう許してくれないよね。

霞がかった思考の果てには、あの頃の自分。弱かった、誰も守れなかった自分がいて。

遠い昔に無くしたはずの感情が、何度も立ち上げる姿に連動する。

あたしが唯人さんに見たものは憧れだったのかもしれないね。

状況にはなんら変わりはない。

地面に転がる男が一人。

腕を組んで後ろを向いている男が一人。

銃を構えたままの女が一人。そしてその横で成り行きを見守る老人が一人。

ただ空気だけが張りつめていく。呼吸さえ憚られるような静けさ。

灯の消えた倉庫街、明かりはヘッドライトだけ。

それぞれの思いが渦を巻き、複雑に絡み付いていた。

こんなにも死というものを、身近に感じたことはない。

すぐ隣に死神が鎌を構えているようで、荒い呼吸がなおさら粘りつく。

力が欲しい。死の間際でそう思った。結局、誰一人救うこともできず、ただ地面に転がる自分が情けなかった。

また、君にその顔をさせてしまったね。

胸を罪悪感が通り過ぎる。

君の幸せはどこにあるのだろうか？

そこにいるということは、きっとそういうことなんだね。

ああ、もう享受の段階まで進んでしまったらしい。

あるがままを受け入れるしかないと歌ったのは、ビートルズだね。

もう指先さえ動かないよ。

じいん、と痺れる感覚が脳を襲う。強すぎる痛みを麻痺させるように、脳内で大量に分泌されているのだろう。

こんなにも覚めているのに、刻一刻と眠りが近づくのがわかる。そしてそれはきつと永久の眠り。

思い残したことはなんだろう。

まるで羊水の中を泳ぐような、痺れる感覚のまま、漠然と考えたのはやっぱりリコのことだった。

「リコ…リコ…！」

答えなどいらな、だけど俺は必死に叫んだ。

君の中の君に届けたくて。

急に名を呼ばれて、身体がビクリと跳ねる。

誰？あたしを呼ぶのは。

引くか、引かないのか、という二択にしか目が向いていなかったあたしを現実に戻したのは、やっぱりあなただったのね。

聞こえているかなんて知らない、わからない。

ただ精一杯の力で叫ぶ。

唯人の想いを無駄にするな！！と。

『しづといな。どこにそんな余力が…。なるほど、クイーンが選ぶわけだ』

目を細めながら、ふむ、とあごに手をやり、つるりと撫でる。

と、同時に隣にいるクイーンの表情の変化に戸惑いを隠せなかった。

何もかもを信じない凍った瞳の奥から、それを溶かす熱さの涙がこぼれていた。

ワシが作り上げてきた仮面が剥がれ落ちていくではないか。

このままでは危険だと長年のカンが告げる。

だが、老いとその行動を一步だけ遅らせた。カチリと突きつけられる銃口。

『これ以上誰も傷つけない!!』

潤んだ瞳で叫んだのは、本当にクイーンなのか？

もう後ろを振り返ることもないと、視線を切ったナイトの視界に飛び込んできたものは、状況を根底から覆すものであった。

『何をしている!!狂ったのか!?!』

駆け出そうとする身体を、キングは左手で制した。

そう、迂闊に近づけば、キングの命が危ない。目の前の光景に、思わず我を忘れていた。

『お前は相変わらず、冷静さが欠けているな。もうちょっと頭を使え』

そんな状況の中でも、何ら日常と変わらないような台詞。その精神力には、小さな驚きを隠せなかった。

『…非常に残念だな』

リコの方を振り返り、突き付けられた銃口など意に介さず、話を続けようとするキングに、もう一度狙いを定めた。

『…あたしは本気よ』

手のひらに溜まる汗。どんどんと速度を上げる鼓動。それに気づかれないように、しっかりとグリップを握りしめる。

『それはなおさらだ。一体どうしたんだ？ワシが教えてやっただろう？冷静になって、メリットとデメリットを考えてみるんだ』

聞いちゃいけない。一度かぶりを振り、何も答えずにただ目の前のキングを見据えた。

ふう、とわざとらしくついた溜め息。

『お前には失望したよ。せっかくワシが手をかけて育てたのに、そんな一時の感情に左右されて、道を誤るなんてな』

『間違つてなどいない!!』

聞くな、答えるな、と頭では理解していても、動き出した感情は留まることを知らなかった。

『クイーン。忘れたのか？感情は利用するものであって、利用されるものではない。そうだろ？』

誰も信じない瞳は、真っ直ぐにリコだけを捉えていた。

寂しげで、悲しげな目。それは自身の虚無感を刺激する。

あの日、あの瞬間。もう誰も信じないと決めたあの時を思い出してしまふ。

背中で消えた命の重み。その呪縛は解けてなどいないのだ。

『もう一度思い出せ。あの時、誰がお前を救ってくれた？誰が弟を救ってくれた？』

ダレモタスケテクレナカッタ。

カミサマナドイナイ。

シンジラレルノハオノレノチカラノミ。

刷り込まれるように、教えられたルール。

自分から感情の波が離れていくのがわかる。

人工的に作られた無機質のような、あたしの中のアタしが目を覚ます。

リコが対峙しているのは、目の前のキングではなく、それに作られたクイーンであった。

キングをキングたらしめたもの。それはひとえに並外れた洞察力に他ならない。

人身掌握術など生ぬるい言葉ではなく、支配するのだ。

まるで棋士のように、何十手も先まで読んでしまい、それをなぞるように話を進めていく。

ただ、リコだけは違っていた。

誰も映さない瞳は、誰も信じない。

そこに魅力を感じたのだ。

どんなに力はあっても、老いには勝てない。

後継者たるべく作り上げてきた最高傑作が、こんな形で壊されるなどあつてはならないのだ。

およそ初めてとも思われるような読み違いも、感情を剥き出しにして向かって来たから容易く掌握できた。

…が、不満は残る。

どうしてあの若造を信じてしまったのか。

把握できないというのは、性に合わない。

銃口を突き付けられながら、そればかり考えていた。どんどんと虚ろになる瞳を見据えたままで。

葛藤。

どんな相手にも冷静かつ冷酷に、判断をしてきたあたしの最大の敵は自分だった。

駆け巡る想い。

あの時、味わった深い絶望。

今でも何一つ忘れてなどいない。

あたしを今でもこの世に縛り付けているのは、暗くどす黒い感情だけ。

【違う、そうじゃない】

いくらあたしが言い張っても、あの時のあたしを救える筈もなく。

まわりつくように思い出すのは苦しみ、悲しみ…そして大きな痛み。

取り戻したばかりの、生まれたての稚児のような脆弱な感情は、黒く強大な力に飲み込まれていく。

【希望を持つから絶望がある。望まなければ、絶たれることは初めから無い】

【実の弟の命を奪っておいて、幸せになどなれるはずもない】

【お前が望んだから、目の前で何の力も無い人間が転がることになるんだ】

螺旋のように絡み付く言葉は、芽生えたはずの感情をいとも簡単に摘んでいく。

まるでガラスのように、細かなひび割れから、粉々に崩れ落ちていく。

唯人さん。いくらあなたでも、もう拾い集められないわ。欠片さえ見つからないよ。

一つの身体に二つの感情。オーバーフロー。

押し出されたのは…やはり柔らかな感情の方であつた。

静かに銃口を降ろし、力なくだらんと下げられた腕。

キングは勝利を確信していたに違いない。

にやついた表情が全てを物語っている。

誰もが安心しただろうその時。

がつ。

鈍い音と共に、キングの身体がくの字に曲がる。

全身を倒れ込ませるように飛び込んだ。

間隙。

ある種の異様な空気に支配されていた空間。

あのナイトでさえ、気づくことができなかった。

キングの身体が、スローモーションで跳んでいくのを、横目で捉えるのが精一杯だった。

「ああああああああっ」

ただ吠えた。腹の中から溢れてくる感情を。

我を失うとはこのことだろう。今までの怒りなど、まるで怒りではないぐらいに、真っ赤な感情が身体を操っていた。

ギラつく目で、辺りを見回す。ふうふう、と荒い呼吸で。

…キレてやがる。まるで正気の見じゃない。素人は、ああいうのが一番危ないんだ。

長年の経験が危険だと告げているのに、そこから一步も動けない。

まさか…俺が…気圧されているとでもいうのか？

キングのピンチにも関わらず、足から震えが消えない。

頭での理解の範疇を越える相手。あのガキの言う通り、いつの間にか、挑戦者の立場ではなかったというわけか。絶対的に強い立場から、邪魔者を組織的に排除するだけ。

あの魂からの叫びに、足がすくむのも仕方がないということか。

ナイトは笑った。

誰かをでも、自らをでもなく。自然に口をついて出た笑い。

それは気分を高揚させた。

敵がいる。その事実こそ、俺の存在意義。

『おおおおおおおっ』

ナイトもまた、荒ぶる感情を抑えることもせず、吠えた。

それは支配からの解放とは気づかずに。

自らの意思で吠えることすら忘れていた自分に、大切な何かを思い出させる。

…何が起こった？

不意をつかれた一撃に、受け身一つも取れなかった。

最初に出てきた感情は怒り。傷一つ付くはずのない高みに存在している自分が、なぜ這いつくばっているのか。いかなる理由があるうとも、それが許されるはずがない。

あの役立たず！！守るしか能のないあのウスノロに、今までどれだけ世話してやったと思っているんだ！！

沸々と湧き起こる怒り、それは二人の咆哮に欠き消された。

大気を震わせるほどの叫び。

そこには今まで、彼が支配してきた感情など、万に一つも存在していなかった。

ただ、吠える。

獣のように。

根源からの恐怖。揺さぶられる感情。今までに抱いたことなど、一度もない。

地べたに手をついたまま、ちらりとクイーンを見やる。未だ、変わらず虚ろな瞳。

まだ…ワシに運はあるわけか。クイーンの中の狂気。それさえ動かせれば…他に何も必要ない。

腕に力を込め、身体を起こした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9583o/>

アザーサイド

2011年10月8日06時11分発行